

Bhaṭṭikāvya と *Rāvanārjunīya* の比較考察 ——*kāraka* 術語規則 (A 1.4.23–55) の例証——*

川村悠人

1 はじめに

6世紀初めから7世紀中頃に活躍した詩人かつ文法家バツティ (*Bhaṭṭi*) が著した *Bhaṭṭikāvya* (*BhK*) は、*Rāmāyaṇa* を題材にラーマ (*Rāma*) 物語を歌い上げる中で、パーニニ (*Pāṇini*, 紀元前500年頃) の手になる *Aṣṭādhyāyī* 中の文法規則及び当時流布していた修辭等を巧みに例証して、文法学と詩学を教示することを企図した作品であり、この意味で〈美文論書〉 (*kāvyaśāstra*) と呼ばれるジャンルに属している¹。同時に本作品は伝統的にマハーカーヴィア (*mahākāvya*) の一つに数えられ²、後代の文法学にも影響を与えた重要作品である³。

Bhaṭṭikāvya は文法規則を例証する文法学セクション(「雑多の部」・「主題の部」・「定動詞の部」)と修辭等を例証する詩学セクション(「美学の部」)に大別されるが⁴、Nobel [1924]、大類 [1954a]、Hooykaas [1957a, 1958c]、Sudyka [2000, 2003, 2005ab]、Narang [2003] 等の研究に代表されるように、従来の研究は主に詩学セクションに焦点を当てて作品を文学的・修辭学的観点から考察、評価したものがほとんどである。また、De [1976]、Kane [1971]、Lienhard [1984] 等による古典 Sanskrit 文学の代表的な概説書類も作品のそのような一側面にしか触れていない。驚くべきことに、局所的あるいは簡素にそれを扱う研究 (Trivedī [1898] や Narang [1969] 等) やその表面的な翻訳研究 (Schütz [1837] や Godabole [1886] 等) は多少あるにせよ⁵、文法学セクションを真正

*本稿を著すに当たり、日本学術振興会特別研究員である友成有紀氏から、ジャヤマンガラ注付き *Bhaṭṭikāvya* のテキスト (Bāpata [1887]) を提供して頂いた。この刊本は本稿で底本としたものである。またその他の諸資料の収集に際しても友成氏の助力を得た。ここに記して友成氏に謝意を表する次第である。

¹ 〈美文論書〉 (*kāvyaśāstra*) については4を見よ。

² *Bhaṭṭikāvya* がマハーカーヴィアと見なされる点については川村 [2012a: 86–87] を参照されたい。

³ この点については川村 [2012a: 86, fn. 5] を見よ。*Durghaṭavṛtti* 中に引用される *Bhaṭṭikāvya* の詩節に焦点を当て、文法的な問題を孕むバツティの表現をシャラナデーヴァ (*Śaraṇadeva*, 12世紀) がパーニニ文法学の体系の中でどのように正当化しているか、また彼がどのような文脈で *Bhaṭṭikāvya* 中の表現を引用しているかを他の文法家達の解釈を挙げながら考察した論文として Shah [1984] があり、本論文は *Bhaṭṭikāvya* が後代の文法学に与えた影響を知る上で有用である。*Durghaṭavṛtti* に加え、クラマディーシュバラ (*Kramadīśvara*, 12世紀から13世紀) の *Samkṣiptasāra* やバットージディークシタ (*Bhaṭṭojidīksita*, 16世紀後半から17世紀早期) の *Siddhāntakaumudī* とその自注 *Praudhamanoramā* でも *Bhaṭṭikāvya* の諸詩節は多数引用され、多様な議論がなされている。*Bhaṭṭikāvya* が後代の文法学へ与えた影響を探る一環として、現在筆者はそれらの諸詩節とそこでなされる議論の概要を精査、整理中である。

⁴ *Bhaṭṭikāvya* の構成については川村 [2012a: 89–90] を参照されたい。

⁵ 本邦でも和田 [2012] が *Bhaṭṭikāvya* 第1章の邦訳を発表し、本作品が注目を集めはじめています。もちろん邦訳による作品の紹介が進むのは喜ばしいことであるが、和田 [2012] には誤植と明らかな誤訳が目立ち、肝心の文法規則に関する注記もほとんど無く、はっきり言って学術的使用に耐え得るものではない。「雑多の部」 (*prakṛpakaṇḍa*) 冒頭に位置する *Bhaṭṭikāvya* 第1章は多様な文法規則が不規則に例証される箇所であるから、詩節の解釈とそこで例証される文法規則に関して我々はより慎重にならねばならない。和田 [2012] の翻訳の問題点と本作品の冒頭を飾る第1章については稿を改めて論ずる予定である。

面から取り上げて文法的観点から精密な考察を加えた研究は世界的に見ても極僅かである⁶。もちろん *Bhaṭṭikāvya* の包括的な研究には詩学の観点からアプローチをかけることも必要であることは言うまでもない。しかし、バツティが修辞等の例証より文法規則の例証に重きを置き、詩学よりも文法学を重視している事は、作品の大部分が文法規則例証に費やされているという事実及び作品末尾の作者自身の言葉から明らかである⁷。従って、後の〈美文〉(kāvyā) だけでなく文法学の分野にも影響を与え、〈美文論書〉の先駆的作品として古典サンスクリット文学中で独自の地位を占める本作品の全貌を解明し、その価値や特徴及び位置付けを明らかにするには、文法学セクションに力点を置いた文法的観点からのアプローチがなされる必要がある。

筆者は以上のような問題意識からいくつかの論考を公表してきた(川村[2012a-e])。本稿では、〈美文論書〉の一つである *Rāvaṇārjunīya* (RA) でなされる kāraka 術語規則 (A 1.4.23-55) の例証と *Bhaṭṭikāvya* 中のそれとの比較考察を行い、バツティがなす文法規則例証や *Bhaṭṭikāvya* が持つ特徴をより多角的な視点から考察することを試みる⁸。なお、kāraka 術語規則が例証される BhK 8.70-84 については既に川村[2012a: 97-109] で取り扱ったが、誤植や誤訳を含め加筆・修正すべき箇所が後日になって多数発見されたため、*Rāvaṇārjunīya* の詩節との比較検討も含めて今一度それらの詩節にも詳細な考察を加えることにしたい⁹。

2 *Rāvaṇārjunīya* について

物語を描きながら文法規則等を例証する *Bhaṭṭikāvya* はこの種の先駆的作品であり、その後、*Bhaṭṭikāvya* をモデルとして様々な作品が著された。その中でも、*Bhaṭṭikāvya* と同じく、物語の描写と同時にパーニニの文法規則の例証を企図した作品として有名であり、かつ比較的バツティの年代に近いと考えられるものに、カシュミールで活躍したバウマカ (Bhaumaka) の手になる *Rāvaṇārjunīya* (あるいは *Arjunarāvaṇīya*) がある¹⁰。これは全27章1545詩節からなる韻文作品で

⁶*Bhaṭṭikāvya* の代表的な先行研究については川村[2012a, 2012b]を参照されたい。ただしそこには、研究史が網羅的でなかったことや重要な先行研究に言及していなかったこと等といった多数の不備が後日発見された。本来ならば *Bhaṭṭikāvya* の詳細な研究史を提示すべきであるが、その作業は煩雑を極めるのでかなりの紙幅を費やすことになる。それは本稿の目的とするところではない。そこで本稿では、筆者が入手し目を通すことができた *Bhaṭṭikāvya* 及び作者バツティに関わる研究を管見の及ぶ限り参考文献表に挙げておくに留め、詳細な *Bhaṭṭikāvya* 研究史は稿を改めてしっかりと提示することにしたい。なお、*Bhaṭṭikāvya* の種々の刊本は現在入手が困難となっているものも少なくないが、その刊本情報については Emeneau [1967: 113-114] を参照せよ。

⁷4.1 を見よ。

⁸kāraka 術語規則が例証される BhK 8.70-84 を扱う研究として、Śaśi Bālā 氏の *Bhaṭṭikāvya evam Pāṇinīya vyākaraṇa kā iulanāmaka adhyāyana* (Delhi: Vidyānidhi Prakāśana, 1994) があるが、現在取り寄せ中で残念ながら現段階では筆者未見である。Cardona [1999: 274] によれば、同研究書は各章毎に音素変化 (sound system)、連声 (sandhi)、複合語 (compounds)、名詞形 (nominal forms)、動詞形 (verb forms)、kṛt 接辞及び taddhita 接辞による派生形 (derivates with kṛt and taddhita affixes)、その発音 (utterance) について取り扱い、その最終章では kāraka 術語規則を例証する *Bhaṭṭikāvya* の諸詩節を扱っている。その中でも Cardona [1999: 274.7-10] は、バツティが使用する動詞形を広範囲に扱う同書第6章 (pp. 101-171) のことを特記している。

⁹ただし前号のものと重複する注記は必要最低限に抑えた。

¹⁰また *Rāvaṇārjunīya* は *Vyoṣakāvya* と呼ばれるが、その名称については Chatterjee [1931] による論考がある。文法学書や各種辞書に対する注釈中で、注釈家達は文法規則を解説するために *Vyoṣa* と呼ばれる作品からしばしば引用を見せているが、幾人かの研究者は音の類似性から '*Vyoṣa*' を '*Ghoṣa*' の誤写と考え、それを仏教詩人アシュヴァゴーシャを指すものと理解してきた。しかし、*Vyoṣa* から引用される各パッセージと同じものが実際にアシュヴァゴーシャの作品中に見出されるという事実は報告されていない。そのような状況の中、Chatterjee [1931] は、*Vyoṣa* から引用される各パッセージの趣向から判断して、この作品が *Bhaṭṭikāvya* と同様、文法規則の例証を企図したものとしての性格を有している点を指摘し、*Vyoṣa* から引用されるパッセージ全てが *Rāvaṇārjunīya* 中に見出されることを報告した。そして、何故 *Rāvaṇārjunīya* が '*Vyoṣa*' と呼ばれるようになったかを現存する証拠から確定するのは困難と述べつつも、その理由を、文法規則を例証する本作品は読者達にとって *vyoṣa* (「黒こしょう・ヒハツ・生姜糖の混合物」) のようにまずく、口に合わないものであったからではないかと推測する。なお、*Bhāṣāvṛtti* (12世紀前半) や *Durghaṭavṛtti* (12世紀) 中に引用される *Vyoṣa* のパッセージについては Zachariae [1933-34] に詳しい。

あり、表面上は *Rāmāyaṇa* 第7巻を題材として、アルジュナカールタヴィールヤ (Arjunakārtavīrya) 王とラーヴァナ (Rāvaṇa) の戦闘を描いている¹¹。そして、それと同時に *Aṣṭādhyāyī* 中の文法規則が順番に例証されることから、*Bhaṭṭikāvya* と同様、本作品もまた〈美文論書〉と呼ばれる¹²。

2.1 先行研究

Rāvaṇārjunīya を学界に初めて報告したのは Bühler [1877] である。Bühler [1877: 61.32-62.5] は、*Bhaṭṭikāvya* と同じく文法規則の例証を企図したと考えられる作品として、ビーマバッタ (Bhīma-bhaṭṭa) 作 *Rāvaṇārjunīya* の存在を世に報告した (Bühler [1877: 62.5] は当該の作品の年代を少なくとも10世紀以前とする)。それを受けて Peterson [1883-85: 8.7-9.8] は、クシェーメンドラ (Kṣemendra, 990-1066年頃) の諸作品について報告する中で、クシェーメンドラが *Suṅgītatilaka* 3.2-4 でバッティと共にその名を言及するバウマカ (Bhaumaka) なる人物の作品と Bühler [1877] が報告した作品は同一のものであり¹³、かつクシェーメンドラが伝える名が作者の真の名であり得ると推定した。そして1900年には、Śivadatta and Parab [1900] により *kāvya-mālā* シリーズの一つとしてその校訂テキストが刊行された。しかし、それを基に Velankar [1948: 59-60, 74-75] が *Rāvaṇārjunīya* 中で使用される全韻律に関する詳細な情報を提供したことを除いて¹⁴、本作品の研究は手つかずの状態が続いており、アルジュナ王とラーヴァナの戦闘を描く各叙事詩や他の〈美文論書〉文献との比較も含めてその詳細な研究が待たれるところである¹⁵。

2.2 作者バウマカの年代

Rāvaṇārjunīya の作者バウマカについては、その名及び作品中の詩節が後代の文献中に僅かに引用されるのみで、分かっていることは無いに等しい¹⁶。Trivedī [1898: x.14-xi.5] は、A 2.4.3 *anuvāde caranānām* に対する *Kāśikāvṛtti* 中に RA 7.4 からの引用が見受けられることを理由に、バウマカの年代をジャヤーディティヤ (Jayāditya, 7世紀) 以前とするが¹⁷、全く同じ表現が *Mahābhāṣya* にも

¹¹ なお、アルジュナ王にまつわる物語とその人物の特徴については Biardeau [1970] と Tripathi [1979] に詳しい。

¹² Śivadatta and Parab [1900] はその序論で、バウマカの年代を知る手がかりとしてクシェーメンドラの *Suṅgītatilaka* 3.2-4 を引用した後、次のように述べている。Śivadatta and Parab [1900: 1.13-15]: ...ity atra bhaumakasya nāmna upalambhāt tataḥ prāktanatvaṃ pratīyate. asya kāvyasya kārtavīryārjunarāvaṇayuddhavarṇanavyājena vaidikasūtrāṇy apahāya sarveṣāṃ aṣṭādhyāyīsthavidhisūtrāṇāṃ aṣṭādhyāyīpāthakrameṇaivodāharaṇāni pradarsītavataḥ kāvyasāstratvaṃ kṣemendravarnītam vyaktam eva. (「... というここで、バウマカという名前が見られるから、[バウマカが] 彼 (クシェーメンドラ) に [時代的に] 先行することが理解される。この〈美文〉は、カルタヴィールヤアルジュナとラーヴァナの戦闘の描写を装って、ヴェーダに関するスートラを除き、*Aṣṭādhyāyī* 中の全ての操作規則 (vidhisūtra) の例を、まさに *Aṣṭādhyāyī* の [規則] 読み上げの順序に従って明示しているから、それが〈美文論書〉であることはクシェーメンドラが説明している通り全くもって明らかである」) なお、本作品が〈美文論書〉である点について Śivadatta and Parab [1900: 1, fn. 1] は 'yuddhakathāvarṇanātmakatvena kāvyatvam krameṇa sūtrodāharaṇātmakatayā kāśikādivac chāstratvam api' (「[本作品は] 戦闘物語の描写を本質とするものとしては〈美文〉であり、スートラを順番に例証することを本質とするものとしては、*Kāśikā* 等と同様〈論書〉でもある」) と注記する。

¹³ *Suṅgītatilaka* 3.2-4 については 4.2.3 を見よ。

¹⁴ Velankar [1948] は、古代から中世に活躍した 28 人の著名なサンスクリット詩人を選び、彼らが各作品中で使用される韻律とそれが使用される箇所及びその回数を精査し、サンスクリット文献中で使用される多種多様な韻律を綿密に分析している。

¹⁵ *Rāvaṇārjunīya* を直接的に扱う研究としては唯一 Saṅgīta Agravāla 氏による *Rāvaṇārjunīya kā vyākaranika adhyāyana* (Dillī: Nyū Bhāratiya Buka Kārporeṣāna, 2009) があるが、こちらも現在取り寄せ中で残念ながら筆者未見である。

¹⁶ Śivadatta and Parab [1900: 1.2-4]: asya hi Rāvaṇārjunīyasya arjunarāvaṇīyasya vā mahākāvyaṣya kartā bhāṭṭabhaumaha bhāṭṭabhīmo vā kasmin kāle kasmin deśe kaṃ bhūmimaṇḍalam alaṃcakāreti samyaktayā niścetum na śakyate. (「実に、この *Rāvaṇārjunīya* あるいは *Arjunarāvaṇīya* というマハーカーヴィアの作者であるバッタバウマあるいはバッタビーマがいつどこでどの大地を飾ったかを正しく確定することは出来ない」)

¹⁷ Krishnamachariar [1974: 145.5-7] も同様の見解をとる。

見られ (MBh on Vt. 2 to A 2.4.3 [I.474.4])、それがバウマカ作品からの引用だとするならば、彼の年代はパタンジャリ (Patañjali, 紀元前 2 世紀) 以前ということになってしまう。むしろ A 2.3.4 に対する例として流布していた表現をバウマカが自身の作品に使用したと考える方が自然であり、パタンジャリや *Kāśikāvṛtti* の作者が RA 7.4 を引用しているわけではない¹⁸。上述したようにクシェーメンドラが *Suṛttatilaka* 中でバウマカの名に言及していることから、彼が 11 世紀以前の人物であることは少なくとも確定されるが、その他の詳細は全く不明である¹⁹。

3 両作品における kāraka 術語規則の例証

これより、kāraka 術語規則が例証される BhK 8.70–84 と RA 3.11–35 の比較考察を行う。パーニニは支配規則 (adhikārasūtra) である A 1.4.23 kārake (「それが kāraka である場合に」) のもとに、A 1.4.24 dhruvam apāye 'pādānam から A 1.4.55 tatprayojako hetuś ca において〈起点〉(apādāna)、〈受手〉(sampradāna)、〈手段〉(karaṇa)、〈基体〉(adhikaraṇa)、〈目的〉(karman)、〈行為主体〉(kartr)、〈原因〉(hetu) の術語規則を設けており、BhK 8.70–84 と RA 3.11–35 ではそれらが全て例証される²⁰。

以下、両作品中の詩節で使用される表現とそれによって例証される文法規則の対応を詳説し、特筆すべき点を書き留めて、必要があれば考察を加えていきたい。BhK 8.70–84 は、ランカー島 (Lāṅkā) へと連れ去ったシーター (Sītā) をラーヴァナが誘惑する場面、RA 3.11–35 は敵軍との戦闘場面であり、各詩節とそこで例証される文法規則の対応は以下の通りである。

¹⁸RA 7.4: udagāt kaṭhakālāpam pratyasṭhāt kaṭhakauthumam / yeśaṃ yajñe dvijātīnām tadvighātibhir anvitam // 下線で示した箇所と同じ表現が *Mahābhāṣya* と *Kāśikāvṛtti* に見られる。また SK 907 でも A 2.4.3 の例として同じ表現が挙げられている。

¹⁹バウマカの年代について Śivadatta and Parab [1900] はその序論で次のように述べている。Śivadatta and Parab [1900: 1.16–27]: tathā ca anuvāde caraṇānām iti pāṇinisūtrodāharaṇakathanāvasare udāhṛtasya udagāt kaṭhakālāpam pratyasṭhāt kaṭhakauthumam iti saptamasargīyāslokaṛdhasya mahābhāṣyakāśikayor upalambhena mahābhāṣyakāśikābhyām api prācīnam idaṃ kāvyam iti tv asāradrśaḥ. vastutas tu adyatanyām ca iti vārtikopanyāsārtham tiṣṭhantu kaṭhakālāpāḥ ity udāharaṇasyāpi tatra dānena mahābhāṣyakṛto naitatkāvyasthaślokanuvādatvam / kiṃtu udagāt kaumodapaippalādam iti gadyavat udagāt kaṭhakālāpam pratyasṭhāt kaṭhakauthumam ity asyāpi padyagandhigadyatvam eva. mahābhāṣyoktasya udagāt kaṭhakālāpam pratyasṭhāt kaṭhakauthumam udagāt kaumodapaippalādam ity udāharaṇatrayasya madhye udāharaṇadvayasya padyagandhitvāt kāvyakṛtā tadanukaraṇam āśṛitya samasyāpūrtir eva kṛtā bhavet. asya kāvyasya kāśmīrikagrantheṣv eva nāmopalambhāt kāśmīreṣv api pustakavaipulyādarśanāt kāśmīrika evāyaṃ kavir bhavet iti sambhāvyaṭe. (「そしてそのような場合、anuvāde caraṇānām (A 2.3.4) というパーニニのストラに対する例を語る時に挙げられる 'udagāt kaṭhakālāpam pratyasṭhāt kaṭhakauthumam' という第 7 章中の詩節の半分が *Mahābhāṣya* と *Kāśikā* 中に見られることに基づく、『この〈美文〉は *Mahābhāṣya* と *Kāśikā* にも [時代的に] 先行する』という考えは、しかし、本質を捉えていない。そうではなくて実際には、adyatanyām ca (Vt. 2 on A 2.4.3) という vārttika の説明を目的とする 'tiṣṭhantu kaṭhakālāpāḥ' (MBh on Vt. 1 to A 2.3.4 [I.474.2]) という例や、stheṇoḥ (Vt. 1 on A 2.4.3) という vārttika の説明を目的とする 'nandantu kaṭhakālāpā vardhantām kaṭhakauthumāḥ' (MBh on A 2.3.4 [I.473.21]) という例もそこ (*Mahābhāṣya* 中) に与えられるから、*Mahābhāṣya* 作者 (パタンジャリ) がこの〈美文〉中の詩節を再言しているわけではない。そうではなくて、'udagāt kaumodapaippalādam' (MBh on Vt. 2 to A 2.3.4 [I.474.5]) という散文同様、'udagāt kaṭhakālāpam pratyasṭhāt kaṭhakauthumam' (MBh on Vt. 2 to A 2.3.4 [I.474.4]) というこれも韻文の香りがする (韻文に似た) 散文に他ならない。*Mahābhāṣya* 中で述べられる 'udagāt kaṭhakālāpam'、'pratyasṭhāt kaṭhakauthumam'、'udagāt kaumodapaippalādam' という三つの例の中の二つの例 ('udagāt kaṭhakālāpam' と 'pratyasṭhāt kaṭhakauthumam') は韻文の香りがする (韻文に似ている) から、〈美文〉の作者 (バウマカ) はその模倣に依拠し、まさに詩節の補完 (samasyāpūrti) をなしたのであろう。この〈美文〉はカシュミールの作品群の中にもみ名前が見られ、[また実際に] カシュミールでも [その] 豊富な写本が見られるから、この詩人 (バウマカ) はカシュミール出身の人物に他ならないであろう、と推測される」)

²⁰本稿は kāraka 理論や各 kāraka 及びそれらを規定する文法規則それ自体の検討を目的とするものではないので、規則解釈に関する注記は必要最低限に留める。パーニニ文法学における kāraka 理論それ自体については Cardona [1974] による詳細かつ包括的な研究を初めとして数々の優れた研究業績が積み上げられて来ている。また本邦に目を転じると、小川 [2000, 2008–12] による *Vākyapadīya* 「〈能成者〉詳解」(sādhanaśamuddeśa) 章の一連の研究や Kudō [1995–1999, 2001] による *Śabdakaustubha* を中心とした精密な訳注研究がその主だったものとして挙げられるだろう。

- BhK 8.70–72, RA 3.11–13 → A 1.4.24–31
- BhK 8.73–77, RA 3.14–22 → A 1.4.32–41
- BhK 8.78, RA 3.23–24 → A 1.4.42–44
- BhK 8.79–80, RA 3.25–28 → A 1.4.45–48
- BhK 8.81–84, RA 3.29–34 → A 1.4.49–53
- BhK 8.84, RA 3.35 → A 1.4.54–55

3.1 BhK 8.70–72, RA 3.11–13 → A 1.4.24–31

BhK 8.70–72: (1) vṛkṣād vṛkṣam parikrāman (2a) rāvaṇād bibhyatīm bhr̥sam /
 (2b) śatros trānam apaśyantīm adṛśyo janakātmajām //
 tām (3) parājayamānām sa prīte (4) rakṣyām daśānanāt /
 (5) antardadhānām rakṣobhyo malinām mlānamūrdhajām //
 (6) rāmād adhītasandeśo (7) vāyor jātaś cyutasmitām /
 (8) prabhavantīm ivādityād apaśyat kapikuñjaraḥ //

ラーマから音信を受け取った、風の子であるその象の如き猿 (ハヌーマット) は、姿を隠して樹から樹へと飛び移っている時、ラーヴァナを非常に恐れ、敵から身を守る術も無く、[ラーヴァナの] 愛を拒絶し、十顔者 (ラーヴァナ) から守られねばならない、悪魔達から隠れ、[体は] 汚れ、髪も傷み、笑顔を失った、太陽から現れたかのようなそのジャナカの娘を目にした。

- (1) A 1.4.24 dhruvam apāye 'pādānam // 「離別が実現されるべき時、離別と結びつく固定点である kāraka は〈起点〉と呼ばれる」²¹

[BhK 説明] (1) 'vṛkṣāt vṛkṣam parikrāman' (「樹から樹へと飛び移っている時」) において、「樹」(vṛkṣa) はハヌーマットが行う飛び移り行為の固定点・出発点 (dhruva) であるから A 1.4.24 により〈起点〉と呼ばれる。そして〈起点〉を表示する項目の後には A 2.3.28 apādāne pañcamī (「他の項目によって表示されていない〈起点〉が表示されるべき時、第五格名詞接辞が起こる」) により第五格名詞接辞が起こる。以下も同様である。

- (2) A 1.4.25 bhītrārthānām bhayahetuḥ // 「動詞語根 bhī (「恐怖する」) の意味及び動詞語根 trai (「守護する」)²² の意味を持つ動詞語根が使用される時、恐怖を引き起こす原因である kāraka は〈起点〉と呼ばれる」²³

²¹ 同時代に著された文法学文献が挙げる例 (udāharāṇa) を検討することは、文法規則の正確な解釈に加え、Bhaṭṭikāvya 中に使用される各表現を相対的に考察する上でも有用である。従って、本作品 (6 世紀初頭から 7 世紀中頃) とかなり近い時代に著されたと考えられる Kāśikāvṛtti (7 世紀) が挙げる例にも以下に言及していく。KV on A 1.4.24: grāmād āgacchati / parvatād avarohati / sārthād dhīnaḥ / rathāt patitaḥ / (「彼は村からやって来る。彼は下山する。彼は隊商から外れる。彼は戦車から落ちる」)

²² 当該規則中で提示されている 'trā' は動詞語根 trai (DhP I.1014 traiṅ pālāne) の最終音に ā 音が代置された語形である。A 6.1.45 ād eca upadeśe 'śiti // (「教示中の eC で終わる動詞語根の最終音に ā 音が代置される。ŚIT である接辞が後続する場合には代置されない」)

²³ KV on A 1.4.25: caurebhyo bibheti / caurebhya udvijate / trāyatyarthānām—caurebhyas trāyate / caurebhyo rakṣati / (「彼は盗人達に恐怖する (bibheti=udvijate)。動詞語根 trai の意味を持つ動詞語根の例—彼は [X を] 盗人達から守る (trāyate=rakṣati)」)

[BhK 説明] (2a) ‘rāvaṇāt bibhyaṭīm’ (「ラーヴァナを恐れる [シーター]」) において、「ラーヴァナ」(rāvaṇa) はシーターにとって恐怖の原因 (bhayahetu) であるから A 1.4.25 により〈起点〉と呼ばれる (動詞語根 bhīの意味を持つ動詞語根の例)。(2b) ‘śatroḥ trāṇam apaśyantīm’ (「敵から身を守る術が無い [シーター]」) において²⁴、「敵」(śatru) はシーターにとって恐怖の原因であるから同じく A 1.4.25 により〈起点〉と呼ばれる (動詞語根 traiの意味を持つ動詞語根の例)。

- (3) A 1.4.26 parājer asodhaḥ // 「parāに先行される動詞語根 ji (「耐えられない」) が使用される時、耐え難い対象である kāraka は〈起点〉と呼ばれる」²⁵

[BhK 説明] (3) ‘parājayamānām...prīteḥ’ (「愛を拒絶する [シーター]」) において、ラーヴァナの「愛」(prīti) はシーターにとってまさに耐え難い対象 (asodha) であるから A 1.4.26 により〈起点〉と呼ばれる。

- (4) A 1.4.27 vāraṇārthānām īpsitaḥ // 「活動の阻害を意味する動詞語根が使用される時²⁶、望まれる対象である kāraka は〈起点〉と呼ばれる」

[BhK 説明] (4) ‘rakṣyām daśānanāt’ (「十顔者から守られねばならない [シーター]」) において、「十顔者」(daśānana) は A 1.4.27 により〈起点〉と呼ばれる。まず動詞語根 rakṣが表示する守護行為は (DhP I.688 rākṣĀ pālana)、シーターに対するラーヴァナの活動を阻害するから A 1.4.27 が規定する「活動の阻害を意味する動詞語根」(vāraṇārtha) という条件を満たす。当該表現が A 1.4.27 の例としての機能を果たすためには、ラーヴァナは「望まれる対象」(īpsita) でなければならないが、ジャヤマンガラは、シーターが行う守護行為の範囲にラーヴァナが含まれることが「望まれる」と説明する²⁷。一方マツリナータは、ラーヴァナは自身の愛人達によって夫として「望まれる」対象であると説明する。ラーヴァナの愛人達はシーターに彼を取られないよう、シーターを彼から守るのである²⁸。しかし、Kāśikāvṛtti 等が A 1.4.27 に対して挙げる例文の構造を考慮するならば、ジャヤマンガラの解釈が妥当であろう²⁹。

- (5) A 1.4.28 antardhau yenādarśanam icchati // 「隠れる行為が起こる場合、Y が X による自身の知覚のないことを望むその kāraka (X) は〈起点〉と呼ばれる」³⁰

[BhK 説明] (5) ‘antardadhānām rakṣobhyaḥ’ (「悪魔達から隠れている [シーター]」) において「悪魔」(rakṣas) は A 1.4.28 により〈起点〉と呼ばれる。シーター (Y) は悪魔達 (X) に見られることを望まず、彼らから身を隠しているからである。

²⁴ 動詞語根 trai に後続する kṛt 接辞 Lyuṭが表示する意味をどう解釈するかで trāṇa という語の意味は変わるが、ジャヤマンガラはそれを行為 (bhāva) と捉え (Jayamaṅgalā on BhK 8.70, A 3.3.115 lyuṭ ca)、マツリナータは〈手段〉あるいは〈行為主体〉と考えているようである (Sarvapaṭhānā on BhK 8.70, A 3.3.113 kṛtyalyuṭo bahulam, A 3.3.117 karaṇādhipikaraṇayoś ca)。当該の3詩節は孤立したシーターの哀れな姿を描くものであること及び apaśyantīm という表現との繋がりを考慮して、Lyuṭを〈手段〉あるいは〈行為主体〉を表示するものと理解した。Lyuṭが〈行為主体〉を表示する場合には「守護者がいない [シーター]」(trātāram alabhamānām) という意味になる (Sarvapaṭhānā on BhK 8.70)。

²⁵ KV on A 1.4.26: adhyayanāt parājayate / (「彼は学習に耐えられない」)

²⁶ KV on A 1.4.27: pravṛttivighāto vāraṇam // (「vāraṇa とは活動の阻害のことである」)

²⁷ 川村 [2012a: 99, fn. 68] を見よ。

²⁸ 川村 [2012a: 99, fn. 69] を見よ。

²⁹ Kāśikāvṛtti や Siddhāntakaumudīはともに A 1.4.27 の例として「彼は牛を大麦から引き離す (遠ざける)」(yavebhyo gām vārayati, yavebhyo gām nivartayati) という文を挙げる。ここで「大麦」(yava) は牛にとって「望まれる対象」であるから A 1.4.27 により〈起点〉と呼ばれる。この構造を当該詩節に当てはめるならば、ラーヴァナを何らかの形で望むのは彼の愛人達ではなくシーターでなくてはならない。シーターが恋愛対象としてラーヴァナを望むことはあり得ないので、自らの守護行為の範囲に含まれる者として、言い換えれば遠ざけるべき相手としてシーターはラーヴァナを望んでいるというのがジャヤマンガラの考えであろう。

³⁰ KV on A 1.4.28: upādhyāyād antardhatte / upādhyāyān nilīyate / mā mām upādhyāyo drākṣīt iti nilīyate / (「彼は師から隠れる (antardhatte=nilīyate)。『師は私を見てはならない』と考えて彼は身を隠す」)

- (6) A 1.4.29 ākhyātopayoge // 「学活動に基づく学識の獲得が実現されるべき時、教示者である kāraka は〈起点〉と呼ばれる」³¹

[BhK 説明] (6) 'rāmāt adhītasandesh' (「ラーマから音信を受け取った [ハヌーマット]」) において、「ラーマ」(rāma) は A 1.4.29 により〈起点〉と呼ばれる。ハヌーマットにとってラーマは或る種の教示者 (ākhyātr) であり、ハヌーマットはまさに規定に従って師から学識を授かるかの如く、ラーマから注意深く音信を受け取るからである³²。

- (7) A 1.4.30 janikartuḥ prakṛtiḥ // 「動詞語根 jan (「誕生する」) が表示する行為の〈行為主体〉の根源である kāraka は〈起点〉と呼ばれる」³³

[BhK 説明] (7) 'vāyoḥ jātaḥ' (「風から生まれた [ハヌーマット]」) において、「風」(vāyu) はハヌーマットが生まれる根源 (prakṛti) であるから A 1.4.30 により〈起点〉と呼ばれる。

- (8) A 1.4.31 bhavaḥ prabhavaḥ // 「現れる行為の〈行為主体〉が [最初に] 現れる場所である kāraka は〈起点〉と呼ばれる」

[BhK 説明] (8) 'prabhavantīm ivādityād' (「太陽から現れたかのような [シーター]」) において、「太陽」(āditya) はシーターが現れる場所 (prabhava) であるから A 1.4.31 により〈起点〉と呼ばれる。ここで注意すべきは、先の A 1.4.30 が規定する「根源」(prakṛti) とは未だ誕生していない何かが生ずる原因 (kāraṇa, hetu) であるのに対して、A 1.4.31 が規定する「[最初に] 現れる場所」(prabhava) とは他の原因に基づいて既実現されている何かが生ずる原因 (prabhava) とは他の原因に基づいて既実現されている何かが生ずる原因 (prabhava) だとしたことである³⁴。先の「風」はまさにハヌーマット誕生の原因であり、当該の「太陽」は、既に誕生しているシーターが最初に姿を現したかのような場所として理解される。

RA 3.11: (1) bhūmyā divaṃ reṇucayaḥ prayātas

(2a) tato bhayenā vicālāsta senā /

(2b) trāyeta tasmād acirād yadi syād

ākālikī vāridajālvṛṣṭiḥ //

一群の砂埃が大地から空へと舞い上がった。軍隊はそれ(砂埃)を恐れて動かずに佇んでいた。雲の群のもたらす時期外れの雨がもし降れば、即座にそれ(砂埃)から[軍隊を]守るであろうに。

[RA 説明] '(1) bhūmyā...prayātaḥ' (「[一群の砂埃が] 大地から [空へと] 舞い上がった」) において、「大地」(bhūmi) は砂埃が空へと舞い上がる際の固定点・出発点 (dhruva) であるから A 1.4.24 により〈起点〉と呼ばれる。(2a) 'tataḥ bhayena' (「[軍隊は] それ(砂埃)を恐れて」) において、「それ(砂埃)」(tad) は軍隊にとつ

³¹ Kāśikāvṛtti は upayoga という語を「niyama に基づく学識の獲得」(niyamapūrvakam vidyāgrahaṇam) と説明し (KV on A 1.4.29)、niyama という語について Nyāsa は「学識を獲得する為に弟子入りすることが niyama である」(vidyāgrahaṇārtham śiṣyapraṇvṛttiḥ niyamah) と注釈する (Nyāsa on KV to A 1.4.29)。

³² 詳細は川村 [2012a: 99, fn. 72] を見よ。バツティがここで adhīta という語を使用するのも A 1.4.29 の規定内容を考慮してのことであろう。当該の表現は、Kāśikāvṛtti が A 1.4.29 に対して挙げる例文「彼は師から学ぶ」(upādhyāyād adhīte) と対応する。

³³ KV on A 1.4.30: śṛṅgāc charo jāyate / gomayād vṛściko jāyate / (「角から矢は作られる。牛の糞からサソリは生まれる」)

³⁴ KV on A 1.4.31: himavato gaṅgā prabhavati / kāśmīrebhyo vitastā prabhavati / prathamata upalabhyate ity arthaḥ // (「ガンガー河はヒマラーヤから現れる。ヴィタスター河はカーシュミーラから現れる。[その場所で] 最初に知覚されるという意味である」) BM on SK 594: prabhava iti—prathamam prakāśate 'sminn iti prabhavaḥ / prathamaprakāśasthānam ity arthaḥ // (「prabhava について。prabhava とは [X が] 最初に現れる場所を意味する。[つまり] 最初に現れる場所 (prathamaprakāśasthāna) という意味である」) 合わせて川村 [2012a: 100, fn. 73] も参照せよ。

て恐怖の原因 (bhayahetu) であるから A 1.4.25 により〈起点〉と呼ばれ (動詞語根 bhī の意味を持つ動詞語根の例)、(2b) ‘trāyeta tasmāt’ (「[雨は軍隊を] それ (砂埃) から守るであろうに」) において、「それ (砂埃)」(tad) は軍隊にとって恐怖の原因であるから同じく A 1.4.25 により〈起点〉と呼ばれる (動詞語根 trai の意味を持つ動詞語根の例)。

RA 3.12: (3) reṇūccayāt pathi parājayate sma kaścīd

(5) antardadhe karivarād aparo ’śvasādī /

(7) jātaṃ kapolaphalakān madavāri (4) tasmād

bhṛṅgān nyavārayad ibhaś calakarnatālah //

路上にいる騎手の或る者は一群の砂埃に耐えられなかった。他の騎手は巨象から身を隠した。象は揺れ動く耳をはためかせて、広い頬から生じたマダ液から黒蜂達を遠ざけた³⁵。

[RA 説明] (3) ‘reṇūccayāt...parājayate’ (「[騎手は] 一群の砂埃に耐えられなかった」) において、「一群の砂埃」(reṇūccaya) は騎手達にとって耐え難い対象 (asodha) なので A 1.4.26 により〈起点〉と呼ばれる。(5) ‘antardadhe karivarāt’ (「[騎手は] 巨象から身を隠した」) において、「巨象」(karivara) は A 1.4.28 により〈起点〉と呼ばれるはずであるが、何故騎手 (Y) が巨象 (X) から見られることを望まないのかが当該の文脈からは判然としない³⁶。(7) ‘jātaṃ kapolaphalakāt’ (「広い頬から生じた [マダ液]」) において象達の「広い頬」(kapolaphalaka) はマダ液が生じる根源 (prakṛti) なので A 1.4.30 により〈起点〉と呼ばれる。(4) ‘tasmāt bhṛṅgān nyavārayat’ (「それ (マダ液) から黒蜂達を遠ざけた」) において、upasarga である ni に先行される動詞語根 vṛt は活動の阻害 (vāraṇa) を意味し³⁷、「それ (マダ液)」(tad) は黒蜂達に望まれる対象 (īpsita) であるから A 1.4.27 により〈起点〉と呼ばれる。

RA 3.13: (8) divākarād yat prababhūva tejas

tatrāvaruddhe rajasā sakopam /

rujaṃ sa cetikurute sma sādī

(6) guror adhītī na sa kauśalena //

太陽から発せられた光を砂埃が遮ったので、その騎手は怒りと共に苦痛を感じた。彼は師から学識を上手く授かっていた³⁸。

³⁵ Kāśikāvṛtti 等が A 1.4.27 の例として挙げる「彼は牛を大麦から引き離す」(yavebhyo gām vārayati) という文の構造を詩節 cd 句に当てはめるならば、意味的には「マダ液」(madavāri) が「望まれる対象」であり、それを望むのは「黒蜂」(bhṛṅga) のはずである。従って、これを根拠に c 句に關係代名詞 yad を補い、‘tasmāt’ を「マダ液」を指示する代名詞と理解して、cd 句を訳出した。關係代名詞を補わず、‘tasmāt’ を ‘kapolaphalakāt’ を指示する代名詞と考えれば、cd 句を「象は揺れ動く耳をはためかせて、かの広い頬から生じたマダ液を黒蜂から遠ざけた」と訳出することが出来る。しかしその場合、cd 句の構造は上述の例文とは逆になり、表現上は「マダ液」が「黒蜂」を望んでいることになってしまう。この事態は常識的に考えて不自然である。

³⁶ 後に見る RA 3.17 で象が暴れる描写がなされるから、それを根拠にひとまず「騎手は恐ろしい巨象に見つかつて攻撃されることを恐れて身を隠している」という意味で当該の表現を理解した。

³⁷ KV on A 1.4.27: yavebhyo gām (gā を修正) nivartayati / (「彼は牛を大麦から引き離す」)

³⁸ 詩節 d 句の ‘kauśalena’ は、adhī/√i が表示する行為を修飾する副詞 (kriyāviśeṣaṇa) として理解した。それを副詞として捉えず、kuśala という語に後続する第三格名詞接辞を A 2.3.21 itthambhūtalakṣane に基づくものとして解釈すれば、d 句を「師から学識を授かっていたにも関わらず、彼は[事態の処理に] 巧みではなかった」と訳すことも可能である。その場合、‘na sa kauśalena’ の直訳は「彼は巧みさに特徴付けられた者ではなかった」となる。どちらで解釈するにせよ、その意味するところは同じであり、騎手は緊急事態に対処する知識を身につけていなかったということである。なお A 2.3.21 の構造については川村 [2012b: 102-103] を見よ。

[RA 説明] (8) 'divākaraṭ...prababhūva tejaḥ' (「太陽から発せられた光」) において、「太陽」(divākara) は光が最初に現れる場所 (prabhava) であるので A 1.4.31 により〈起点〉と呼ばれる。(6) 'guroḥ adhīti na' (「[彼は] 師から学識を授かっていなかった」) において³⁹、「師」(guru) はまさに弟子に学識を授ける教示者 (akhyāt) であるから A 1.4.29 により〈起点〉と呼ばれる。

[ノート] バッティは BhK 8.70–72 において〈起点〉の術語規則を全て例証しているが、注目すべきはパーニニの規則順序に合わせて詩節の語が配列されていることである。決して Bhaṭṭikāvya の全ての箇所での態度が完璧に貫かれているわけではないが、当該詩節や作品中の他の箇所を見るに⁴⁰、規則順序とそれを例証する詩節の語の順序を一致させようとする意識がバッティにあったことは明白である。

一方、RA 3.12–3.13 では規則順序と詩節の語順はおろか規則順序と詩節の順序もばらばらで、作者パウマカの美意識の欠如を伺わせる。それに加えて RA 3.12 では各句 (pāda) の内容的な繋がりが不明瞭であり、そのような文は〈無益な文〉(apārtha) という詩的欠陥 (doṣa) と見なされかねない⁴¹。さらに、RA 3.11 で使用される韻律は upajāti であるが、a 句 'renuccayaḥ' と d 句

³⁹adhīti は、adhi√i の後に A 3.4.70 tayor eva krtyaktakhalārthāḥ (「krtya と呼ばれる接辞と Kta 接辞及び KHaL の意味を持つ接辞は、両者 (行為と〈目的〉) を表示するためだけに起こる」) により Kta が起こり (adhīta)、その後 A 5.2.115 ata inīthanau (「『x と関係するもの』及び『x が存在する場』という意味で、短音 a で終わる〈名詞語基〉の後に taddhita 接辞 inI と thaN が任意に起こる」) により inI が起こった語形であり、当該表現の直訳は「師から授けられた学識を持つ者ではなかった」である。

⁴⁰karmapravacanīya 術語規則 (A 1.4.83–98) が例証される BhK 8.85–93 については川村 [2012a: 109–116] を、名詞接辞導入規則 (A 2.3.1–73) が例証される BhK 8.84–130 については川村 [2012b] を見よ。また、筆者は九州大学で開催された第 23 回西日本インド学仏教学会学術大会の発表資料中で、数種の krt 接辞導入を規定する A 3.2.1 karmanyaṅ an から A 3.2.16 careṣṣaḥ が例証される BhK 6.87–93 を、カーティアーヤナとパタンジャリとの関係も視野に入れて取り扱ったが (川村 [2012c])、そこでも上述の態度がはっきりと見て取れた。

⁴¹以下、各詩論書の定義や例を参照する場合には、その作品が現存する最初期の詩論家であるパーマハ (Bhāmaha, 7 世紀)、ダンディン (Daṇḍin, 8 世紀)、ヴァーマナ (Vāmana, 8 世紀) の定義を重視する。彼らの定義や説明が後代の詩学の基礎や常識となり、当然詩人達もそれから逸脱しないよう詩作を行ったと考えられるからである。パーマハとダンディンは apārtha をそれぞれ次のように定義する。

KA 4.3–4: apārtham ity apētārthaṃ sa cārthaḥ padavākyaayoḥ /
arthavān varṇasaṃghāṭaḥ sūptinantaṃ padaṃ punaḥ //
padānām eva saṃghāṭaḥ sāpekṣāṇām parasparam /
nirākāṅkṣaṃ ca tad vākyaṃ ekavastunibandhanam //

意味を欠くものが apārtha と呼ばれる。そして意味とは語 (pada) と文のそれである。さらに語とは、音素の有意味の集合体であり、名詞接辞と動詞接辞で終わるものである。その文とは、相互に期待し合う他ならぬ語の集合体であり、[他の項目に対する] 期待を持たず、単一の主題を備えたものである。

KA 4.8: samudāyārthaśūnyaṃ yat tad apārthakam iṣyate /
dāḍimāni daśāpūpāḥ ṣaḍ ityādi yathoditam //

[語あるいは文] 全体の意味が空虚なものは〈無益な [文]〉と認められる。『10 本のザクロの樹があり、6 個のケーキがある』等が先述した通りの [〈無益な [文]〉] である。

KĀ 3.128–129: samudāyārthaśūnyaṃ yat tad apārtham itīṣyate /
unmattamattabālānām ukter anyatra duṣyati /
samudraḥ pīyate devair aham asmi jarāturaḥ /
amī garjanti jīmūtā harer airāvaṇaḥ priyaḥ //

[語あるいは文] 全体の意味が空虚なものは〈無益な [文]〉と認められる。狂人や酔っぱらいや子供の発言を除いて [これは] 欠陥となる。

[例] 大海が神々に飲み干される。私は老いに苦しむ。あの雲々は [雷鳴を] 轟かす。アイラーヴァナ象はインドラのお気に入り。

両詩論家の定義と彼らが挙げる例を見ると、詩節中で何の脈絡もない複数の文が使用される場合、当該の詩的欠陥が見出されることが分かる。なお、apārtha に対応する考えられる〈不明瞭な文〉(saṃdigdha) をヴァーマナが文の欠陥 (vākya-doṣa) に分類していることを根拠に (KAS 2.2.20: saṃśayakṛt saṃdigdham)、それを「無益な [文]」(apagataḥ arthaḥ

‘vāridajālavṛṣṭih’ の箇所て語の途中 (pada-madhyā) に中間休止 (yati) が来ており (波線は当該の韻律が中間休止を要求する箇所であることを示す)⁴²、これは明らかに〈休止が乱れた文〉(yatibhraṣṭa) と呼ばれる詩的欠陥である⁴³。

3.2 BhK 8.73–74, RA 3.14–16 → A 1.4.32–35

BhK 8.73: (10) rocamānaḥ kudrṣṭibhyo (9) rakṣobhyaḥ prattavān śriyam /

(11a) ślāghamānaḥ parastrībhyas tatrāgād rākṣasādhipaḥ //

邪悪な者達を喜ばせ、悪魔達に富を与え、他人の妻達に甘い言葉をかけながら悪魔達の主 (ラーヴァナ) がそこへやって来た。

BhK 8.74: (11d) aśapta (11b) nihnvāno 'sau sītāyai smaramohitaḥ /

(12) dhārayann iva caitasyai vasūni pratyapadyata //

愛に惑わされた彼は、シーターに [悪しき人柄を] 隠し、彼女に [決して傷つけないと] 誓った。そしてまるで彼女に借りがあるかのように、富を [与えることを] 約束した。

(9) 1.4.32 karmaṇā yam abhipraiti sa sampradānam // 「〈行為主体〉が贈与行為の〈目的〉を通じて志向する kāraka は〈受手〉と呼ばれる」⁴⁴

yasya tam [vākyam]) と解釈した。Prabhā も apārtha を vākya であると明言する (Prabhā on KĀ 3.128)。因に Prabhā は KĀ 3.129 に見出される欠陥を次のように説明する。Prabhā on KĀ 3.129: devaiḥ samudraḥ piyate / atra yogyatāyā abhāvāt padasamudāyārthasūnyatvam / ahaṃ jarāturo 'smi (jarāturosmi を修正) / amī jīmūtāḥ meghā garjanti / hareḥ indrasya airāvaṇaḥ airāvataḥ priyaḥ / iti trīṇi vākyaṇi svārthabodhasamarthāny api parasparānākāṅkṣatvāt teṣāṃ aṅgāṅgitvavirahena ekavākyatvābhāvaḥ / tatas ca na samudāyārthapratītiḥ / (『『大海が神々に飲み干される』というここでは、『『大海』と『飲み干される』の間に] 適合性が無いので語の集合体の意味は空虚なものである。『私は老いに苦しむ』・『あの雲々 (jīmūtāḥ=meghāḥ) は [雷鳴を] 轟かす』・『アイラーヴァナ象 (airāvaṇaḥ=airāvataḥ) はインドラの (hareḥ=indrasya) お気に入り』という三つの文は自身の意味を理解させることは出来るが、それらは相互に期待し合わないので従属関係を欠いているから、それらは単一文ではない。そしてそれ故、[各語あるいは各文] 全体の意味は理解されない』)

⁴²Prabhā on KĀ 3.152: padacchedaṃ padasya sūptiāntarūpasya chedaḥ virāmas taṃ yatim ahuḥ / tad uktaṃ chandomañjaryām—yatir jihveṣṭavīśrāmasthānaṃ kavibhir ucyate / iti / tadapetaṃ tadyatīśūnyam padasya madhye eva jihvāviśrāmyutaṃ ity arthaḥ / (『語の区切りについて。語の、即ち名詞接辞と定動詞接辞で終わる項目の区切りが、即ち休止が yati であると言われる。それは Chandomañjarī で次のように言われる。『yati とは舌が欲する休止場所であると詩人達は言う』と。それを欠くもの、即ちその yati を欠くものが [〈休止が乱れた文〉である]。語のままに途中で舌の休止と結びついたものが [〈休止が乱れた文〉である] という意味である』) A 1.4.14 sūptiāntarūpadam // (『名詞接辞で終わる語形と動詞接辞で終わる語形は pada と呼ばれる』)

⁴³KA 4.24: yatīś chando'dhirūḍhānām śabdānām yā vicāraṇā / tadapetaṃ yatibhraṣṭam iti nirdīśyate yathā // (『yati とは、韻律に合わせて並べられる諸語 [の配置] を吟味することであり、それを欠くものが〈休止が乱れた [文]〉と呼ばれる。例えば [次の如くである]』) ヴァーマナが yatibhraṣṭa を文の欠陥に分類していることを根拠に、それを「休止が乱れた [文]」(yateḥ bhraṣṭam [vākyam]) を解釈した。なお、詩節 a 句のテキストは 'chandonirūḍhānām' となっているが、そのままでは読解不能である。そこで、Trivedī [1909: 229, fn. 2] が報告する 'dhirūḍhānām' という異読と Udyānavṛtti の読みを考慮して、当該箇所を 'chando'dhirūḍhānām' と読み、それを「韻律にのぼる諸語 (= 韻律に合わせて配列される諸語)」(chandaḥ adhirūḍhānām [śabdānām]) という意味で解釈した。また、vicāra や vicāraṇā という語は通常「熟考、吟味」を意味し (SK 3616: pramāṇair vastutattvaparikṣaṇam vicāraḥ, AmK 1.5.2d: carcā samkhyā vicāraṇā)、その意味での用例も多い。Udyānavṛtti はそれを 'vibhajyaghaṭanā' (『[諸語の] 区分されるべき (vi=vibhajya) 動き (cāraṇā=ghaṭanā)』) と説明するが (UV on KA 4.24)、vicāraṇā という語のそのような用例があるかどうか疑問である。

ダンディンとヴァーマナの定義は次の通りである。KĀ 3.152: ślokeṣu niyatāsthānaṃ padacchedaṃ yatim viduḥ / tadapetaṃ yatibhraṣṭam śraṇodvejanam yathā // (『詩節中の決められた場所で諸語を区切る事が yati と言われる。それを欠くものが〈休止の乱れた [文]〉であり、耳障りなものである。例えば [次の如くである]』) KAS 2.2.3: virasavirāmaṃ yatibhraṣṭam // (『不快な休止を持つものが〈休止の乱れた [文]〉である』) KASV on KAS 2.2.3: virasaḥ śrutikatur virāmo yasmimś tad virasavirāmaṃ yatibhraṣṭam // (『virasavirāma とは不快な、即ち耳障りな休止を持つものという意味であり、それが〈休止の乱れた [文]〉である』)

⁴⁴KV on A 1.4.32: anvarthasāñjānavijñānād dadātikarmaṇā iti vijñāyate / upādhyāyā gām dadāti / māṇavakāya bhikṣam

[BhK 説明] (9) 'rakṣobhyaḥ prattavān śriyam' (「悪魔達に富を与えた [ラーヴァナ]」)において、「悪魔」(rakṣas) はラーヴァナが贈与行為の〈目的〉である富を通じて志向する対象 (karmaṇā yam abhipraiti) であるから A 1.4.32 により〈受手〉と呼ばれる。〈受手〉を表示する項目の後には A 2.3.13 caturthī sampradāne (「他の項目によって表示されていない〈受手〉が表示されるべき時、第四格名詞接辞が起こる」) により第四格名詞接辞が起こる。以下も同様である。

- (10) A 1.4.33 rucyarthānām prīyamāṇaḥ // 「動詞語根 ruc (「喜ばす」) と同じ意味を持つ動詞語根が使用される時、喜ばされる者である kāraka は〈受手〉と呼ばれる」

[BhK 説明] (10) 'rocamaṇaḥ kudrṣṭibhyaḥ' (「邪悪な者達を喜ばせる [ラーヴァナ]」)において、「邪悪な者」(kudrṣṭi) は羅刹王ラーヴァナの登場に歓喜し、彼により喜ばされる者 (prīyamāṇa) であるから A 1.4.33 により〈受手〉と呼ばれる⁴⁵。「[切望の〈行為主体〉とは] 別のもの (切望対象) を〈行為主体〉とする切望行為」(anyakartṛka-abhilāsa) が動詞語根 ruc が表示する意味であり (KV on A 1.4.33)、当該の事例では邪悪な者達がラーヴァナを好み、切望していることになる⁴⁶。

- (11) A 1.4.34 ślāghahnuṣṭhāśapāṃ jñīpsyamāṇaḥ // 「動詞語根 ślāgh (「賞賛する」)、hnuṢ (「隠す」)、sthā (「思いを告げる」)、śap (「誓う、罵る」) が使用される時、[〈行為主体〉の意図を] 知らしめようと望まれている対象である kāraka は〈受手〉と呼ばれる」⁴⁷

[BhK 説明] (11a) 'ślāghamāṇaḥ parastrībhyaḥ' (「[ラーヴァナは] 他人の妻達に甘い言葉をかけながら」)において、「他人の妻」(parastrī) はその賞賛を知らしめようとラーヴァナに望まれている対象 (jñīpsyamāṇa) あるから A 1.4.34 により〈受手〉と呼ばれる (動詞語根 ślāgh の例)⁴⁸。(11b) 'nihnuvāṇaḥ asau sītāyai' (「彼はシーターに [悪しき人柄を] 隠して」)において、「シーター」(sītā) は、残酷さ等といった悪しき人柄が無いことを知らしめようとラーヴァナに望まれている対象であるから A 1.4.34 により〈受手〉と呼ばれる (動詞語根 hnuṢ の例)⁴⁹。(11d) 'asapta...sītāyai' (「シーターに [決して傷つけないと] 誓った」)において、「シーター」(sītā) は、決して傷つけないという誓いを立てたことを知らしめようとラーヴァナに望まれている対象であるから A 1.4.34 により〈受手〉と呼ばれる⁵⁰。ポイントは、A 1.4.34 で

dadāti / (「語源的意味を有する術語が理解されるから、『動詞語根 dā が表示する行為の〈目的〉を通じて』と [規則は] 理解される。【例】彼は師に牛を与える。彼は少年に施しを与える) Nyāsa によれば sampradāna という語は「正しく特別に [何かを] 与えられる X」(samyak prakarṣeṇa dīyate yasmai tat) を意味する大術語 (mahatī samjñā) である (Nyāsa on KV to A 1.4.32)。

なお、パタンジャリは規則中の 'abhipraiti' について次のように述べている。MBh on A 1.4.32 (I.330.15–17): abhir ābhimukhye vartate praśabda ādikarmaṇi / tena yaṃ cābhipraiti yaṃ cābhipraiṣyati yaṃ cābhiprāgād ābhimukhyamātre sarvatra siddhaṃ bhavati // (Joshi and Roodbergen [1975: 117.23–29]: 'Abhi is used in the sense of ābhimukhya : 'having somebody in view'. The word pra (is used to indicate) the ādikarman : 'beginning of an action'. Therefore as long as (the idea of) ābhimukhya : 'having somebody in view' is present, we can manage in all cases, (namely,) yaṃ abhipraiti : 'whom one has in view', yaṃ abhipraiṣyati : 'whom one will have in view', and yaṃ abhiprāgāt : 'whom one had in view'.')

⁴⁵ Jayamaṅgalā on BhK 8.73: ye kudrṣṭayaḥ kubuddhayaḥ tān svaviṣaye sprhāvataḥ kārayann ity arthaḥ / (「邪悪な者達 (kudrṣṭayaḥ=kubuddhayaḥ) を、自分 (ラーヴァナ) に対して熱狂する者にする [ラーヴァナ] という意味である」)

⁴⁶ Kāśikāvṛtti が挙げる「砂糖菓子はデーヴァダッタを喜ばす」(devadattāya rocate modakaḥ) という例を用いてこの構造を説明しよう。この文において、デーヴァダッタの切望の対象である砂糖菓子が〈行為主体〉として機能するが (KV on A 1.4.33: devadattasthāyābhihāsaḥ modakaḥ kartā), 動詞語根 ruc が表示する意味はその砂糖菓子に対するデーヴァダッタの切望行為であり、この文は「デーヴァダッタは砂糖菓子を望む」と意味的に等価である。

⁴⁷ KV on A 1.4.34: jñīpsyamāṇaḥ jñāpayitum iṣyamāṇaḥ bodhayitum abhipretāḥ // (「jñīpsyamāṇa とは、[X を] 知らしめようと望まれているもの、即ち [X を] 理解させようと意図されるものという意味である」)

⁴⁸ この構造については次の説明を見よ。KV on A 1.4.34: devadattāya ślāghate / devadattam ślāghamāṇas tāṃ ślāghām tam eva jñāpayitum icchati ity arthaḥ / (「彼はデーヴァダッタを賞賛する。デーヴァダッタを賞賛している彼は、その賞賛を同じ彼に知らしめようと欲している、という意味である」) Sarvaṣāṭhīnā on BhK 8.73: tāsaṃ yathā viditam tathā tāḥ stuvānas tatkāmakatayety arthaḥ / (「彼女達に欲望を抱き、彼女達に知られるように彼女達を賞賛している [ラーヴァナ] という意味である」)

⁴⁹ Jayamaṅgalā on BhK 8.74: krauryādikaṃ na me 'stīti sītāṃ jñāpayitum eṣayann ity arthaḥ // (「『残酷さ等は俺には無い』ということシーターに知らしめようと欲する [ラーヴァナ] という意味である」)

⁵⁰ Jayamaṅgalā on BhK 8.74: śapathaṃ sītāṃ jñāpayitum aiśad ity arthaḥ / (「[ラーヴァナは] 誓いをシーターに知ら

挙げられる四つの動詞語根が表示する行為を通じて、或る〈行為主体〉が自身の意図 (svāśaya) を或る相手 X に知らしめようと欲する時、その X は〈受手〉と呼ばれるということである⁵¹。

- (12) A 1.4.35 dhārer uttamaraṇaḥ // 「NiC で終わる動詞語根 dhṛ (「借りがある」) が使用される時、貸主である kāraka は〈受手〉と呼ばれる」⁵²

[BhK 説明] (12) ‘dhārayan iva ca etasyai’ (「そしてまるで彼女に借りがあるかのように」) において、「ラーヴァナ」は恰も借主 (adhamarṇa)、「彼女 (シーター)」(etad) は貸主 (uttamarṇa) であるかのように見なされており、貸主である「彼女 (シーター)」は A 1.4.35 により〈受手〉と呼ばれる。

RA 3.14: ghanair ivāmbho madavāri dantibhir

(9) dadadbhir urvyai śamitam śanai rajah /

tathāśvavaktracyutaphenabindubhī

(10) rucim nr̥pāyeva tadānuvartibhiḥ⁵³ //

その時、雲が大地に水を与えるように、[また] 従者が王を喜ばすものを与えるように、象達は地にマダ液を与えて徐々に砂埃を鎮めた⁵⁴。同様に、馬達の口から垂れる泡の滴も [砂埃を鎮めた]。

[RA 説明] (9) ‘madavāri dantibhiḥ dadadbhiḥ urvyai’ (「大地に水を与える象」) において、「大地」(urvi) は象が贈与行為の〈目的〉である「水」を通じて志向する対象 (karmaṇā yam abhipraiti) であるから、A 1.4.32 により〈受手〉と呼ばれる。(10) ‘rucim nr̥pāya’ (「王を喜ばすものを [与える従者達]」) において、「王」(nr̥pa) は贈与物により喜ばされる者であるから A 1.4.33 により〈受手〉と呼ばれる。ここで注意すべきは、動詞語根

しめようと欲したという意味である」) *Sarvapaṭhā* on BhK 8.74: na kadācid aparātsyāmīti śapatham akārṣid ity arthaḥ / (「[ラーヴァナは] 『俺はどんな時も [お前を] 傷つけたりしない』という誓いを立てたという意味である」)

⁵¹ この点については次の例とその説明を見よ。SK 572: gopī samarāt kṛṣṇāya ślāghate hñute tiṣṭhate śapate vā // (「愛ゆえに、牛飼いの妻はクリシュナを賞賛する、クリシュナを隠す、クリシュナに思いを告げる、クリシュナを罵る」) BM on SK 572: manmathapīdāvasād gopī ātmastutyā virahavedanām kṛṣṇam bodhayatīty arthaḥ / kṛṣṇasyaiva stutyatve tu dviṭīyaivety aḥuḥ // hñute iti / sapatnyapanayanena svāśayaṃ kṛṣṇam bodhayatīty arthaḥ / tiṣṭhata iti / gantavyam ity ukte ‘pi sthityā svāśayaṃ kṛṣṇam bodhayatīty arthaḥ / prakāśanastheyākhyayoś ca ity ātmanepadam / śapatha iti / upāmbhena svāśayaṃ kṛṣṇam bodhayatīty arthaḥ / (「牛飼いの妻は愛の苦しみにやられて、自身(クリシュナ)を賞賛することで別離の感情をクリシュナに知らしめる、という意味である。一方、賞賛対象は『クシシュナ』に他ならないから [kṛṣṇa という語の後には] 第二格名詞接辞だけが起ると [或る者達は] 言う。hñute について。彼女は恋敵を追い払うことで自身の意図をクリシュナに知らしめる、という意味である。tiṣṭhate について。『私は] 行かねばならない』と言われたにもかかわらず、彼女は思いを告げることで自身の意図をクリシュナに知らしめる、という意味である。prakāśanastheyākhyayoś ca (A 1.3.23) に基づいて ātmanepada が起こる。śapathe 以下について。彼女は罵ることで自身の意図をクリシュナに知らしめる、という意味である」)

Bālanoramā が説明するように、A 1.4.34 で挙げられる動詞語根 sthā の意味は、動詞語根 sthā の後への ātmanepada 導入の意味条件として A 1.3.23 で挙げられる「自身の思いを告げること」(prakāśana=svābhiprāyakathana) である。A 1.3.23 prakāśanastheyākhyayoś ca // (「自身の思いを告げることと調停者の選出を意味する場合、動詞語根 sthā の後に ātmanepada が起こる」) KV on A 1.3.23: svābhiprāyakathanam prakāśanam /...prakāśane tāvat—tiṣṭhate kanyā chātrebhyah / tiṣṭhate vṛṣālī grāmaputrebhyah / prakāśayaty ātmānam ity arthaḥ / stheyākhyāyām—tvayi tiṣṭhate / mayi tiṣṭhate / (「prakāśana とは自身の思いを告げることである。...【例】まず自身の思いを告げることの意味する場合の例。娘は弟子達に思いを告げる。シュードラの女は村にいる息子達に思いを告げる。自身 [の感情] を明らかにするという意味である。調停者の選出を意味する場合の例。彼は貴方に裁定を委ねる。彼は私に裁定を委ねる」)

⁵² KV on A 1.4.35: devadattāya śataṃ dhārayati / yajñadattāya śataṃ dhārayati / (「彼はデーヴァダッタに百の借りがある。彼はヤジュナダッタに百の借りがある」)

⁵³ 校訂者は ‘tadānukartṛbhiḥ’ と読むべきであるという案を提示しているが、テキストのままでも読解可能である。

⁵⁴ ‘madavāri dantibhir dadadbhir urvyai’ の直訳は「地にマダ液を与える象達によって」であり、比喩基準 (upamāna) となる「雲」(ghana) と「従者」(anuvartin) の場合も同様である。

ruc の派生形である ruci (「喜ばすもの」という語が使用されていることから分かるように⁵⁵、当該箇所は A 1.4.33 が例証される箇所であり A 1.4.32 が例証される箇所ではないので、当該の「王」は A 1.4.32 ではなく A 1.4.33 により〈受手〉と呼ばれるということである。もし当該の「王」を「喜び」を与えられる間接目的と解せば、「王」が〈受手〉と呼ばれることは A 1.4.32 により成り立つから A 1.4.33 の例証にはなり得ず、それは ruci という語を使用するパウマカの意図するところではない。

RA 3.15: (11a) śaślāghe⁵⁶ dhutarajase pathe⁵⁷ janaughah

samprītyā na pathi (11b) guṇāya nihnute sma /

(11c) sarvasmai pratimukham āgatāya tasthe

dhvastāya (11d) kṣītirajase tathāpy aśapta //

路上にいる群衆は舞い動く砂埃を賞賛し、有り余る歓喜を路上で隠さず、面前に飛来した一切 [の砂埃] に敬意を表した。しかし大地に落ちた砂埃には罵倒を浴びせた。

[RA 説明] (11a) ‘śaślāghe...dhutarajase’ (「[群衆は] 舞い動く砂埃を賞賛した」) において、「舞い動く砂埃」(dhutarajas) はその賞賛を知らしめようと群衆に望まれている対象 (jñīpsyamāna) であるから A 1.4.34 により〈受手〉と呼ばれる (動詞語根 ślāgh の例)。(11b) ‘samprītyāḥ na...guṇāya nihnute’ (「[群衆は] 有り余る歓喜を隠さなかった」)⁵⁸ については後述する (動詞語根 hnuN の例)。(11c) ‘sarvasmai...āgatāya tasthe’ (「[群衆は] 飛来した一切 [の砂埃] に敬意を表した」) において、「一切 [の砂埃]」(sarva) は自分達の思い (ここでは畏敬の念) を知らしめようと群衆達に望まれている対象であるから A 1.4.34 により〈受手〉と呼ばれる (動詞語根 sthā の例)。(11d) ‘dhvastāya kṣītirajase...aśapta’ (「大地に落ちた砂埃には罵倒を浴びせた」) において、「大地に [落ちた] 砂埃」(kṣītirajas) は非難を知らしめようと群衆達に望まれている対象であるから A 1.4.34 により〈受手〉と呼ばれる (動詞語根 śap の例)。(11b) は、upasarga である ni に先行される動詞語根 hnuN が使用されているから、A 1.4.34 が挙げる動詞語根 hnu が使用されるパターンの例証を意図したものである。また guṇa という語の後に、〈受手〉という術語を導入根拠とする第四格名詞接辞が後続しているから、パウマカはここで guṇa という語の表示対象である「豊かさ (あるいは性質)」が A 1.4.34 により〈受手〉と呼ばれると考えているようである。しかし A 1.4.34 の規定内容に当てはめると、ここでは「豊かさ」が「[〈行為主体〉の意図を] 知らしめようと望まれている対象」となるから、群衆は当該の行為を通じて自身の何らかの意図を「豊かさ」に知らしめようとしていることになり、この事態は常識的に考えて不自然である。BhK 8.73–74 や Kāśikāvṛtti 等が挙げる A 1.4.34 に対する例文中では、当然何らかの人格ある存在が「[〈行為主体〉の意図を] 知らしめられようと望まれている対象」の役割を果たしている。(11a, c–d) は「砂埃」が擬人化されていると考えれば構造上問題はないが、(11b) の表現は A 1.4.34 の規定にそぐわず、それを例証するものとして正しく機能しているかどうか疑問である。

RA 3.16: na sa tatra vibhūtibhāji sainye

⁵⁵ ruci は、US 4.119 igupadhāt kit (「iK を最終音の直前の音とする動詞語根の後に iN 接辞が起こり、その接辞は KIT と見なされる」) により動詞語根 ruc の後に uṇādi 接辞 iN が導入されて派生する語である。uN 等の接辞は、A 3.3.1 uṇādayo bahulam (「行為が現在時に属する場合、名称語の領域で、uN で始まる一群の接辞が多様な意味で動詞語根の後に起こる」) に基づき、多様な意味を表示し得る。ここでは、A 1.4.33 が例証される箇所であることを考慮して、iN が表示する意味を〈行為主体〉あるいは〈手段〉として理解し、語源的には「喜ばすもの」(rocate) あるいは「喜ばす手段」(rocate anena) を意味するものとして ruci という語を解釈した。詩節中には示されていないが、王を「喜ばすもの」としては「富」や「勝利」等が考えられるだろう。ただし、A 3.3.1 で規定されるように、uN 等の接辞の導入によって派生される語は名称語 (sañjñā) である点に留意されたい。従って、この場合「富」や「勝利」を ruci という語の訳語として当てるべきであるが、A 1.4.33 の例証が明瞭になるよう、詩節の訳には語源的な意味をそのまま反映させている。ruci を名称語として訳せば、当該箇所を「王の富を与える従者」や「王の勝利を与える従者」と訳せるだろう。

⁵⁶ テキストの ‘śaślāghe’ を校訂者の案に従って修正する。

⁵⁷ テキストは ‘patho’ となっているが、このままでは読解困難なので校訂者の修正案に従う。

⁵⁸ 直訳は「[群衆は] 歓喜の豊かさ (あるいは性質) を隠さなかった」であり、「賞賛に値する砂埃を見て群衆は歓喜の表情を露にしていた」という意味であろう。

puruṣo (12) dhārayate sma yaḥ parasmai /

ata eva yayau vivṛddhatoṣaḥ

sprhayams tyāgaguṇāya pārthivasya //

敵に負債を抱えており、まさにこれ故に喜捨という王の徳を求め、満足度を高めるために [その下へ] 向かう者、そのような者は繁栄を享受するその軍隊の中にはいなかった。

[RA 説明] (12) ‘dhārayate sma yaḥ parasmai’ (「敵に負債を抱える者」) において、「敵」(para) は或る人にお金を貸す貸主 (uttamaṇa) であるから A 1.4.35 により〈受手〉と呼ばれる。

[ノート] BhK 8.73–74 では A 1.4.34 が提示する項目のうち、動詞語根 sthā の例は示されていないのに対し、RA 3.15 では全てのパターンが例証されている。後に見るように、バツティが規則が規定する全パターンを例証するのは稀であるのに対して、バウマカは各規則が規定する全パターンを出来る限り例証しようとする傾向にある。また先に見た RA 3.12–3.13 では規則とそれを例証する各語の順序はおろか規則順序と詩節の順序もばらばらだったのに対し、RA 3.14–16 では規則順序と詩節の語順が一致しているのに加え、RA 3.15 では規則 (A 1.4.34) の項目の提示順序と語順も一致していることから、やはりバウマカにも互いの順序を一致させようとする意識があったと考えられる。後に見る詩節でもこの態度は貫かれている。

一方、A 1.4.34 を例証するために RA 3.15 で使用される表現 ‘samprītyā na...guṇāya nihnute’ は規則の規定にそぐわず、パーニニ文法の規定から逸脱したものと云わざるを得ない。パーニニ文法の規定に違反する語の使用は〈文法学 (あるいは正語) の欠如〉(śabdahīna) ⁵⁹、あるいは〈不正語〉(asādhu) と呼ばれる詩的欠陥であり⁶⁰、これはパーニニの文法規則の例証をその主眼に置く作品としては致命的である。さらに、RA 3.15 では a 句と b 句にそれぞれ ‘pathe’⁶¹ と ‘pathi’ と

⁵⁹ KA 4.22 sūtrakṛtpādakāreṣṭaprayogād yo ‘nyathā bhavet / tam āptaśrāvākāsiddheḥ śabdahīnam vidur yathā // (「ストトラ作者 (パーニニ) とパダ作者が好む言語使用とは異なるであろう [言語使用] は、信頼出来る人達 (三聖) の弟子達 (パーニニ文法家) の間では成立しないので〈文法学 (あるいは正語) の欠如〉と言われる。例えば [次の如くである]」) ‘pādakāra’ が具体的に誰を指すのかを現段階で筆者は確定できていない。Udyānavṛtti は当該箇所を ‘pādakāra’ と読み (韻律上は問題ない)、それをカーティアーヤナを指すものと説明して、さらに ‘sūtrakṛtpādakāra’ という表現によりバタンジャリのことも含意されると解釈する (UV on KA 4.22: sūtrakṛd bhagavān pāṇinīḥ / pādakāraḥ kātyāyanaḥ / bhāṣyakāraś copalakṣyate)。KA 6.1 に対する注釈を見る限り、ここでも Udyānavṛtti は pada という語をカーティアーヤナの Vārtika を指すものとして解釈していると考えられるが、川村 [2012a: 93, fn. 47] でも述べたように今の所筆者は pada という語が Vārtika を指す用例を発見できておらず、Udyānavṛtti の解釈に従う事にはためらいを覚える。なお Sastry [1970: 80] とそれを参照したであろう古宇田 [2011: 177] は ‘pādakāra’ という読みに依拠して、それをヴェーダサンヒターの padapāṭha の作者達を指すものと理解している。

KĀ 3.148: śabdahīnam anālakṣyalakṣyalakṣaṇapaddhatiḥ / padaprayogo ‘śiṣṭeṣṭaḥ śiṣṭeṣṭas tu na duṣyati // (「語 (特徴付けられるべきもの) と文法規則 (特徴付けられるもの) の道 (用例と規定) が見られず、教養文化人が好まない語の使用が〈文法学 (あるいは正語) の欠如〉である。一方、教養文化人が好む語の使用は欠陥とはならない」)

‘śabdahīna’ という複合語については様々な解釈が可能であるが、まずその複合語が KA 4.22 や KĀ 3.148 中で prayoga という行為名詞と同格であることを根拠に、動詞語根 hā に後続する kṛt 接辞 Kta は A 3.3.114 napuṃsake bhāve ktaḥ (「行為が表示されるべき時、中性形で、動詞語根の後に kṛt 接辞 Kta が起こる」) に基づいて行為 (bhāva) を表示するものとして理解する。そして、やや時代が下るが Pratāparudrayaśobhūṣaṇa (13 世紀から 14 世紀) 中で ‘śabda’ が ‘śabdaśāstra’ と言い換えられる点 (下記参照) を根拠に śabda という語を「文法学」という意味で理解し、‘śabdahīna’ を「文法学 (あるいは正語) の欠如」(śabdahīna) という行為名詞として解釈した。この欠陥に対応するものとしてヴァーマナが挙げる ‘asādhu’ との関連を考慮すれば (下記の注を参照)、それを「文法学を欠く (= 文法学に従っていない) [語]」(śabdahīna [padam]) と解釈することも出来るが、その場合 ‘-prayogaḥ’ という行為名詞と噛み合わない。なお、Pratāparudrayaśobhūṣaṇa では ‘śabdahīna’ は文の欠陥とされている。Pratāparudrayaśobhūṣaṇa (302.14): śabdaśāstrahatam vākyam śabdahīnam prakīrtiyate // (「śabdahīna とは文法学を欠く文であると言われる」)

⁶⁰ KAS 2.1.5: śabdasmṛtyā viruddham asādhu // (「〈不正語〉とは文法学と矛盾するものである」) KASV on KAS 2.1.5: śabdasmṛtyā vyākaraṇena viruddham padam asādhu // (「文法学 (śabdasmṛti=vyākaraṇa) と矛盾する語が〈不正語〉である」)

⁶¹ 実際のテキストは ‘patho’ であり、そのままでは読解不能であるが、「群衆」がいる場所を示すものとしてバウマカ

いう語が使用されているが、「群衆」が路上にいることを示すにはどちらか片方を述べれば十分である。文中におけるこのような同義語の無意味な使用は〈同義語反復〉(punarukta, ekārtha) と呼ばれる詩的欠陥であり⁶²、言葉を使用する上で絶対に犯してはならない大原則である⁶³。また後述するように、RA 3.11–35 では陳腐でありふれた同一の語が繰り返し使用されるが、このことから推測されるように、当該の二語は詩節の韻律合わせのためだけに使用されている可能性が濃厚である。特に意味無く、詩行を埋める (pādapūraṇa) ためだけに使用される語は〈無益な語〉(anarthaka) と呼ばれ、それは詩的欠陥と見なされる⁶⁴。

3.3 BhK 8.75, RA 16–18 → A 1.4.36–37

BhK 8.75: ⁽¹³⁾tasyai spr̥hayamāno 'sau bahu priyam abhāṣata /
sānunitīś ca sītāyai ^(14a)nākrudhyan nāpy ^(14d)asūyata //

彼は彼女を望み、[彼女が] 気に入ることを多く語った。そして和解の心を持つ彼はシーターに腹を立てず、非難もしなかった。

(13) A 1.4.36 spr̥her īpsitaḥ // 「動詞語根 spr̥h (「望む」) が使用される時、望まれる対象である kāraka

がその表現を使用したであろうことは明らかである。RA 3.11–35 中にはその類いの表現が多数見受けられるからである (RA 3.12 [pathi]、RA 3.15 [pathi]、RA 3.20–21 [mārga, pathi])。

⁶²KĀ 4.15: atrārthapunaruktaṃ yat tad evaikārtham iṣyate / uktasya punarākhyāne kāryāsambhavato yathā / (「既に述べられた[事柄]を再度述べても[新たな]効果は生じ得ないので、[既に述べられた]事柄を再び述べることは、ここ(詩学の体系)ではまさに〈同義語反復〉と認められる。例えば[次の如くである]」) この説明を見る限り、バーマハは ekārtha という語を「同じ意味を持つ言及(表現) (ekāḥ arthaḥ yasmin [yasya] tad uktam) と解釈していると考えられる。

ダンディンは次のように定義する。KĀ 3.135: aviśeṣeṇa pūrvoktaṃ yadi bhūyo 'pi kīrtiyate / arthataḥ śabdato vāpi tad ekārtham matam yathā / (「先に述べられたものが、語あるいは意味の点で違いが無い仕方でも再び述べられるならば、その場合〈同義語反復〉が認められる。例えば[次の如くである]」) 語形が同じであっても意味が異なれば〈同義語反復〉にはならない点に留意されたい (Prabhā on KĀ 3.135: tena ca bhinnārthaka ekākāraśabdaprayoge nāyam doṣaḥ / anyathā sarvasyāpi yamakasyaikārthadoṣagrastatvāpattiḥ)。ポイントは語形が同じであろうが異なろうが意味に違いがなければ〈同義語反復〉と見なされるということである。〈同音反復〉(yamaka) のように語形が同じでも意味が異なれば欠陥とは見なされない。

なお、バーマハと異なりヴァーマナは ekārtha を文の欠陥に分類している。KAS 2.2.11: uktārthapadam ekārtham // (「〈同義文〉とは既に意味が述べられた諸語が使用される[文]である」) KASV on KAS 2.2.11: uktārthāni padāni yasmimś tad uktārthapadam ekārtham iti / (「uktārthapada とは既に意味が述べられた諸語が使用される[文]という意味であり、それが〈同義文〉と言われる」)

⁶³バタンジャリが Mahābhāṣya 中でしばしば語る「その意味が既に述べられた項目は使用されない」(uktārthānām aprayogaḥ) という大原則はあまりにも有名である。その一例を挙げておこう。MBh on A 5.2.94 (II.392.20–23): atha matvarthīyān matvarthīyena bhavitavyam / na bhavitavyam / kiṃ kāraṇam / arthagatyarthaḥ śabdaprayogaḥ / arthaṃ sampratyāyayisyāmīti śabdaḥ prayujyate / tatraikenoktatvāt tasyārthasya dvitīyasya prayogeṇa na bhavitavyam / kiṃ kāraṇam / uktārthānām aprayoga iti / (「[問] matUP の意味を持つ接辞で終わる項目の後に matUP の意味を持つ接辞が起こるはずである。【答】起こってはならない。【問】どうしてか。【答】語は意味を理解させるために使用される。『私は意味を正しく理解させよう』と考えた上で語が使用される。その場合、一つの項目によってその意味が既に述べられているなら、二つ目の項目は使用されてはならない。【問】どうしてか。【答】その意味が既に述べられた項目は使用されないという[道理があるから]」)

⁶⁴ヴァーマナは次のように述べる。KAS 2.1.9: pūraṇārtham anarthakam // (「〈無益な語〉とは[詩行を]埋めるための語である」) KASV on KAS 2.1.9: pādapūraṇārthamātraprayuktam avyayam cātipadam anarthakam / daṇḍāpūpanyāyena padam anyad apy anarthakam eva / yathā / uditas tu hāstikavinīlam ayaṃ timiraṃ nipīya kiraṇaiḥ savitā / atra tuśabdasya pādapūraṇārtha eva prayogaḥ / (「詩行を埋めるためだけに使用される ca 等の不変化詞は〈無益な語〉である。棒とケーキの道理に基づき、[不変化詞]以外の語もまさに〈無益な語〉となる。例えば『しかし、象の群のように青黒いこの闇を[その]光線で飲み干して、太陽が昇った』(uditas tu hāstikavinīlam ayaṃ timiraṃ nipīya kiraṇaiḥ savitā) である。ここで tu (「しかし」) という語は詩行を埋めるためだけに使用されている」) ca 群の項目は A 1.4.57 cādayo 'sattve (「〈実体〉を表示しない時、ca (「そして」) 群の項目は nipāta と呼ばれる」) により nipāta と呼ばれ、nipāta と呼ばれる項目は A 1.1.37 svarādinipātam avyayam (「svar (「天界」) 群の語形及び nipāta は avyaya と呼ばれる」) により avyaya と呼ばれる。なお「棒とケーキの道理」については Jacob [1983: 29–30] を参照せよ。

は〈受手〉と呼ばれる」⁶⁵

[BhK 説明] (13) ‘tasyai spr̥hayamāṇaḥ’ (「[彼は] 彼女を望み」)において、「彼女(シーター) (tad) はラーヴァナに望まれる対象 (īpsita) であるから A 1.4.36 により〈受手〉と呼ばれる。

(14) A 1.4.37 krudhadruherṣyāsūyārthānām yaṃ prati kopāḥ // 「動詞語根 krudh (「立腹する」) の意味、druh (「悪意を抱く」) の意味、īrṣy (「嫉妬する」) の意味、asūya (「非難する、けなす」) の意味と同じ意味を持つ動詞語根が使用される時、怒りが向けられる対象である kāraka は〈受手〉と呼ばれる」⁶⁶

[BhK 説明] (14a) ‘sītāyai na akrudhyan’ (「[彼は] シーターに腹を立てなかった」)において、「シーター (sītā) は彼女を誘惑するラーヴァナの怒りが向けられる対象 (yaṃ prati kopāḥ) であるから A 1.4.37 により〈受手〉と呼ばれる (動詞語根 krudh の意味を持つ動詞語根の例)。(14d) ‘sītāyai...na api asūyata’ (「シーターを非難もしなかった」)において、「シーター」はラーヴァナの怒りが向けられる対象であるから同じく A 1.4.37 により〈受手〉と呼ばれる (動詞語根 asūya の意味を持つ動詞語根の例)⁶⁷。

RA 3.16: na sa tatra vibhūtibhāji sainye

puruṣo dhārayate sma yaḥ parasmai /

ata eva yayau vivṛddhatoṣaḥ

(13) spr̥hayams tyāgaguṇāya pārthivasya //

敵に負債を抱えており、まさにこれ故に喜捨という王の徳を求め、満足度を高めるために [その下へ] 向かう者、そのような者は繁栄を享受するその軍隊の中にはいなかった。

RA 3.17: mukhacchadābhe rajasi praśānte

(14a) cukrodha dantī pratidantine yaḥ /

ādhoraṇeṇāśu vivartito ’sāv

(14b) adruhyatā bhūpataye prasahya //

⁶⁵ KV on A 1.4.36: puṣpebhyaḥ spr̥hayati / phalebhyaḥ spr̥hayati / (「彼は花々を望む。彼は果実を望む」) 当該規則と A 1.4.49 の違いについては川村 [2012a: 101–102, fns. 76–77] を見よ。

⁶⁶ KV on A 1.4.37: amarṣaḥ krodhaḥ / apakāro drohaḥ / akṣamā īrṣyā / guṇeṣu doṣāviṣkaraṇam asūyā / ...krodhas tāvat kopa eva / drohādāyo ’pi kopaprabhavā eva gṛhyante / tasmāt sāmānyena viṣeṣaṇam yaṃ prati kopāḥ iti / devadattāya krudhyati / devadattāya druhyati / devadattāya īrṣyati / devadattāyāsūyati // (「krodha とは憤怒であり、droha とは悪意であり、īrṣyā とは嫉妬であり、asūyā とは長所の中から短所を明らかにすることである。... まずもって krodha は怒りに他ならない。悪意等もまさに怒りから生まれるものとして理解される。従って、『怒りが向けられる対象』というのには [怒り等の感情が向けられる対象の] 一般的な限定である。【例】彼はデーヴァダッタに腹を立てる。彼はデーヴァダッタに悪意を抱く。彼はデーヴァダッタに嫉妬する。彼はデーヴァダッタをけなす」)

なお、A 1.4.37 中に挙げられる ‘asūya’ は kaṇḍū 群の動詞語根 asū に yaK が導入された語形である (BM on SK 574: asūn upatāpe kaṇḍvādiḥ)。yaK は A 3.1.27 kaṇḍvādiḥyo yak (「kaṇḍū 群に含まれる項目の後に yaK 接辞が起こる」) により導入され、yaK で終わる項目は、特定の接辞で終わる項目に〈動詞語根〉(dhātu) という術語を付与する A 3.1.32 sanādyantā dhātavaḥ (「saN 等で終わる項目は〈動詞語根〉と呼ばれる」) により〈動詞語根〉と呼ばれる。

⁶⁷ ジャヤマンガラによれば当該の ‘asūyata’ は div 群 (第四類) の動詞語根 sū (DhP IV.24 sūN prāniprasave) の派生形であり (sū + IAN)、彼はその動詞語根に A 1.4.37 中に挙げられる動詞語根 asūya の意味を想定している (Jayamaṅgalā on BhK 8.75)。そして同様の議論が *Mādhaviyadhātuvṛtti* 中にも見られ、それによれば動詞語根 sū は非難・けなすこと (asūyā) を意味する場合があるから、A 1.4.37 の適用条件を満たす。 *Mādhaviyadhātuvṛtti* on DhP IV.22: ayam asūyārtho ’pi / tena devadattāya sūyate iti krudhadruha—ity caturthī bhavatiṭy ātreyaḥ / (「これ (動詞語根 sū) は非難 (asūyā) も意味する。それ故、アートルーヤは『彼はデーヴァダッタを非難する (devadattāya sūyate) というように、krudhadruha 云々 (A 1.4.37) に基づいて [『デーヴァダッタ』は〈受手〉と呼ばれ、] 第四格名詞接辞が起こる』と言う」) なお、*Dhātupāṭha* 中に挙げられる sūN の s̥ には、派生手続きに入る段階で A 6.1.64 dhātūvādeḥ ṣaḥ ṣaḥ (「動詞語根の初音である ṣ 音に s 音が代置される」) により s 音が代置される。

顔の覆いの如き砂埃が鎮まった時、[或る]象は相手象に腹を立てたが、王に敵意を抱かない (従順な) 象乗りによって力づくで即座に押さえられた⁶⁸。

RA 3.18: śrīmāntam ālokyā param tadānīm

(14c) naivairṣyad asmai nṛpabhṛtyavargaḥ /
svabhartṛbhāvāhitasādhuceṭā

(14d) naivābhyasūyām akṛta dviṣe 'pi //

その時、王に仕える臣下集団は高潔なる敵を目にしても、決して彼 (敵) を妬むことはなかった。自身の主人から受ける愛情によって形作られた清き心を持つ [臣下集団] は、敵であっても決してけなすことはなかった。

[RA 説明] (13) 'sṛhayan tyāgaguṇāya' (「喜捨という [王の] 徳を求めて」) において、「喜捨という徳」(tyāgaguṇa) は人々に望まれる対象 (īpsita) であるから A 1.4.36 により〈受手〉と呼ばれる。(14a) 'cukrodha dantī pratidantine' (「[或る] 象は相手象に腹を立てた」) において、「相手象」(pratidantī) は或る象の怒りが向けられる対象 (yaṃ prati kopah) であるから A 1.4.37 により〈受手〉と呼ばれる (動詞語根 krodh の意味を持つ動詞語根の例)。(14b) 'adruhyatā bhūpataye' (「王に敵意を抱かない [象乗り] によって」) において、「王」(bhūpati) は象乗りの怒りが向けられる対象であるから A 1.4.37 により〈受手〉と呼ばれる (動詞語根 druh の意味を持つ動詞語根の例)。(14c) 'na eva airṣyat asmai' (「[臣下集団は] 決して彼 (敵) を妬むことはなかった」) において、「彼 (敵)」(idam) は臣下集団の怒りが向けられる対象であるから A 1.4.37 により〈受手〉と呼ばれる (動詞語根 ṛṣy の意味を持つ動詞語根の例)。(14d) 'na eva abhyasūyām akṛta dviṣe api' (「[臣下集団は] 敵であっても決してけなすことはなかった」) において、「敵」(dviṣ) は臣下集団の怒りが向けられる対象であるから A 1.4.37 により〈受手〉と呼ばれる (動詞語根 asūya の意味を持つ動詞語根の例)⁶⁹。

[ノート] A 1.4.37 が例証される BhK 8.75 では動詞語根 druh の意味を持つ動詞語根と ṛṣy の意味を持つ動詞語根の例は示されていない。それに対し、RA 3.17–18 では A 1.4.37 が規定する全パターンが例証されており、規則中の項目の提示順序と詩節の語順の一致も見て取れる。なお、RA 3.18 で使用される韻律は upajāti であるが、a 句 'ālokyā' の箇所語の途中で中間休止が来てしまっている。

3.4 BhK 8.76, RA 3.19–20 → A 1.4.38–39

BhK 8.76: (15a) saṃkrudhyasi mṛṣā kiṃ tvam didṛkṣuṃ māṃ mṛgekṣaṇe /

(16b) īkṣitavyaṃ parastrībhyah svadharmo rakṣasām ayam //

「鹿の如き眼の女よ、[吉凶を] 見極めようとする俺にどうしてお前は無意味に腹を立ててるのか。[俺は] 他人の妻達の吉凶を吟味せねばならぬ。これは悪魔の本務なのだ」

⁶⁸ 当該詩節の内容は次のように理解出来る。1. 視界を覆っていた砂埃が鎮まる → 2. 或る象が自分の側 (縄張り / 領域) に同じ軍隊の他の象がいることに気付く → 3. 腹を立て興奮して暴れる → 4. 象乗りが制御する。

⁶⁹ abhyasūyā という語は「長所に対しても短所を付託すること」(doṣārope guṇeṣv api) を意味し (AmK 1.7.24cd)、asūyā という語と同義である (Vyākhyānasudhā on AmK 1.7.24cd)。その派生は次の通りである。abhi + asū + yaK (A 3.1.27 kaṇḍvādibhyo yak) → abhi + asū + ya + a (A 3.3.102 a pratyayāt) → abhi + asū + ya + a + ṬāP (A 4.1.4 ajādyataḥ ṭāp) → abhi + asū + yā (A 6.1.101 akaḥ savaṇe dīrghah) → abhy + asū + yā (A 6.1.77 iko yaṇ aci) → abhyasūyā。

- (15) A 1.4.38 *krudhadruhor upasṛṣṭayoḥ karma* // 「*upasarga* と結びつく動詞語根 *krudh*（「立腹する」）と *druh*（「悪意を抱く」）が使用される時、怒りが向けられる対象である *kāraka* は〈目的〉と呼ばれる」⁷⁰

[BhK 説明] (15) ‘*saṃkrudhyasi...kim tvam...mām*’（「どうしてお前は俺に腹を立てるのか」）において、「俺（ラーヴァナ）」（*asmad*）はシーターの怒りが向けられる対象であるから A 1.4.38 により〈目的〉と呼ばれる（動詞語根 *krudh* が *upasarga* である *saṃ* に先行される例）⁷¹。

- (16) A 1.4.39 *rādhīkṣyor yasya vipraśnaḥ* // 「動詞語根 *rādh*（「吉凶を吟味する」）と *īkṣ*（「吉凶を吟味する」）が表示する行為の *kāraka* は、それに対して様々な質問がなされる場合に〈受手〉と呼ばれる」⁷²

[BhK 説明] (16) ‘*īkṣitavyam parastrībhyaḥ*’（「他人の妻達を吟味せねばならぬ」）において、「妻」（*parastrī*）は A 1.4.39 により〈受手〉と呼ばれる（動詞語根 *īkṣ* の例）⁷³。ラーヴァナは他人の妻達の見定めのために彼女らに様々な質問（*vipraśna*）を投げ掛けるからである。

RA 3.19: *bhūktvā sthitam varma gajaṃ vilokya*

*tatr*_(15a) *ābhicukrodha naras tadibhyam* /

dhik tvām _(15b) *abhidruhyasi pāpa yas tvam*

ātmānam ittham nijagāda cainam //

象が皮を食べ続けるのを目にして、そ（臣下集団）の中の〔或る〕人はそ（象）の乗り手に腹を立てた。そして「ああ罪深き者よ、自分に悪意を抱く貴様の何と愚かな事よ」とこのように彼に語った。

RA 3.20: _(16a) *suhṛde samupāgatāya mārge*

kuśalam rādhayate sma saṃbhrameṇa /

_(16b) *aiḥkṣiṣṭa tadiṣṭabāndhavebhyo*

hṛdayam bibhrad asustham ādracetāḥ //

潤いある（優しい）心の持ち主（王？）は⁷⁴、その心が動揺しつつも、路上にやって来た友の吉凶を正しく吟味し、彼（友）が望んだ親族達の吉凶も急いで吟味した⁷⁵。

⁷⁰ KV on A 1.4.38: *devadattam abhikrudhyati / devadattam abhidruhyati* /（「彼はデーヴァダッタに腹を立てる。彼はデーヴァダッタに悪意を抱く」）

⁷¹ *Gaṇapāṭha* 中の *pra* 群の項目は A 1.4.59 により *upasarga* と呼ばれる。A 1.4.59 *upasargāḥ kriyāyoge* //（「行為と結びつく時、*pra* 群の項目は *upasarga* と呼ばれる」）なお、*upasarga* の機能それ自体については小川 [1996] に詳しい。

⁷² KV on A 1.4.39: *vividhaḥ praśnaḥ vipraśnaḥ / sa kasya bhavati / yasya śubhāśubhaṃ pṛcchate / devadattāya rādhayati / devadattāya īkṣate / naimittikaḥ pṛṣṭaḥ san devadattasya daivam paryālocayati ity arthaḥ* /（「*vipraśna* とは様々な質問という意味である。【問】それ（様々な質問）は誰に対してなされるのか。【答】吉凶を問われる人に対して〔それはなされる〕。【例】彼はデーヴァダッタの吉凶を吟味する（*rādhayati=īkṣate*）。占星術師は尋ねられたので、デーヴァダッタの運命を吟味する、という意味である」）

⁷³ *īkṣitavya* は、動詞語根 *īkṣ* に *krtya* 接辞 *tavyaT* あるいは *tavya* が後続する語形である（A 3.1.96 *tavyattavyāniyarah*）。

⁷⁴ *ādracetāḥ*（「潤いある心の持ち主」）と同趣向の表現は MD 91 にも見られる（川村 [2011a: 158] を見よ）。

⁷⁵ ‘*saṃbhrameṇa*’（「興奮して、急いで、慌ただしく」）という副詞が何を修飾するかについては様々な解釈が可能であるが、「友」は単数形の語（*suhṛde*）、「親族」は複数形の語（*bāndhavebhyaḥ*）で表されていることに着目し、複数いる親族達の吉凶を吟味するには時間が掛かるので急いでいると解釈して、「*aiḥkṣiṣṭa*」が表示する行為を修飾するものとして理解した。

[RA 説明] (15a) ‘abhicukrodha naraḥ tadibhyam’ (「[或る] 人はそ (象) の乗り手に腹を立てた」) において、「そ (象) の乗り手」(tadibhya) は或る人の怒りが向けられる対象であるから A 1.4.38 により〈目的〉と呼ばれる (動詞語根 *kru*dh が *abhi* に先行される例)。 (15b) ‘abhidruhyasi...yaḥ tvam ātmānam’ (「自分に悪意を抱く貴様」) において、「自分」(ātman) は象乗りが怒りを向ける対象であるから A 1.4.38 により〈目的〉と呼ばれる (動詞語根 *dru*h が *abhi* に先行される例)。 (16a) ‘suhṛde...rādhayate sma’ (「友の吉凶を吟味した」) において、「友」(suhṛd) はその吉凶を吟味するために様々な質問 (vipraśna) がなされる対象であるから A 1.4.39 により〈受手〉と呼ばれる (動詞語根 *rādh* の例)。 (16b) ‘aikṣiṣṭa tadiṣṭabāndhavebhyah’ (「彼 (友) が望んだ親族達の吉凶を吟味した」) において、「彼 (友) が望んだ親族達」(tadiṣṭabāndhava) はその吉凶を吟味するために様々な質問がなされる対象であるから、同じく A 1.4.39 により〈受手〉と呼ばれる (動詞語根 *ikṣ* の例)。

[ノート] BhK 8.76 では A 1.4.38 と A 1.4.39 が提示する項目のうち、それぞれ動詞語根 *dru*h と *rādh* の例は示されない。それに対して、RA 3.19–20 では両規則が規定する全パターンが例証されており、規則中の項目の提示順と詩節の語順も一致している。しかし、RA 3.12 と同様、そこでは何の脈絡もない内容が描かれており、まさに文法規則を例証するためだけに用意された詩節であるかの如き印象を読者に与える。また、各行為の主体が具体的に誰なのかも明示されないため内容が非常に捉えづらい。このことは指示対象がはっきりしない代名詞類が多用される RA 3.11–35 全体に当てはまる。なお、RA 3.19 で使用される韻律は *indravajrā* であるが、a 句 ‘varma’、b 句 ‘tatrābhicukrodha’、c 句 ‘abhidruhyasi’ の箇所ですの途中で中間休止が来てしまっている。

3.5 BhK 8.77, RA 3.21–22 → A 1.4.40–41

BhK 8.77: (17a) śṛṇvadbhyaḥ pratiśṛṇvanti madhyamā bhīru nottamāḥ /

(18a) grṇadbhyo ’nugrṇanty anye kṛtārthā naiva madvidhāḥ //

「怯える女よ、中位の者達は従順な部下達に [振る舞いを] 約束するが、俺のような上位の者達はそうではない。他方の者達は賞賛者達を煽動するが、利益を獲得している俺のような者達は決してそうではない」

- (17) A 1.4.40 *pratyānbhyām śruvaḥ pūrvasya kartā //* 「prati と aN に先行される動詞語根 *śru* (「約束する」) の表示する行為の *kāraka* は、先行行為の〈行為主体〉である場合に〈受手〉と呼ばれる」

[BhK 説明] (17a) ‘śṛṇvadbhyaḥ pratiśṛṇvanti’ (「従順な部下達に [振る舞いを] 約束する」) において、「従順な部下 (あるいは聖典を聞く者)」(śṛṇvat) は或る先行行為の〈行為主体〉であるから A 1.4.40 により〈受手〉と呼ばれる (動詞語根 *śru* が *prati* に先行される例)。当該規則は、*prati* か aN に先行される動詞語根 *śru* (「約束する」) が使用される時、或る先行行為の〈行為主体〉が動詞語根 *śru* が表示する約束行為に相関して〈受手〉と呼ばれることを規定しているが⁷⁶、当該詩節で先行行為の〈行為主体〉を表示する *śṛṇvat* という語及び明示されていない先行行為をどう解釈するかが問題となる。ジャヤマンガラは *śṛṇvat* という語を「王の命令に従順な部下」というような意味で理解していると考えられ、彼は「部

⁷⁶ この構造については次の *Siddhāntakaumudī* が挙げる例と説明を見よ。SK 578: *viprāya gām pratiśṛṇoti āśṛṇoti vā / vipreṇa mahyaṃ dehīti pravartitaḥ pratijānīta ity arthaḥ //* (「彼は婆羅門に牛を約束する (pratiśṛṇoti=āśṛṇoti)。婆羅門に『私に [牛を] 与えよ』と促されて、彼は [牛の贈与を婆羅門に] 約束するという意味である」)

Kāśīkāvṛtti は次のように説明する。KV on A 1.4.40: *prati pūrva ānpūrvaś ca śṛṇotir abhyupagame pratijñāne vartate / sa cābhyupagamaḥ pareṇa prayuktasya sato bhavati / tatra prayoktā pūrvasyāḥ kriyāyā kartā sampradānasañjño bhavati / devadattāya gām pratiśṛṇoti / devadattāya gām āśṛṇoti / pratijñānīte ity arthaḥ //* (「prati と aN に先行される動詞語根 *śru* は約束行為 (abhyupagama=pratiñāna) を意味する。そしてその約束行為は、或る者 x が他者 y に促される時、その者 x がなす行為である。その時、先行行為の〈行為主体〉である促す者 y は〈受手〉と呼ばれる。【例】彼はデーヴァダッタに牛を約束する (pratiśṛṇoti=āśṛṇoti)。約束する (pratiñānīte) という意味である」)

下達から王への懇願行為」が A 1.4.40 が規定する先行行為に当たると説明する⁷⁷。その場合、「中位の王は部下達に頼まれて行動を起こすが、上位の王は懇願などされずとも自ら行動して利益を獲得する」というのが詩節 ab 句の趣旨となる⁷⁸。一方マツリナータはそれを「聖典を聞く者」、即ち「有益さと無益さを教示する者」と解釈し、彼らの「教示行為」を A 1.4.40 が規定する先行行為と説明する⁷⁹。その場合、「中位の王は教示者達の教えに従ってその通りの行動を彼らに約束するが、上位の王は教示などされずとも何をなすべきかを知っている」というのが詩節 ab 句の趣旨となる⁸⁰。

- (18) A 1.4.41 anupratigr̥ṇāś ca // 「anu と prati に先行される動詞語根 gr̥ (「励ます」) が表示する行為の kāraka は、先行行為の〈行為主体〉である場合に〈受手〉と呼ばれる」⁸¹

[BhK 説明] (18a) 'gr̥ṇadbhyaḥ anugr̥ṇanti' (「他方の者達は」賞賛者達を煽動する)において、「賞賛者」(gr̥ṇat) は賞賛という先行行為の〈行為主体〉であるから A 1.4.41 により〈受手〉と呼ばれる(動詞語根 gr̥ が anu に先行される例)⁸²。中位の王は、褒美をちらつかせることで、自分を賞賛する者達をおだててさらに自分を褒め讃えるよう仕向るが、利益を獲得している上位の王は決してそのようなことはせず、賞賛などされずとも自ら物乞い達に富を分け与えるのである⁸³。

RA 3.21: suhr̥dā pathi kaścīd arthito 'nyah

(17a) pratiśuśrāva tad āśu sarvam asmai /

bhartāram ayācatāparo 'śvam

(17b) tasmai sādaram āśr̥ṇot taduktam //

他の或る者は、路上で友に請われたので、その時、彼(友)に全て[を与える事]を即座に約束した。他の人は兄弟に馬を請い、[請われた]人は彼が要求した[馬を渡す事を]を敬意を持って彼に約束した。

RA 3.22: dhvanitam paṭahena yan nr̥pasya

pratiśabdena tad āśu kuñjabhājā /

(18b) paṭahāya giriḥ samīpavartī

sapadi pratyagr̥ṇād ivābdhidhīram //

王の陣太鼓が大海[の轟]のように重厚な音を即座に立てた時、隣接する山は、洞窟に鳴り響くこだまによってすぐさま陣太鼓を鼓舞したかのようにだった⁸⁴。

⁷⁷ 「従順な部下達が中位の王に懇願する」(先行行為) → 「懇願する部下達に王が約束する」

⁷⁸ ジャヤマンガラの説明については川村 [2012a: 103, fn. 81] を見よ。

⁷⁹ 「聖典を聞く教示者達が中位の王に教示を与える」(先行行為) → 「教示者を与える者達に王が約束する」

⁸⁰ マツリナータの説明については川村 [2012a: 103, fn. 82] を見よ。

⁸¹ KV on A 1.4.41: hotre 'nugr̥ṇāti / hotā prathamam śamsati tam anyah protsāhayati / anugarah pratigarah iti hi śamsituh protsāhane vartate / hotre 'nugr̥ṇāti / hotāram śamsantam protsāhayati ity arthaḥ / (「【例】彼はホートリ祭官を鼓舞する。まず始めにホートリ祭官が朗唱し、他の者が彼を鼓舞する。実に、anugara と pratigara という語は朗唱者を鼓舞することを意味する。【例】彼はホートリ祭官を鼓舞する。朗唱しているホートリ祭官を鼓舞する (protsāhayati) という意味である」)

⁸² 「賞賛者達が中位の王を賞賛する」(先行行為) → 「賞賛する者達を王は煽動する」

⁸³ Sarvapathinā on BhK 8.77: kiṃca pūrvoktā madhyamāḥ gr̥ṇadbhyaḥ śamsadbhyaḥ stāvakebhyaḥ anugr̥ṇanti ditsāsūcakālāpaiḥ protsāhayanti / madvidhās tūttamāḥ stutiṃ vinaivārthibhyaḥ prayacchantīty arthaḥ / (「さらに、先に述べた中位の者達は賞賛者達を (gr̥ṇadbhyaḥ=śamsadbhyaḥ=stāvakebhyaḥ) 励ます、即ち贈与欲求を示唆する言葉によって煽動する。一方、俺のような上位の者達はまさに賞賛されずとも物乞い達に贈与する、という意味である」)

⁸⁴ Meghadūta では、雲が立てる雷鳴が太鼓の音に見立てられ、その音が山の洞窟にこだまする情景がしばしば描かれる(川村 [2011a: 153–155] を見よ)。大海の轟もまた、しばしば太鼓が立てる音に見立てられる。Raghuvamśa 9.11: avanim ekarathena varūthinā jīvatataḥ kila tasya dhanurbhṛtaḥ / vijayadundubhitam yayur arṇavā ghanaravā naravāhanasampadaḥ //

[RA 説明] (17a) ‘pratiśuśrāva...asmai’ (「彼(友)に[全てを与える事を]約束した」)において、「彼(友)」(idam)は先行する懇願行為の〈行為主体〉であるから A 1.4.40 により〈受手〉と呼ばれる(動詞語根śru が prati に先行される例)。(17b) ‘tasmai...āśrṇot’ (「[馬を渡す事を]彼に約束した」)において、「彼」(tad)は先行する懇願行為の〈行為主体〉であるから、同じく A 1.4.40 により〈受手〉と呼ばれる(動詞語根śru が aN に先行される例)。(18b) ‘paṭahāya giriḥ...pratyagrṇāt iva’ (「[山は]陣太鼓を鼓舞したかのようにだった」)において、「陣太鼓」(paṭaha)は先行する音立て行為の〈行為主体〉であるから A 1.4.41 により〈受手〉と呼ばれる(動詞語根 gr̥ が prati に先行される例)。

[ノート] BhK 8.77 では、A 1.4.40 と A 1.4.41 が提示する項目のうち、それぞれ動詞語根śru が aN に先行される場合と動詞語根 gr̥ が prati に先行される場合の例は示されていない。一方 RA 3.21–22 でも、A 1.4.40 が規定する二パターンはその項目の提示順通りに例証されるが、A 1.4.41 の例としては動詞語根 gr̥ が prati に先行される例だけが示され、anu に先行される例は示されない。また、RA 3.21 にはその指示対象がはっきりしない代名詞類が多用され、その内容も前後の詩節と何の繋がりもないため、これまで見て来た詩節と同様不自然さを覚えずにはいられない。

3.6 BhK 8.78, RA 3.23–24 → A 1.4.42–44

BhK 8.78: (19) iccha snehena (20) dīvyantī viṣayān bhuvaneśvaram /

(21) sambhogāya parikrītaḥ kartāsmi tava nāpriyam //

「感官対象で遊んでいるお前は、世界の支配者(俺)を愛によって受け入れよ。享楽の奴隷となった俺は、お前の気に入らないことをするつもりはない」

(19) A 1.4.42 sādhatatamaṃ karaṇam // 「行為の実現に対して卓越した扶助者として意図される最有効因である kāraka は、〈手段〉と呼ばれる」⁸⁵

[BhK 説明] (19) ‘iccha snehena’ (「お前は 愛によって受け入れよ」)において、「愛」(sneha)はシーターがなすラーヴァナの受け入れ行為の最有効因(sādhatatama)であるから A 1.4.42 により〈手段〉と呼ばれる。そして、〈手段〉を表示する項目の後には A 2.3.18 kartṛkaraṇayos tṛtīyā (「他の項目によって表示されていない〈行為主体〉と〈手段〉が表示されるべき時、第三格名詞接辞が起こる」)により第三格名詞接辞が起こる。以下も同様である。

(20) A 1.4.43 divaḥ karma ca // 「動詞語根 div (「遊ぶ、賭事をする」)が表示する行為の最有効因である kāraka は〈目的〉と呼ばれる。そして〈手段〉とも呼ばれる」⁸⁶

[BhK 説明] (20) ‘dīvyantī viṣayān’ (「感官対象で遊んでいる [お前]」)において、「感官対象」(viṣaya)は動詞語根 div が表示する遊ぶ行為の最有効因であるから A 1.4.43 により〈目的〉と呼ばれる。そして、〈目的〉を表示する項目の後には A 2.3.2 karmaṇi dvitīyā (「他の項目によって表示されていない〈目的〉が表示されるべき時、第二格名詞接辞が起こる」)により第二格名詞接辞が起こる。以下も同様である。

(「防備した一台の戦車で大地を支配した射手であり、クベーラの如き富を持つ彼(ダシャラタ)に対して、実に、大海は雲の如き音を立てて勝利の太鼓を鳴らした」)

当該詩節の内容もこれらと同趣向のものであると考えられる。山は、大海の轟のように重厚な陣太鼓の音を洞窟にこだまさせて、その音がより響き渡るよう手助けをしたのである。

⁸⁵ KV on A 1.4.42: dātreṇa lunāti / paraśunā chinatti / (「彼はナイフで切る。彼は斧で切る」)

⁸⁶ KV on A 1.4.43: akṣān dīvyati / akṣair dīvyati / (「彼はサイコロを使って (akṣān=akṣaiḥ) 遊ぶ/賭事をする」)

- (21) A 1.4.44 parikrayaṇe sampradānam anyatarasyām // 「賃雇いに対する最有効因である kāraka は、〈手段〉に加えて任意に〈受手〉と呼ばれる」⁸⁷

[BhK 説明] (21) ‘sambhogāya parikrītaḥ’ (「享樂の奴隸となった [俺]」) において⁸⁸、「享樂」(sambhoga) は A 1.4.44 により〈受手〉と呼ばれる。ラーヴァナは「享樂」という賃金でシーターに雇われている、即ち享樂の虜になっているから、ここで「享樂」はラーヴァナを賃雇い (parikrayaṇa) するための最有効因である。

RA 3.23: nirjagāma (19) turageṇa sainyataḥ

svalpasainikaparicchado nṛpaḥ /

devitum mṛgakule (20a) śaraiḥ⁸⁹ (20b) śarān

dīvyataś ca nṛpatīn nirīkṣitum //

動物達の群れの中で矢を使って遊び興じるため⁹⁰、また矢を使って遊んでいる戦士達に眼を光らすため⁹¹、極僅かな兵士に囲まれた王が馬に乗って軍隊から現れ出た。

RA 3.24: ekena (21a) pādānkaśatena kaścid

aśvaṃ parikrītam upāruoha /

aśvo 'pi (21b) pādānkaśatāya tasmād

varam parikrītam avāpa vāham //

或る人は、たった 900 パーダの金貨で雇われた馬に乗った⁹²。[その後] 馬も、900 パーダの金貨で雇われた、彼 (最初に馬に乗った人) よりも優れた運搬人を得た。

[RA 説明] (19) ‘nirjagāma turageṇa’ (「[王が] 馬に乗って現れ出た」) において、「馬」(turaga) は王が現れ出る行為の最有効因 (sādhakatama) であるから A 1.4.42 により〈手段〉と呼ばれる。(20a) ‘devitum...śaraiḥ’ (「矢を使って遊び興じるため」) において、「矢」(śara) は動詞語根 div が表示する遊ぶ行為の最有効因であるから A 1.4.43 により〈手段〉と呼ばれる⁹³。(20b) ‘śarān dīvyataḥ’ (「矢を使って遊んでいる [戦士達]」) において、「矢」(śara) は動詞語根 div が表示する遊ぶ行為の最有効因であるから同じく A 1.4.43 により〈目的〉と呼ばれる。(21a) ‘pādānkaśatena...aśvaṃ parikrītam’ (「900 パーダの金貨で雇われた馬に」) において、「900 パーダの金貨」(pādānkaśata) は馬を賃雇いするための最有効因であるから A 1.4.44 により〈受手〉と呼ば

⁸⁷ KV on A 1.4.44: parikrayaṇaṃ niyatakalāṃ vetanādīnā svikaraṇam / nātyantikaḥ kraya eva / śatena parikrīto 'nubrūhi / śatāya parikrīto 'nubrūhi / sahasreṇa parikrīto 'nubrūhi / sahasrāya parikrīto 'nubrūhi / (「賃雇い (parikrayaṇa) とは、決められた時間の間、賃金等を払って雇うことである。まさに完全に買い取るのではない。【例】百で (śatena=śatāya) 雇われたお前は朗唱せよ。千で (sahasreṇa=sahasrāya) 雇われたお前は朗唱せよ」)

⁸⁸ 直訳は「享樂を通じて雇われた [俺]」である。

⁸⁹ テキストは ‘śanaiḥ’ となっているが、校訂者の修提案に従う。当該箇所は A 1.4.43 が例証される箇所であり、‘śaraiḥ’ と ‘śarān’ という二つの表現によって、動詞語根 div が表示する行為の最有効因である「矢」が〈目的〉と呼ばれる場合と〈手段〉と呼ばれる場合の両パターンが例証されていると考えられる。詩節 cd 句に動詞語根 div が二回使用されていることもそのことを支持する。‘śanaiḥ’ という読みでは二つある動詞語根 div の片方が浮いてしまう。

⁹⁰ 狩りをするという意味であろう。

⁹¹ 「武器である矢を使ってふざけて遊んでいる戦士達に注意をするために王が姿を現した」という意味で解釈した。

⁹² A 1.4.44 が例証される当該の文脈上、pādānka という語は何らかの通貨単位を意味するはずであるが、筆者が調べた限り、硬貨の種類あるいは単位として pādānka という語が使用されている例はない。ここでは anka という語を「9」という意味で理解し、‘pādānkaśata’ を「900 パーダの金貨」と解釈した。または anka という語を「装飾品」(bhūṣaṇa) という意味で理解すれば、当該の複合語を「百パーダの金貨と百の装飾品」と解釈することも一応可能である (Viśvaprakāśa, kadvika 38: ankaḥ sthāne 'ntike mantau rūpakotsaṅgalakṣmasu / nātikādīparicchede citrayuddhe ca bhūṣaṇe)。

⁹³ ca という語により A 1.4.42 から karaṇa という語が A 1.4.43 に継起 (anuvṛtti) するから、A 1.4.43 が規定する条件下で kāraka は〈目的〉に加えて〈手段〉とも呼ばれる (KV on A 1.4.43: cakārāt karaṇasafijñam ca)。

れ得るが、その術語適用は任意であり、ここでは〈受手〉と呼ばれないパターンが例証されている⁹⁴。(21b) ‘pādānkaśatāya...parikṛitam...vāham’ (「900 パーダの金貨で雇われた運搬人を」)において、「900 パーダの金貨」(pādānkaśata) は運搬人を賃雇いするための最有効因であるから、同じく A 1.4.44 により〈受手〉と呼ばれる。

[ノート] BhK 8.78 では A 1.4.43–44 の規定のうち、ともに kāraka が〈手段〉と呼ばれる場合の例は示されないが⁹⁵、RA 3.23–24 では A 1.4.43–44 それぞれが規定する二パターンが全て例証される。しかし、RA 3.24 の内容は明らかに陳腐で脈絡もないため、A 1.4.44 を例証するためだけに作られた詩節である感は否めない。A 1.4.44 の例証のために「900 パーダの金貨で雇われた」(pādānkaśatena [pādānkaśatāya]...parikṛitam) という全く同じ表現が二度使用されることがその陳腐さを助長している。なお RA 3.23 と RA 3.24 で使用される韻律はそれぞれ rathoddhata と upajāti であるが、RA 3.23b 句 ‘svalpaśainīkaparicchadhī’⁹⁶ と RA 3.24bd 句 ‘parikṛitam’ の箇所ですの途中に中間休止が来てしまっている。

3.7 BhK 8.79–80, RA 3.25–28 → A 1.4.45–48

BhK 8.79: (22) āssva sākaṃ mayā saudhe (23b) mādhīṣṭhā nirjanam vanam /
(25c) mādhivātsīr bhuvam (23a) śayyām adhiśeṣva smarotsukā //

「お前は俺と一緒に宮殿にいなさい。人のいない森にいてはならぬ。大地で暮らしてはならぬ。愛を熱望して寝床に横たわるのだ」

- (22) A 1.4.45 ādhāro ’dhikaraṇam // 「行為の拠り所である〈行為主体〉と〈目的〉の保持行為に対する基体である kāraka は、〈基体〉と呼ばれる」⁹⁷

[BhK 説明] (22) ‘āssva sākaṃ mayā saudhe’ (「お前は俺と一緒に宮殿にいなさい」)において、「宮殿」(saudha) は、居住行為の〈行為主体〉であるシーターを保持する為の基体 (ādhāra) であるから、A 1.4.45 により〈基体〉と呼ばれる。〈基体〉を表示する項目の後には A 2.3.36 saptamy adhiḥkāraṇe ca (「他の項目によって表示されていない〈基体〉が表示されるべき時に第七格名詞接辞が起こる。また、実体を表示するものではなく遠近を意味する語の後にも第七格名詞接辞が起こる」) により第七格名詞接辞が起こる。以下も同様である。

- (23) A 1.4.46 adhiśīnsthāsām karma // 「adhi に先行される動詞語根 śīN (「眠る」)、sthā (「留まる」)、ās (「座る」) が表示する行為の基体である kāraka は、〈目的〉と呼ばれる」⁹⁸

[BhK 説明] (23b) ‘mā adhiśṭhā nirjanam vanam’ (「人のいない森にいてはならぬ」)において、「森」(vana) はシーターがなす滞在行為の基体であるから A 1.4.46 により〈目的〉と呼ばれる (動詞語根 sthā の例)。(23a) ‘śayyām adhiśeṣva’ (「寝床に横たわるのだ」)において、「寝床」(śayyā) はシーターがなす横たわる行為の基体であるから、同じく A 1.4.46 により〈目的〉と呼ばれる (動詞語根 śīN の例)。

⁹⁴ A 1.4.44 が規定する〈受手〉という術語の適用は任意 (anyatarasyām) であるから、kāraka が〈受手〉と呼ばれない場合には A 1.4.42 により〈手段〉と呼ばれる。

⁹⁵ この箇所に関する限り、パッティは前の規則から継起する項目ではなく新規情報として規則に提示された項目を考慮して規則を例証していると言える。

⁹⁶ rathoddhata では 3 音節目あるいは 4 音節目に中間休止が置かれる。

⁹⁷ KV on A 1.4.45: kaṭe āste / kaṭe śete / sthālyām pacati / (「彼はマットに座る。彼はマットに横になる。彼は鍋の中で料理する」)

⁹⁸ KV on A 1.4.46: grāmam adhiśete / grāmam adhiśṭhāti / parvatam adhyāste / (「彼は村で休憩する。彼は村に留まる。彼は山に住み着く」)

- (25) A 1.4.48 upānvadhyānvasaḥ // 「upa, anu, adhi, aÑ に先行される動詞語根 vas（「住む」）が表示する行為の基体である kāraka は〈目的〉と呼ばれる」⁹⁹

[BhK 説明] (25) 'mā adhvātsīḥ bhuvam'（「大地で暮らしてはならぬ」）において、「大地」（bhū）はシーターがなす居住行為の基体であるから A 1.4.48 により〈目的〉と呼ばれる（動詞語根 vas が adhi に先行される例）。

BhK 8.80: (24a) abhinyavikṣathās tvam me yathaivāvyāhatā manah /

tavāpy (25cd) adhyāvasantam mām mā rautsīr hṛdayam tathā //

「まさにお前が遮られることなく我が心に入ったように、お前もお前の心に住もうとする俺を遮るな」

- (24) 1.4.47 abhiniviśaś ca // 「abhini に先行される動詞語根 viś（「入る」）が表示する行為の基体である kāraka は、任意に〈目的〉と呼ばれる」¹⁰⁰

[BhK 説明] (24) 'abhinyavikṣathāḥ tvam me...manah'（「お前が我が心に入った [ように]」）において、「心」（manas）は abhini に先行される動詞語根 viś が表示する侵入行為の基体であるから A 1.4.47 により〈目的〉と呼ばれる。(25cd) 'adhyāvasantam mām...hṛdayam'（「心に住もうとする俺を」）において、「心」（hṛdaya）は居住行為の基体であるから、先の A 1.4.48 により〈目的〉と呼ばれる（動詞語根 vas が adhi と ā に先行される例）。

RA 3.25: āsthitasya (22) turage mahīpater

ūrdhvaṇṇam abhipūritau śaraiḥ /

āhitāv ubhayatas turaṅgamam

bhānavīm rucim avāpatuḥ parām //

馬上にいる王の [家来であり]、溢れんばかりの矢を装備して馬の両側に配置された二人 [の護衛兵] は、太陽に固有の最高の光輝を得た¹⁰¹。

RA 3.26: (23a) yam adhiśīṣye mṛgakulam

vibhayam (23c) adhyāsta yam bhūpatiḥ svayam /

(23b) nādhyatiṣṭhat tam vano-

ddeśam anyo nṛpapatīkṣayā¹⁰² //

他の者は王への配慮ゆえ、王が自ら身を寄せて休息していた、動物達の住処である恐怖無き森の一角に留まることは無かった。

RA 3.27: dhṛtasaśaraśarāsane 'pi loke

mṛgavadhakautukakautukānurāge /

⁹⁹ KV on A 1.4.48: grāmam upavasati senā / parvatam upavasati / grāmam anuvasati / grāmam adhivasati / grāmam āvasati /（「軍隊が村に駐屯する (upavasati)。彼は山に住み着く (upavasati)。彼は村に住む (anuvasati)。彼は村に住む (adhivasati)。彼は村に住む (āvasati)」）

¹⁰⁰ KV on A 1.4.47: grāmam abhinivisate /（「彼は村に入る」）

¹⁰¹ 多くの矢を装備していること及び偉大なる王の側にいることを、護衛達が光輝を獲得した理由として理解した。

¹⁰² テキストは 'nṛpapatīkṣayā' となっているが、詩節の内容を考慮して校訂者の修正案に従う。

kim^(24a) abhiniviśate purā na hiṃsām
prabhur avaśe mahatām kuto 'tha vāsthā //

この世界で、矢をつがえた弓が準備され、動物狩りという娯楽に対する好奇と愛着があるにもかかわらず¹⁰³、聖者達の主 (王) が殺生に身を捧げないことがあろうか¹⁰⁴。あるいは、どうして自由に過ごす者 (動物達) に配慮することがあろうか¹⁰⁵。

RA 3.28: (25a) upavasati sadā yaṃ siṃhasaṃgho vanāntam
yam^(25c) adhivasati vīryam siṃhasaṃgham ca nityam //
(25b) anuvāsati purā tan nūnam īśasya kopas
tvaritagatir atas tām^(25d) āvasat gām sasainyaḥ //

[しかし、] 獅子の群れがいつも住み着く森の地と、勇武が常に存する獅子の群れには、必ずや主 (シヴァ) の怒りが降り掛かるであろう¹⁰⁶。これ故、彼 (王) は兵士と一緒に即座に移動してかの牛の下に身を寄せた¹⁰⁷。

[RA 説明] (22) 'āsthitasya turage mahīpateḥ' ('馬上にいる王の') において、「馬」(turaga) は滞り行為の〈行為主体〉である王を保持する基体 (ādhāra) であるから A 1.4.45 により〈基体〉と呼ばれる。(23a) 'yam adhiśiṣye' ('或る場所で [王が] 休息する')、(23c) 'adhyāsta yam' ('或る場所に [王が] 身を寄せる')、(23b) 'na adhyatiṣṭhat tam' ('[他の者は] そこに留まることはなかった') において、「或る場所 (森の一角)」(yad) と「そこ (森の一角)」(tad) は、それぞれの〈行為主体〉がなす休息行為 (動詞語根 stN の例)、座行為 (動詞語根 as の例)、滞り行為 (動詞語根 sthā の例) の基体であるから、A 1.4.46 により〈目的〉と呼ばれる。(24) 'kim abhiniviśate purā na hiṃsām' ('[聖者達の主が] 殺生に身を捧げないことがあろうか') において、「殺生」(hiṃsā) は abhini に先行される動詞語根 viś が表示する執着行為の基体であるから、A 1.4.47 により〈目的〉と呼ばれる。(25a) 'upavasati... yam siṃhasaṃghaḥ vanāntam' ('或る森の地に獅子の群れが住み着く')、(25c) 'yam adhivasati vīryam siṃhasaṃgham' ('或る獅子の群れには勇武が存する')、(25b) 'anuvāsati purā tam...īśasya kopas' ('そこ (森の地と獅子の群れ) にはシヴァの怒りが降り掛かるであろう')、(25d) 'āvasat gām' ('[王は] 牛の下に身を寄せた') において、「或る森の地」(yad-vanānta)、「或る獅子の群れ」(yad-siṃhasaṃgha)、「それ (森の地と獅子の群れ)」(tad)、「牛」(go) はそれぞれの〈行為主体〉がなす居住行為の基体であるから (それぞれ動詞語根 vas が upa, adhi, anu, aN に先行される例)、A 1.4.48 により〈目的〉と呼ばれる。

[ノート] これまでと同様 BhK 8.79–80 では規則が規定する全パターンは例証されず、概して一つか二つのパターンにより規則が例証されている。なお、BhK 8.79 では BhK 8.80 で A 1.4.47 が例

¹⁰³ '-kautukakautuka-' を付加性 (ādhikya) の意味での反復表現 (dvirvacana) と解釈すれば、b 句の複合語を「動物狩りに対する強い好奇と愛着があるにもかかわらず」と訳すことも可能であるが、付加性の意味で名詞の反復表現が使用される例を今の所筆者は発見できていない。なお、付加性の意味での反復表現及び反復表現の複合語形成の問題については川村 [2011b] を参照されたい。

¹⁰⁴ 当該の purā は確実性 (niścaya) を標示する既成形 (nipāta) として理解した。A 3.3.4 yāvatpurānipātayor laḥ // ('既成形である yāvat 及び purā が共起項目である場合、行為が未来時に属する時に動詞語根の後に 1AṬ が起こる') SK 2783: nipātāv etau niścayaṃ dyotayataḥ / ('既成形である両語 (yāvat と purā) は確実性を標示する')

¹⁰⁵ 当該詩節は、ab 句の複合語や 'loke' の意味等について様々な解釈が可能であり、検討を要する。暫定的に ab 句の複合語はいずれも tatpuruṣa として理解し、「矢をつがえた弓が準備され、気持ちも高ぶっているのに、どうして王が狩りに興じないことがあるだろうか」という意味で詩節を理解した。

¹⁰⁶ 「獣の主」(paśupati) がシヴァの異名の一つであることから (例えば川村 [2011a: 144–145] で挙げた MD 36 を見よ)、当該の「主」(īśa) をシヴァと理解した。また c 句の purā という語は先の詩節と同様、確実性を標示する既成形として解釈した。

¹⁰⁷ 勇武を誇示する獅子達と彼らが常に徘徊する森に対して、獣の主であるシヴァは怒りを露にする (調子に乗っている獅子達を戒める) → そのシヴァの怒りを避けるため、王は獅子達がいる森を離れて牛達が居る場所へ移動した。以上のように詩節を理解した。

証される前に A 1.4.48 が例証されており、筆者が知る限り、当該箇所は *Bhaṭṭikāvya* 中で規則の順序と詩節の順序が一致していない唯一の箇所である。それに対して RA 3.25–28 では、A 1.4.47 により *kāraka* が〈目的〉と呼ばれないパターンを除き¹⁰⁸、A 1.4.45–48 が規定する全パターンが例証されている。なお、RA 3.24 と同様 RA 3.28ab 句でも「獅子の群れ」(*siṃhasaṃgha*) という全く同じ表現が二度使用されており、a 句と b 句ではその語の文法上の役割は異なるとはいえ、それが同一表現の単純な反復使用であることに変わりはない。

3.8 BhK 8.81, RA 3.29–30 → A 1.4.49–50

BhK 8.81: (26) māvamaṃsthā namasyantam akāryajñe jagatpatim /
saṃdr̥ṣṭe mayi (27a) kākutstham adhanyam kāmayeta kā //

「愚かな女よ、世界の主（俺）が頭を下げているというのに見下すでない。俺を目にしたならば、一体どの女が不幸なラーマなどを愛せようか」

- (26) A 1.4.49 *kartur īpsitatamaṃ karma //* 「〈行為主体〉が行為を通じて最も得ようと望む *kāraka* は〈目的〉と呼ばれる」¹⁰⁹

[BhK 説明] (26) ‘mā avamaṃsthā...jagatpatim’ (「世界の主を見下すでない」) において、「世界の主（ラーヴァナ）」(*jagatpati*) はシーターが軽蔑行為を通じて最も得ようと望む対象 (*īpsitama*) であるから、A 1.4.49 により〈目的〉と呼ばれる。

- (27) A 1.4.50 *tathāyuktaṃ cānīpsitam //* 「〈行為主体〉が最も得ようと望む対象が行為と結びつくのと同様の仕方で行為と結びついている、〈行為主体〉が得ようと望まない *kāraka* 及び中立的な *kāraka* は〈目的〉と呼ばれる」¹¹⁰

[BhK 説明] A 1.4.50 中の *anīpsitam* という否定複合語によって、得ようと望まれる対象以外のもの、即ち嫌悪対象 (*dveṣya*) と無関心対象 (*upekṣya*, *udāsīna*) が指示され、A 1.4.50 はその両者も〈目的〉と呼ばれることを規定したものと伝統的に解釈される¹¹¹。(27a) ‘kākutstham adhanyam kāmayeta kā’ (「一

¹⁰⁸ A 1.4.47 には先の A 1.4.44 から ‘anyatarasyām’ (「任意に」) が継起すると見なされるから、〈目的〉という術語の適用は任意となる。この点も含め当該規則に関する議論について Kudō [1999: 78–81] に詳しい。*Kāśikāvṛtti* は次のように説明する。KV on A 1.4.47: *katham kalyāṇe ’bhiniveśaḥ pāpe ’bhiniveśaḥ yā yā sañjñā yasmin yasmin sañjñīny abhinivīśate iti / anyatarasyām iti vartate parikrayaṇe sampradānam anyatarasyām ity ataḥ / sā ca vyavasthitavibhāṣā vijñāyate /* (「【問】*kalyāṇe* ’bhiniveśaḥ (「幸福への執着」)、*pāpe* ’bhiniveśaḥ (「悪への執着」)、*yā yā sañjñā yasmin yasmin sañjñīny abhinivīśate* (「それぞれの名称語はそれぞれの名称対象と結びつく」) という表現はどのようにして成り立つのか。【答】*parikrayaṇe sampradānam anyatarasyām* (A 1.4.44) というここから ‘anyatarasyām’ (「任意に」) が [当該規則に] 継起する [からである]。そしてそれは [認められる領域が制限される] 限定的任意性として理解される」) A 1.4.47 により *kāraka* が〈目的〉と呼ばれない場合には A 1.4.45 により〈基体〉と呼ばれる。

¹⁰⁹ KV on A 1.4.49: *kaṭaṃ karoti / grāmaṃ gacchati* (「彼はマットを作る。彼は村へ行く」)

¹¹⁰ KV on A 1.4.50: *īpsitād anyat sarvaṃ anīpsitam dveṣyam itarac ca / viṣaṃ bhakṣayati / caurān paśyati / grāmaṃ gacchan vṛkṣamūlāny upasarpati /* (「*anīpsita* は望まれる対象以外のもの全て、即ち嫌悪対象とそれと異なるもの、(無関心対象) を意味する。[嫌悪対象の例] 彼は毒を食らう。彼は泥棒達を目にする。[無関心対象の例] 彼は村に行く際に樹の根に近付く」) *Tattvabodhinī* on SK 538: *īpsitād anyad anīpsitam iti paryudāso ’yam / tena yad upekṣyam yac ca dveṣyam tad dvayam apīha gr̥hyata ity āśayenādyam udāharati—grāmaṃ gacchams tṛṇaṃ spr̥śatī //* (「*anīpsita* とは望まれるもの以外のものという意味であるから、これは排除否定である。それ故、無関心対象と嫌悪対象の両者もここ (A 1.4.50) で理解される。このことを意図して、前者の例を『彼は村に行く際に草に触れる』と示す」)

¹¹¹ 即ち *anīpsitam* という否定複合語中の否定辞 *nañ* の機能は想定否定 (*prasajyapratīṣedha*) ではなく排除否定 (*paryudāsa*) である。A 1.4.50 中の ‘*anīpsita*’ の解釈については Ogawa [2005: 67] 及び小川 [2008: 25–26] を参照。パタンジャリは次のように述べている。MBh on A 1.4.50 (I.333.21–23): *anīpsitam iti nāyaṃ prasajyapratīṣedha īpsitam neti / kiṃ tarhi / paryudāso ’yam yad anyad īpsitād tad anīpsitam iti / anyac caitad īpsitād yan naivepsitam nāpy anīpsitam iti /* Joshi and Roodbergen [1975: 172–173]: ‘This (word) *anīpsita* is not (to be taken as) *prasajyapratīṣedha*: ‘denial (leading to the opposite

体どの女が不幸なラーマなどを愛せようか) において、「[不幸な] ラーマ」(kākutstha) は女達の嫌悪対象に当たるから¹¹²、A 1.4.50 により〈目的〉と呼ばれる¹¹³

RA 3.29: (26-1) rarakṣa sattvāni (27a-1) mamarda kaṅṭakāny
athaiva rājā nagare narapriyaḥ /
(27a-2) udvejayaṅ chātravalokam ojasā
vane 'pi tadvad vanajāyatekṣaṇaḥ //

まさにその後、臣民を愛する王は、活力で敵軍を怯えさせながら、都で厄介者達を退けて衆生を守護した。蓮のように切れ長な眼をした彼(王)は森でもそこ(都)と同様に[振る舞った]。

RA 3.30: nirjītāni yadi locanāni nas
tvadvadhūbhir avalokyaṭām itaḥ /
(26-2) utpapāta hariṅkadambakam
vaktum ittham iva bhūpatiḥ tataḥ //

この時、「我々の眼が貴方の女達に負けると言うなら、貴方の女達は[我らの眼を]見られよ」とこのように語る為には雌鹿の群れがそこ(森)から王の下へ跳んで行ったかのようにであった¹¹⁴。

[RA 説明] (26-1) 'rarakṣa sattvāni' ('[王は] 衆生を守護した') において、「衆生」(sattva) は王が守護行為を通じて最も得ようと望む対象 (īpsitatama) であるから A 1.4.49 により〈目的〉と呼ばれる。(27a-1) 'mamarda kaṅṭakāni' ('[王は] 厄介者達を退けた') において、「厄介者」(kaṅṭaka) は王の嫌悪対象であるから A 1.4.50 により〈目的〉と呼ばれる。(27a-2) 'udvejayan śātravalokam' ('[王は] 敵軍を怯えさせながら') において、「敵軍」(śātravaloka) は王の嫌悪対象 (dveṣya) であるから同じく A 1.4.50 により〈目的〉と呼ばれる。(26-2) 'utpapāta hariṅkadambakam...iva bhūpatiḥ' ('雌鹿の群れが王の下へ跳んで行ったかのようにだった') において、「王」(bhūpati) は雌鹿達が進行行為を通じて最も得ようと望む対象であるから A 1.4.49 により〈目的〉と呼ばれる。

[ノート] BhK 8.81 と RA 3.29–30 ではともに A 1.4.50 が規定する無関心対象の例は示されていないが、RA 3.29–30 では A 1.4.49 と A 1.4.50 が規定する一つのパターンが二回ずつ例証されている。なお RA 3.29 では vaṃśasthāvila と indravamśā という二つの韻律が使用されるが¹¹⁵、a 句 'sattvāni' と c 句 'chātravalokam' の箇所では語の途中で中間休止が来てしまっている。

meaning'), (in the form of) *īpsitam*. Na: 'It is desired. No (it is not)'. How then? It is (to be taken as) *pariyudāsa*: 'exclusion', (in the sense that) *anīpsita* means that which is other than *īpsita*. And that which is definitely *na īpsita*: 'hateful', as well as that which is *anīpsita*: 'indifferent', is precisely that which is other than *īpsita*.'

¹¹² *Sarvathānā* on BhK 8.81: tathāyuktaṃ cānīpsitam iti rāmaśyānīpsitakarmatvam / ('tathāyuktaṃ cānīpsitam (A 1.4.50) に基づいて、『ラーマ』は得ようと望まれない〈目的〉である。)

¹¹³ A 1.4.50 の伝統的な解釈に従えばバツティは無関心対象の例証を省略していることになるが、その点については川村 [2012a: 106] を見よ。

¹¹⁴ サンスクリット文学中で、美女の眼はしばしば鹿の眼に比喻される。当該詩節では、眼の美しさを競って雌鹿達が王に仕える美女達に勝負を仕掛ける様が描かれていると理解した。美女の眼が鹿のそれに比喻される一例として、ヤクシャ (yakṣa) の妻の美を描く *Meghadūta* 中の一詩節を挙げておく。MD 79: tanvī śyāmā śikharadaśanā pakvabimbādharauṣṭhī madhye kṣāmā cakitahariṅprekṣaṇī nimnanābhiḥ / śroṇībhārād alasagamanā stokanamrā stanābhyāṃ yā tatra syād yuvativiṣaye sṛṣṭir ādyeva dhātuḥ // ('身は細く、若々しく、歯は山の頂のよう [に鋭く]、下唇は熟したピンパの実のようで、腰は細く、目は怯える鹿のよう、臍は深く、臀部の重みのせいで歩みは遅く、[膨よかな] 両乳房のせいでやや前屈み、恰も、女というものの内の、創造主の第一級の創造物であるかのような彼女がそこ(館)にいるはずだ。)

¹¹⁵ abd 句の韻律は vaṃśasthāvila であるが、c 句だけ indravamśā になっている。

3.9 BhK 8.82–83, RA 3.31–34 → A 1.4.51–52

BhK 8.82: yaḥ payo (28) dogdhi pāṣāṇam sa rāmād bhūtim āpnuyāt /(29a) rāvaṇam gamaya prītim (29b) bodhayantaṃ hitāhitam //

「石から乳を搾る者でもいれば、ラーマから富を得られるだろう。有益さと無益さを教えるラーヴァナをお前は愛へと導け」¹¹⁶

BhK 8.83: prīto 'haṃ (29c) bhojayiṣyāmi bhavatīm bhuvanatrayam /kim (29d) vilāpayase 'tyarthaṃ pārsve (29e) śāyaya rāvaṇam /

「俺が満足した暁には貴方に三界を享受させてやろう。どうしてお前は酷いことを言うのか。お願いだから傍らにラーヴァナを寝かせておくれ」¹¹⁷

(28) A 1.4.51 akathitaṃ ca // 「他の kāraka 術語を与えられない kāraka は〈目的〉と呼ばれる」¹¹⁸

[BhK 説明] 当該規則は、特定の kāraka として意図されない対象あるいは特定の kāraka 術語を与えられない対象に〈目的〉という術語を与える規則である。(28) 'yaḥ payaḥ dogdhi pāṣāṇam' (「石から乳を搾る者でもいれば」)において、「石」(pāṣāṇa)はA 1.4.24 dhruvam apāye 'pādānamにより動詞語根 duhが表示する搾乳行為に相関して〈起点〉と呼ばれ得るが、「石」が〈起点〉として意図されない場合に、それはA 1.4.51により〈目的〉と呼ばれる¹¹⁹。

(29) A 1.4.52 gatibuddhipratyavasānārthaśabdakarmākarmakāṇām anikartā sa nau // 「NiCで終わらない、進行・知・飲食を意味する動詞語根、音声を〈目的〉とする行為を表示する動詞語根、そして〈目的〉を持たない行為を表示する動詞語根が表示する行為の〈行為主体〉は、それらの動詞語根がNiCで終わる場合、〈目的〉と呼ばれる」¹²⁰

[BhK 説明] (29a) 'rāvaṇam gamaya prītim' (「お前はラーヴァナを愛へと導け」)、(29b) 'bodhayantaṃ hitāhitam' (「[貴方に] 有益さと無益さを教える [ラーヴァナ]」)¹²¹、(29c) 'bhojayiṣyāmi bhavatīm bhuvanatrayam' (「貴方に三界を享受させてやろう」)、(29d) 'kim vilāpayase atyarthaṃ' (「どうしてお前は酷いことを言うのか」)¹²²、(29e) 'pārsve śāyaya rāvaṇam' (「お願いだから傍らにラーヴァナを寝かせておくれ」)という5つの表現により、当該規則で規定されるパターンが全て例証される。A 1.4.52は使役接辞NiCで終わらない或る特定の動詞語根が表示する行為の〈行為主体〉が、それらの動詞語根がNiC

¹¹⁶ 当該詩節 cd 句の解釈については川村 [2012a: 106–107, fn. 85] を見よ。

¹¹⁷ 'atyarthaṃ' は 'vilāpayase' が表示する行為を修飾する副詞としても解釈可能であるが、当該箇所が A 1.4.52 を例証する箇所であることを考慮すればその目的語と理解すべきである。

¹¹⁸ この規則の適用例については川村 [2012d] を見よ。

¹¹⁹ 一方、「乳」(payas) は先の A 1.4.49 kartur īpsitatamaṃ karma により〈目的〉と呼ばれる。なお、BhK 6.8–10 では「二つの〈目的〉を持つ行為を表示する動詞語根」(dvikarmakadhātu) の使用例が提示され、A 1.4.51 との関連のもと、Mahābhāṣya 中に挙げられる ślokaṅgīkṛta の規定が例証されるが、それについては川村 [2012d] を見よ。

¹²⁰ KV on A 1.4.52: gacchati māṇavako grāmam / gamayati māṇavakam grāmam /...budhyate māṇavako dharmam / bodhayati māṇavakam dharmam /...bhunkte māṇavaka odanam / bhojayati māṇavakam odanam /...adhīte māṇavako vedam / adhyāpayati māṇavakam vedam /...āste devadattaḥ / āsati devadattam / (「[進行を意味する動詞語根の例] 少年は村へ行く。彼は少年を村に行かせる。... [知を意味する動詞語根の例] 少年は法を理解する。彼は少年に法を理解させる。... [飲食を意味する動詞語根の例] 少年は粥を食べる。彼は少年に粥を食べさせる。... [音声を〈目的〉とする行為を表示する動詞語根の例] 少年はヴェーダを学ぶ。彼は少年にヴェーダを学ばせる。... [〈目的〉を持たない行為を表示する動詞語根の例] デーヴァダッタは座る。彼はデーヴァダッタを座らせる」)

¹²¹ 当該箇所は A 1.4.52 が規定する「知を意味する動詞語根」のパターンが例証される箇所であるから、マツリナータが述べるようにここに tvām という語を補うか (Sarvathā on BhK 8.82)、BhK 8.82–83 を一対の詩節と捉えて BhK 8.83b 句の bhavatīm という語を読み込んで解釈すべきであろう。ジャヤマンガラも当該箇所に bhavatīm という語を補っている (Jayamaṅgalā on BhK 8.82)。

¹²² 直訳は「どうしてお前は [自分をして] 酷いことを言わせるのか」である。

で終わる場合に〈目的〉と呼ばれることを規定したものである¹²³。(29a)は進行を意味する動詞語根の例 (gam)、(29b)は知を意味する動詞語根の例 (budh)、(29c)は飲食を意味する動詞語根の例 (bhuj)、(29d)は音声を〈目的〉とする行為を表示する動詞語根の例 (vi√lap)、(29e)は〈目的〉を持たない行為を表示する動詞語根の例 (si) である。(29a)(29e)の動詞語根 gam と si が NiC で終わらない場合の〈行為主体〉である「ラーヴァナ」¹²⁴、(29b)(29c)(29d)の動詞語根 budh と bhuj 及 vi√lap が NiC で終わらない場合の〈行為主体〉である「シーター」は¹²⁵、それらの動詞語根が NiC で終わる場合に A 1.4.52 により〈目的〉と呼ばれる。

RA 3.31: (28a) dudoha yām ātmasutaḥ payo mrgīm

(28b) ayācatānyo nṛpam āśu tadvayam /

(28c) rurodha tām tām bhuvam eva huṅkṛtaḥ

purahsaram mārgam (28d) apṛcchat ādṛtaḥ //

他の者は、自分の息子が乳を搾った雌鹿の二頭分を即座に王に請うた。尊敬される彼(王)は、泣き喚くあらゆるそれ(雌鹿達)を他ならぬ大地に閉じ込め(繋ぎ止め)、従者に「鹿を渡す」方法を尋ねた。

RA 3.32: (28e) abhikṣateśo dhanur agrayāyinaḥ

phalāni (28f) cetum sa tarūn kṣaṇam sthitaḥ /

(28g) uvāca bhūpān iti gāṃ prapaśyataḥ

(28h) praśāsmi siṃhān vinayan nṛpān iva //

その支配者(王)は樹々の果実を集めるため瞬時に立ち上がり、従者に弓を請うた。[従者は]「王達に教えるように、雌牛を狙っている獅子達に私が礼儀を教えましょう」と王様に語った。

[RA 説明] (28a–h) において、バウマカは A 1.4.51 に対する slokavārttika 中で挙げられる 8 つの動詞語根を全て使い、A 1.4.51 とその slokavārttika の規定を例証している。A 1.4.51 に対してパタンジャリは次のような slokavārttika を挙げている (MBh on A 1.4.51 [I.334.1–2])。

duhiyācirudhipracchibhikṣiṅcīṅām
upayoganimitam apūrvavidhau /
bruvīśāsiguṇena ca yat sacate
tad akīrtitam ācaritaḥ kavinā //

[kāraka 術語を規定する] 他の規則がない場合、動詞語根 (1) duh (「搾る」)、(2) yāc (「求める」)、(3) rudh (「閉じ込める」)、(4) pracch (「尋ねる」)、(5) bhikṣ (「請う」)、(6) ciñ (「集める」) [が表示する行為] に関する、有用なもの因と、動詞語根 (7) brū (「語る」) と (8) śās (「教える」) [が表示する行為] の従属要素と関係するものを、賢者(パーニニ)は「他の kāraka 術語を」与えられないものとして扱う。

¹²³ 使役の構造に関するパーニニ文法家達の説明については川村 [2012a: 106–107, fn. 85] を参照せよ。なお、使役接辞 NiC は A 3.1.26 hetumati ca (「自主的な〈行為主体〉を使役する者の〈促進〉(preṣaṇa) 等のハタラキが表示されるべき時、動詞語根の後に NiC 接辞が起こる) により導入され、NiC で終わる動詞語根は A 3.1.32 sanādyantā dhātavaḥ (「saN 等で終わる項目は〈動詞語根〉と呼ばれる) により〈動詞語根〉と呼ばれる。

¹²⁴ (29a) 「ラーヴァナは愛へ向かっている」→「ラーヴァナを愛へと向かわせる」、(29e) 「傍らにラーヴァナが寝ている」→「傍らにラーヴァナを寝かせる」

¹²⁵ (29b) 「シーターは有益さと無益さを理解している」→「シーターに有益さと無益さを理解させる」、(29c) 「シーターは三界を享受している」→「シーターに三界を享受させる」、(29d) 「シーターは酷いことを言っている」→「シーターは自分をして酷いことを言わせる」vi√lap が NiC で終わらない場合に想定される〈行為主体〉は「自分(=シーター)」(ātman) であり (Sarpavathīnā on BhK 8.83)、それが NiC で終わる場合の表現 (29d) 'kim vilāpayase atyartham' は「どうしてお前は[自分をして]酷いことを言わせるのか」(kim vilāpayase atyartham [ātmānam]) という意味構造を有している。

このślokaṅkārttika の規定内容については川村 [2012d] で詳細に扱ったため、本稿でその説明は割愛するが、端的に言えば、A 1.4.51 の適用領域を特定の動詞語根が表示する行為の特定の参与者に限定するのがこのślokaṅkārttika の役割であり、ここに挙げられる 8 つの動詞語根とそれらと同義の動詞語根が表示する行為の特定の参与者が A 1.4.51 によって〈目的〉と呼ばれることが規定されている。(28a–h) において、それぞれの動詞語根が表示する行為の特定の参与者である「雌鹿」(mṛgī)、「王」(nṛpa)、「大地」(bhū)、「従者」(puraḥsara)、「従者」(agraṇyāyin)、「樹」(taru)、「王」(bhūpa)、「獅子」(siṃha) は当該規定により〈目的〉と呼ばれる¹²⁶。

RA 3.33: nṛpāḥ puraḥ svān ^(29a)puruṣān ajīgaman

mṛgāṃś ca hantum ^(29b)śvagaṇān abodhayan /

^(29c)śvavāyasam māṃsam abūbhujan kṣaṇād

^(29d)agāpayan svān mṛgaghātīgītakān //

かつて諸王は自分達にところに家来達を行かせた（呼び寄せた）。そして鹿達を殺す為に犬の群れに〔鹿のことを〕知らせた。〔諸王は〕瞬時に犬と鳥に〔鹿達の〕肉を食べさせて、家来達に鹿殺戮の歌を歌わせた。

RA 3.34: ^(29e)aśāyayan yān iṣubhir mahāmṛgān

ahārayams tān puruṣaiḥ puraḥsaraiḥ /

nijālayān kecid ajīharan narān

akārayan sarvam imaṃ nṛpāḥ parān //

〔諸王は〕矢を放って眠らせた（殺した）大鹿達を従者である家来達に持って来させた。或る諸王は臣民達に自身の住居を獲得させ、〔捉えた〕敵達にこの全て（住居）を作らせた。

[RA 説明] (29a) ‘svān puruṣān ajīgaman’ (「〔諸王は〕自分達のところへ家来達を行かせた（呼び寄せた）」)、(29b) ‘mṛgān...’svagaṇān abodhayan’ (「犬の群れに鹿のことを知らせた」)、(29c) ‘śvavāyasam māṃsam abūbhujan’ (「犬と鳥に〔鹿達の〕肉を食べさせた」)、(29d) ‘agāpayan svān mṛgaghātīgītakān’ (「家来達に鹿殺戮の歌を歌わせた」)、(29e) ‘aśāyayan yān iṣubhir mahāmṛgān’ (「〔諸王は〕或る大鹿達を矢で眠らせた（殺した）」) という 5 つの表現により、A 1.4.52 で規定されるパターンが全て例証される。(29a) は進行を意味する動詞語根の例 (gam)、(29b) は知を意味する動詞語根の例 (budh)、(29c) は飲食を意味する動詞語根の例 (bhuj)、(29d) は音声を〈目的〉とする行為を表示する動詞語根の例 (gai)、(29e) は〈目的〉を持たない行為を表示する動詞語根の例 (si) である。「家来」(puruṣa)、「犬の群れ」(śvagaṇa)、「犬と鳥」(śvavāyasa)、「家来」(sva)、「大鹿」(mahāmṛga) はそれぞれの動詞語根が NiC で終わらない場合の〈行為主体〉であるから、それらが NiC で終わる時 A 1.4.52 により〈目的〉と呼ばれる。

[ノート] BhK 8.82 でバツティは、ślokaṅkārttika 中に挙げられる 8 つの動詞語根の中から duh の例を使って A 1.4.51 を例証している。なお BhK 8.82–83 では、A 1.4.52 中で項目が提示される順番通りに、それを例証する詩節の各語が配列されており、規則の順序だけでなく、規則中の項目の提示順をも考慮して詩節の語を配列しようとする意識がバツティにあったことを伺わせる¹²⁷。一

¹²⁶(28g) の ‘uvāca’ は動詞語根 brū に IIṭ が後続する語形である点に注意すべきである (√bhrū 3rd sg. Perf.)。動詞語根 bhrū の後に IIṭ が後続し、それに tiN が代置された段階で、当該の tiN は A 3.4.115 liṭ ca (「IIṭ の代置要素である tiN は ārdhadhātuka と呼ばれる」) により ārdhadhātuka と呼ばれるから、A 2.4.53 bruvo vaciḥ (「ārdhadhātuka が後続する時、動詞語根 brū (「語る」) 全体に vaci が代置される」) により動詞語根 brū 全体に vaci が代置される。

¹²⁷また例えば、A 2.3.69 na lokāvyayaniṣṭhākhalarthatṛṇām が例証される BhK 8.126–128 でも、その語順は A 2.3.69 が規定する七つの条件の提示順序と完璧に一致しており、これらの諸詩節を見るにバツティに上述の意識があることは間違いないと筆者は考える (川村 [2012b: 125–128] を見よ)。

方、RA 3.31–34 では、A 1.4.51 に対して挙げられる śloka-vārttika が規定する全パターンと A 1.4.52 が規定する全パターンが例証されており、特筆すべきは、śloka-vārttika 中で 8 つの動詞語根が挙げられる順序及び A 1.4.52 で項目が提示される順序とそれを例証する各語の順序が完璧に一致していることである。これを見るに、バウマカにもバツティと同様の意識があることは明白である¹²⁸。しかし相変わらず各語の指示対象及び詩節の内容は不明瞭で、何の脈絡もない。特に RA 3.32 と RA 3.34 において ab 句と cd 句の繋がりには無いに等しく、先に見た〈無益な文〉という詩的欠陥をここにも見出すことが出来る。なお RA 3.31 と RA 3.33–34 で使用される韻律は vaṃśasthāvila で

¹²⁸このような両者の規則例証の態度を見て、我々の頭に真っ先に浮かぶのはバーマハ (Bhāmaha, 7 世紀)、ダンディン (Daṇḍin, 8 世紀)、ヴァーマナ (Vāmana, 8 世紀) という比較的バツティと年代が近いと考えられる詩論家達が揃って文学上の欠陥として挙げる〈順序が乱れた文〉(apakrama) と、バーマハとダンディンが修辞として挙げる〈順番対応〉(yathasamkhyā, KV on A 1.3.10: saṅkhyāśabdena kramo lakṣyate) という考え方である (修辞としてではないが、ヴァーマナもそれを〈順序〉(krama) という言い方で挙げている)。まず前者は、或る複数の表現とそれに関係する表現が対応する順番通りに配置されていない場合に見出される文学上の欠陥であり、各詩論家の定義とその例は次の通りである。

KA 4.20–21: yathopadeśaṃ kramaśo nirdeśo 'tra kramo mataḥ /
tadapetaṃ viparyāsād ity ākhyātam apakramam //
vidadhānu kirīṭendū śyāmābhrahimasacchavī /
rathāṅgaśūle bibhrāṇau (vibhrāṇau を修正) pātāṃ vaḥ śambhuśārṅgiṇau //

ここ (詩学の体系) では、[最初の事柄を] 述べた順番通りに、[対応する次の事柄を] 順番に提示することが〈順序〉であると認められる。反転によりそれ (順序) を欠くものが〈順序が乱れた [文]〉と呼ばれる。

[例] 王冠と月を身に着け、黒雲と雪のように美しい肌をし、円盤と三叉槍を保持するシヴァとヴィシュヌが貴方達をお守りくださらんことを。

ここで「王冠」(kirīṭa)・「黒雲 [のような肌]」(śyāmābhra)・「円盤」(rathāṅga) は「ヴィシュヌ」(śārṅgin) に、「月」(indu)・「雪 [のような肌]」(hima)・「三叉槍」(śūla) は「シヴァ」にそれぞれ対応するから、śambhuśārṅgiṇau (「シヴァとヴィシュヌ」という複合語中の語順が逆であり、本来ならば 'śārṅgiśaṅkarau' (「ヴィシュヌとシヴァ」) 等と述べるべきである (UV on KA 4.21)。なお、ヴァーマナが 'apakrama' を文の欠陥に分類していることを根拠に、それを「順序を欠く [文]」(apagataḥ kramaḥ yasmin tad [vākyaṃ]) と解釈した。

KĀ 3.144–145: uddeśānugūṇo 'rthānām anūddeśo na cet kṛtaḥ /
apakramābhidhānaṃ taṃ doṣaṃ ācakṣate budhāḥ //
sthitinirmāṇasaṃhārahetaḥ jagatām amī /
śambhunārāyaṇāmbhojayonayaḥ pālayantu vaḥ //

[最初の] 事柄の言及に相応しい形で、それに合わせて [対応する次の] 事柄が述べられないならば、それは〈順序が乱れた [文]〉と呼ばれる詩的欠陥であると賢者達は言う。

[例] 世界のかの維持・創造・破壊の原因であるシヴァ・ヴィシュヌ・ブラフマン (蓮から生まれる者) が貴方達をお守りくださらんことを。

「ブラフマン」(ambhojayoni) は「創造」(nirmāṇa)、「ヴィシュヌ」(nārāyaṇa) は「維持」(sthiti)、「シヴァ」(śambhu) は「破壊」(saṃhāra) にそれぞれ対応するが、詩節の各語は対応する順番通りに配置されておらず、本来ならば 'śambhunārāyaṇāmbhojayonayaḥ' (「シヴァ・ヴィシュヌ・ブラフマン (蓮から生まれる者) が」) を 'viṣṇubrahmamamaheśāste satataṃ' (「かのヴィシュヌ・ブラフマン・シヴァが常に」) 等とすべきである (Prabhā on KĀ 3.145)。

KAS 2.2.22: kramahīnārtham apakramam //

〈順序〉を欠く意味を持つものが〈順序の乱れた [文]〉である。

KASV on KAS 2.2.22: uddeśinām anūddeśinām (anuddeśinām を修正) ca sambandhaḥ kramaḥ / tena hīno 'rtho yasmiṃś tad apakramam / yathā / kīrtipratāpau bhavataḥ sūryacandramasoḥ samau //

[最初に] 述べられるものと [次に] それに合わせて述べられるもの間にある関係が〈順序〉である。それ (〈順序〉) を欠く意味を持つものが〈順序が乱れた [文]〉である。例えば「貴方様の名声と威厳は太陽と月に等しい」のように。

「名声」(kīrti) は「月」(candramas) に、「威厳」(pratāpa) は「太陽」(sūrya) に対応するはずであるが、各語は対応する順番通りに配置されていない。

あるが、RA 3.31a 句 ‘ātmasuṭah’ と d 句 ‘mārgam’、RA 3.33c 句 ‘māṃsam’、RA 3.34d 句 ‘sarvam’ の箇所語の途中で中間休止が来てしまっている。

〈順番対応〉はこれとは逆に、或る複数の表現とそれに関係する表現を対応する順番通りに配置する修辞であり、パーマハとダンディンによる定義と彼らが挙げる例は次の通りである。

KA 2.89–90: bhūyasām upadiṣṭānām arthānām asadharmanām /
kramaśo yo ’nunirdeśo yathāsaṅkhyam tad ucyate //
padmendubhṛṅgamātāṅgapuṃskokilakalāpinaḥ /
vaktrākāntīkṣaṇagativāpivālais tvayā jitāḥ //

性質を同じくしない〔最初に〕述べられた多くの事柄と関係する、それに合わせた〔対応する次の事柄の〕順番通りの提示が、〈順番対応〉と呼ばれる。

〔例〕貴方はその 顔・輝き・一瞥・足取り・声・髪 によって 蓮・月・黒蜂・象・雄郭公・孔雀 に勝利した。

ここで「顔」(vaktra) は「蓮」(padma)、「[身体の]輝き」(kānti) は「月 [の輝き]」(indu)、「一瞥」(īkṣaṇa) は「黒蜂」(bhṛṅga)、「足取り」(gati) は「象 [の足取り]」(mātāṅga)、「声」(vāṇī) は「雄郭公 [の鳴き声]」(puṃskokila)、「髪」(vāla) は「孔雀 [の尾]」(kalāpin) にそれぞれ対応し、各語は対応する順番通りに配置されている。なお定義中の ‘asadharmanām’ (「性質を同じくしない [事柄]」) は、二つの事柄間に共通属性が存在しないことを述べているわけではなく (パーマハが挙げる例を見ても分かるように二つの事柄間には或る種の共通属性が存在し、比喩関係 [upamānopameyabhāva] が成り立つ)、最初に述べられた事柄と対応する事柄は最初のものとは異なるもの (arthāntara) でなければならないことを示している。全く同じ事柄を順番通り並べても〈順番対応〉とは見なされず、それは単なる同義語反復 (paunaruktya) である (UV on KA 2.90)。

KĀ 2.273–74: uddiṣṭānām padārthānām anūddeśo yathākramam /
yathāsaṅkhyam iti proktaṃ saṅkhyānaṃ krama ity api //
dhruvaṃ te coritā tanvi smitekṣaṇamukhadyutiḥ /
snātum ambhaḥ praviṣṭāyāḥ kumudotpalapaṅgajaiḥ //

〔最初に〕述べられた事柄の順序に従い、それに合わせて〔対応する次の〕事柄を述べるのが〈順番対応〉と言われ、〈順列〉や〈順序〉とも言われる。

〔例〕細い女よ、月待ち白睡蓮・青睡蓮・赤蓮は、沐浴のために水に入った貴方の 微笑み・一瞥・顔の輝き を盗んだに違いない。

ここで「微笑み」(smita)・「一瞥」(īkṣaṇa)・「顔」(mukha) はそれぞれ「月待ち白睡蓮」(kumuda)・「青睡蓮」(utpala)・「赤蓮」(paṅkaja) に対応し、各語は対応する順番通りに配置されている。ここでは白さ (śvetatva)・青さ (nīlatva)・赤さ (āraktatva) がそれぞれの共通属性である (Prabhā on KĀ 2.274)。

パッティも詩学セクション中でこの修辞を例証している。

BhK 10.44: kapiṛṣṭhagatau tato narendrau kapayaś ca jvalitāgnipīṅgalākṣāḥ /
(1)mumucuḥ (2)prayayur drutaṃ (3)samīyur (1)vasudhām (2)vyoma (3)mahīdharam mahendram //

それから、猿の背中に乗った二人の王 (ラーマとラクシュマナ) と、燃え上がる火の如き赤褐色の目をした猿達は、(1)大地を離れ、(2)空に向かい、即座に (3)マヘンドラ山に到着した)

「大地」(vasudhā)、「空」(vyoman)、「山」(mahīdhara) は、それぞれ ‘mumucuḥ’、‘prayayur’、‘samīyur’ という三つの動詞形が表示する行為の〈目的〉であり、各語は各動詞形に対応する順番通りに配置されている。

またこの〈順番対応〉という考え方は規則解釈の一技法としてパーニニにも採用されている。次の規則を見よ。

- A 1.3.10 yathāsaṅkhyam anudeśaḥ samānām // 「同じ数で〔最初に〕提示される項目の順序に従って、〔後に〕提示される項目は起こる」
- A 6.1.78 eco ’yavāyāvah // 「音の接続の領域で、母音が後続する時、eC (e, o, ai, au) にそれぞれ ay, av, āy, āv が順番通りに代置される」

A 6.1.78 中の eC は Śivasūtra に挙げられる e, o, ai au のことを指示している。そしてそれらに母音が後続する時、e には ay が、o には av が、ai には āy が、au には āv がそれぞれ代置されることが解釈規則 A 1.3.10 により理解されるのである (A 1.3.10 の機能については Cardona [1980–81] に詳しい)。

3.10 BhK 8.84, RA 3.34–35 → A 1.4.53–55

BhK 8.84: ājñām (30b)(32-1) kāraya rakṣobhir (30a)(32-2) mām priyāṇy upahāraya /
(31-1) kaḥ (31-2) śakreṇa kṛtam necched adhimūrdhānam añjalim //

「お前は悪魔達に命令を実行させよ。好きなものを俺に持ってこさせろ。インドラに頭上で合掌してもらうことを望まない人がいようか」

- (30) A 1.4.53 hr̥ror anyatarasyām // 「NiC で終わらない動詞語根 hr̥ (「取る、運ぶ」) と kr̥ (「為す」) が表示する行為の〈行為主体〉は、その動詞語根がNiC で終わる場合、任意に〈目的〉と呼ばれる」¹²⁹
- (31) A 1.4.54 svatantraḥ kartā // 「行為の実現に対して主要なるものとして意図される kāraka は、〈行為主体〉と呼ばれる」¹³⁰
- (32) A 1.4.55 tatprayojako hetuś ca // 「その〈行為主体〉を使役する kāraka は、〈原因〉と呼ばれる。そして〈行為主体〉とも呼ばれる」¹³¹

[BhK 説明] (30b)(32-1) ‘ājñām kāraya rakṣobhiḥ’ (「お前は悪魔達に命令を実行させよ」) において、「悪魔」(rakṣas) は、動詞語根 kr̥がNiC で終わらない時の〈行為主体〉であるから、それがNiC で終わる時 A 1.4.53 により〈目的〉と呼ばれ得るが¹³²、その術語の適用は任意であり、ここでは〈行為主体〉と呼ばれる例をもって A 1.4.53 が例証されている。(30a)(32-2) ‘mām priyāṇi upahāraya’ (「俺に好きなものを持って来させろ」) において、「俺」(asmad) は動詞語根 hr̥がNiC で終わらない時の〈行為主体〉であるから、それがNiC で終わる時、A 1.4.53 により〈目的〉と呼ばれる¹³³。また上記の表現において、「シーター」は悪魔とラーヴァナを〈使役する行為主体〉(prayojakakarṭr) であるから、A 1.4.55 により〈原因〉と呼ばれる。そして、「kaḥ śakreṇa kṛtam necchat adhimūrdhānam añjalim’ (「インドラに頭上で合掌してもらうことを望まない人がいようか」) において、「インドラ」(śakra) と「誰 (kaḥ)」(kim) は A 1.4.54 によりそれぞれ動詞語根 kr̥ と iṣ̥が表示する行為に相関して〈行為主体〉と呼ばれる。(31-2) ‘śakreṇa kṛtam’ (「インドラによってなされる [合掌]」) において、〈行為主体〉は他の項目によって表示されていないから (A 2.3.1 anabhihite)、それを表示するためにśakra という語の後には先の A 2.3.18 kartṛkaraṇayos tṛtiyā により第三格名詞接辞が起る。一方、(31-1) ‘kaḥ...necchat’ (「望まない人がいようか」) において、〈行為主体〉は動詞語根 iṣ̥に後続する tiP により既に表示されているから¹³⁴、kim と

各詩論家の定義及び彼らが挙げる例を見る限り、上述の詩的欠陥と修辭は、決して各文法規則とそれを例証する各語との順番対応に関わるものではないが、文法家であると同時に詩人でもあったはずのバツティが、この欠陥と修辭を知らないはずはなく、その証拠に彼は後者を作品中で例証している。また、バツティと年代の近い三人もの詩論家達が前者を詩的欠陥として定義し、後者はパーマハとダンディンが修辭として定義するに加えて古くはパーニニもその考えを持っていたという事実から、この二つの考え方は汎インド的なものであり、彼の時代にもその考え方が存在していたことは疑い得ない。文法規則及びその項目の提示順と、それを例証する各語の順序を対応させようとするところに、サンスクリット詩人としてのバツティとバウマカの美意識が表れていると言えるだろう。

¹²⁹ KV on A 1.4.53: harati bhāraṃ māṇavakaḥ / hārayati bhāraṃ māṇavakaṃ māṇavakena iti vā / karoti kaṭam devadattaḥ / kārayati kaṭam devadattaṃ devadattena iti vā / (「[動詞語根 hr̥の例] 少年は荷物を運ぶ。彼は少年に (māṇavakam あるいは māṇavakena) 荷物を運ばせる。[動詞語根 kr̥の例] デーヴァダッタはマットを作る。彼はデーヴァダッタに (devadattam あるいは devadattena) マットを作らせる」)

¹³⁰ KV on A 1.4.54: devadattaḥ pacati / sthālī pacati / (「デーヴァダッタが料理する。鍋が料理する」)

¹³¹ KV on A 1.4.55: kurvāṇam prayunkte kārayati / hārayati / (「kārayati とは [今現在 X を] なしている者を任用するという意味である。彼は運ばせる (=今現在 X を運んでいる者を任用する)」)

¹³² 「悪魔達が命令を実行している」→「悪魔達に命令を実行させる」

¹³³ 「俺が好きなものを持って来ている」→「俺に好きなものを持って来させろ」

¹³⁴ A 3.4.69 laḥ karmaṇi ca bhāve cakarmakebhyah // (「1音は、〈目的〉を持つ行為を表示する動詞語根の後には〈目的〉と〈行為主体〉が表示されるべき時に起り、〈目的〉を持たない行為を表示する動詞語根の後には行為と〈行為主体〉が表示されるべき時に起る」) A 3.4.78 tiptasjhisipthasthamibvasmastātām̐jhatāsāthām̐dhvamīdvahimahiṇ // (「1音に、tiP, tas, jhi, siP, thas, tha, miP, vas, mas, ta, ātām, jha, thās, āthām, dhvam, iT, vahi, mahiN が代置される」) 1音 (lakāra) の代置要素 (ādeśa) が1音の意味を担うことは言うまでもない。

いう語の後には A 2.3.46 *prātipadikārthalingaparimānavacanamātre prathamā*（「〈名詞語基〉の意味だけ、性だけ、量だけ、数だけが表示されるべき時、第一格名詞接辞が起こる」）により第一格名詞接辞が起こる。

RA 3.34: *aśāyayan yān iṣubhir mahāmṛgān*(30a-a') *ahārayams tān puruṣaiḥ puraḥsaraiḥ /**nijālayān kecid (30a-b') ajīharan narān*(30b) *akārayan sarvam imam nṛpāḥ parān //*

〔諸王は〕矢を放って眠らせた（殺した）大きな鹿達を従者である家来達に持って来させた。或る諸王は臣民達に自身の住居を獲得させ、〔捉えた〕敵達にこの全て（住居）を作らせた。

RA 3.35: *bhayākulāśvīyavivarjitāntikas**tato (31-1) varāhaḥ kupitaḥ samīyivān /**aghāni¹³⁵ (31-2) rājñā svayam eva pattriṇā**na kārayāmāsa pareṇa vighraham //*

それから、恐怖に駆られた騎兵達が側からいなくなった怒り狂う猪がやって来たが、王はまさに自ら矢で〔その猪を〕殺した。〔王は〕他者に戦いをさせることはなかった。

〔RA 説明〕(30a-1) ‘*ahārayan tān puruṣaiḥ*’（「〔諸王は〕家来達にそれ（大鹿）を持って来させた」）と(30a-2) ‘*nijālayān...ajīharan narān*’（「〔諸王は〕臣民達に住居を獲得させた」）において、「家来」(*puruṣa*)と「臣民」(*nara*)は動詞語根 *hr̥*がNiCで終わらない時の〈行為主体〉であるから、どちらも A 1.4.53 により〈目的〉と呼ばれ得るが、「家来」は〈行為主体〉と呼ばれ、「臣民」は〈目的〉と呼ばれる例を通じて、A 1.4.53 が規定する2パターンが例証されている。(30b) ‘*akārayan sarvam imam...parān*’（「〔諸王は〕敵達にこの全てを作らせた」）において、「敵」(*para*)は動詞語根 *kr̥*がNiCで終わらない時の〈行為主体〉であるから、それがNiCで終わる時 A 1.4.53 により〈目的〉と呼ばれる。(31-1) ‘*varāhaḥ kupitaḥ samīyivān*’（「怒り狂う猪がやって来た」）と(31-2) ‘*aghāni rājñā*’（「王は〔猪を〕殺した」）において、「猪」(*varāha*)と「王」(*rājan*)はそれぞれ、*saṃ*に先行される動詞語根 *i*と動詞語根 *han*が表示する行為に相関して A 1.4.54 により〈行為主体〉と呼ばれる。*varāha*という語の後に第一格名詞接辞が起こり、*rājan*という語の後に第三格名詞接辞が起こる理屈は BhK 8.84 の場合と同様である¹³⁶。そして、‘*na kārayāmāsa pareṇa vighraham*’（「〔王は〕他者に戦いをさせることはなかった」）において、「他者」(*para*)を〈使役する行為主体〉は文脈上「王」(*rājan*)のはずなので、校訂者も注記するように¹³⁷、詩節 c 句の ‘*rājñā*’（第三格名詞接辞で終わる語）に接辞変換 (*vibhaktipariṇāma*)を加えた ‘*rājā*’（第一格名詞接辞で終わる語）を当該箇所を読み込むべきである。当該箇所に想定される「王」は「他者」を〈使役する行為主体〉であるから A 1.4.55 により〈原因〉と呼ばれる。

RA 3.35 で使用される韻律は *vaṃśasthāvila* であるが、a 句 ‘*-bhayākulāśvīya-*’ と d 句 ‘*kārayāmāsa*’ の箇所で語の途中で中間休止が来てしまっている。

¹³⁵校訂者は ‘*aghāti*’ と読み替えることを提案しているが、動詞語根 *han* の aorist passive 形である ‘*aghāni*’ という読みで読解可能である。

¹³⁶ただし当該の場合では、*tiN*ではなく、*IIṬ*に代置される *KvasU* が〈行為主体〉を表示する。A 3.2.107 *kvasuṣ ca //*（「ヴェーダの領域では、*IIṬ*に *KvasU* が代置される」）

¹³⁷校訂者も当該箇所の構文について ‘*rājñā ity asyaivārthavaśād vibhaktivipariṇāmena prathamāntatvaṃ vidhāya kartṛtvenānvayo bodhyaḥ*’ と注記している。

4 〈美文論書〉としての性格

以上、Bhaṭṭikāvya と Rāvaṇārjunīya における kāraka 術語規則例証の様態を詳しく見て来た。BhK 8.70-84 の表現やその内容は各規則の規定と照らし合わせて何ら矛盾は無く、そこでは物語の流れに沿う形で各規則が例証されている。対して RA 3.11-35 中には規則の規定内容にそぐわない表現が見受けられたのに加え、その諸詩節は詩的欠陥と見なされ得る要素を多分に含んでいる。

それに加え、RA 3.11-35 ではありふれた同一の単語が繰り返し使用されることがその特徴として挙げられる。使用頻度が特に多いものを挙げれば sma (動詞形と共使用される不変化詞) が 5 回¹³⁸、āśu (「即座に」) が 4 回、nrpa (「王」) が 9 回、女性形 mrgī (1 回) を含めて mrga (「鹿、動物」) が 7 回、aśva (「馬」) が 5 回、rajas (「砂埃」) が 5 回、テキスト修正 (1 回) を含めて śara が 5 回、patha (「道」) や pathin (「道」) が 4 回使用されている。さらに、曖昧でその指示対象がはっきりしない para (「他のもの、敵」)、apara (「他のもの」)、anya (「他のもの」)、kaścit (「或るもの」)、sarva (「全て」) 等の語の使用も多く、tathā (「そのように」)、tadā (「その時」)、tadānīm (「その時」)、ittham (「このように」) 等の派生語も合わせると代名詞類の使用数は約 47 回にもなる (関係代名詞や疑問代名詞及び tvam 等の指示対象が明らかなものは除く)。僅か 25 詩節に対してこの数は異常である。まずもって、不必要で不明解なこの代名詞類の多用が RA 3.11-35 を不明瞭かつ陳腐なものにしている第一の原因であり、それらが詩節の韻律を整えるためだけに無配慮に使用されていることは明白である。

また BhK 8.70-84 の韻律は全て śloka であるのに対し、RA 3.11-35 では upajāti (4 箇所)、vasantatilakā (1 箇所)、upendravajrā (1 箇所)、vaṃśasthāvila (7 箇所)、praharṣinī (1 箇所)、mālabhārinī (2 箇所)、indravajrā (1 箇所)、aupacchandāsika (2 箇所)、rathoddhatā (3 箇所)、āryā (1 箇所)、puṣpitāgrā (1 箇所)、mālinī (1 箇所)、indravaṃśā (1 箇所) という 13 種の韻律が使用されている¹³⁹。ここに、出来るだけ多くの韻律を使用して自らの技量を示そうとする詩人バウマカの意図を見て取れるが、筆者が見る限り計 17 もの箇所で、区切りようのない語の途中に中間休止が来てしまっている。これは紛れも無い詩的欠陥であり、多種の韻律を使用することで反対に自分の首を締める結果となっている。

以上の点は、物語描写と規則例証を兼ねた韻文作品を創作する困難さと作者バウマカの技量を如実に物語っている。しかし、各規則が規定するパターンの単純な例証数は BhK 8.70-84 (約 42 個) より RA 3.11-35 (約 62 個) の方が圧倒的に多いことは事実である。従って、その限りでは Rāvaṇārjunīya の方がこの種の作品としては優れており、とにかく規則の例証が第一の目的なのだから多少の欠陥は許容される、と考えることが出来るかもしれない。この問題をどう捉えるべきであろうか。

ここで、バツティとバウマカにその意識があったかどうかは別として、Bhaṭṭikāvya と Rāvaṇārjunīya が後代の詩論家達によって 〈美文論書〉 (kāvyasāstra) と呼ばれていることに注目したい。両作品がこの用語で呼ばれることは良く知られているが、従来の研究ではその用語の意味内容が正確に理解されているとは言い難く、曖昧な形のまま研究者達に受け入れられて来た¹⁴⁰。〈美文論書〉と

¹³⁸ Gaṇapātha 中の ca 群に含まれる sma は avyaya あるいは nipāta と呼ばれる項目である。注 64 を見よ。

¹³⁹ Rāvaṇārjunīya の各章各詩節で使用される韻律について詳細は Velankar [1948-49] を見よ。

¹⁴⁰ このような事情に加え、古典サンスクリット文学の優れた概説書を著した Lienhard [1984: 225.20-226.15]、それを参照した浅井 [1996: 82.21-23]、Bhaṭṭikāvya に対して修辭学的観点からアプローチを試みた Sudyka [2000: 449.5-7]、Clay Sanskrit Library シリーズの一つとして Bhaṭṭikāvya の最新訳を公表した Fallon [2009: xxxi.24-25] 等、Bhaṭṭikāvya を間接的または直接的に取り扱う代表的な概説書や論文等において、何故か同作品が 'kāvyasāstra' ではなく 'sāstrakāvya' として紹介され、解説されている。しかし以下に述べるように、詩論家達によれば Bhaṭṭikāvya は 'kāvyasāstra' であり、それを 'sāstrakāvya' として誤って紹介する記述は正しく修正されねばならない。なお kāvyasāstra の概要については Raghavan [1978: 795.26-37] が簡潔にまとめているが、その用語に対する詳細な考察はなされていない。

いう用語によって意図される意味内容を明らかにすることは、インドの詩論家達が *Bhaṭṭikāvya* や *Rāvaṇārjunīya* をどのような作品として捉えていたかを知る上で有益であり、それにより、主観的・現代的な視点ではなくインド詩学の視点から両作品の性格や価値を論ずることが可能となる。そこで、若干の紙幅を割いて以下に〈美文論書〉という用語について検討してみたい。

4.1 *Bhaṭṭikāvya* の性格

〈美文論書〉(kāvyasāstra) という用語の考察に入る前に *Bhaṭṭikāvya* の性格を確認しておく。以下に見る *Bhaṭṭikāvya* の性格は、その模倣作品である *Rāvaṇārjunīya* にもそのまま当てはめることが出来るだろう。

まずもって、*Bhaṭṭikāvya* は英雄ラーマの軌跡を麗筆を持って描く完全なる〈美文〉(kāvyā) であり、上述したようにマハーカーヴィアの特徴をも備えている。*Bhaṭṭikāvya* が〈論書〉(śāstra) としての側面も持つと言われるのは、同作品が、表面上はラーマ物語を美しく描きつつも、その際に使用される各表現によって文法規則や修辞等を例証し、それによって読者に言語使用に関する教示を与えるからに他ならない。ただし、初学者が作品を表面的に読んだだけでは（あるいは聞いただけでは）*Bhaṭṭikāvya* の主眼である文法学の教示を受けることはできず、それにはその道に精通した師 (guru) の〈解説〉(vyākhyā) が必要となる¹⁴¹。読者（聞き手）が、どの表現によってどのような文法規則が考慮され、各文法規則がどう解釈されるべきかを師の助けを借りながら理解し、文法実例書である *Bhaṭṭikāvya* を通じて文法学とそれに則した正しい言語使用を学ぶ時、初めて同作品は〈論書〉として機能することになるのである¹⁴²。

因に、Regmi [1964] は *Bhaṭṭikāvya* が著されることになったきっかけを物語る次のような逸話を紹介している。

[私は] 次のような [話] もまた耳にする。或る王が一人の賢者に「貴方は一年で我が息子に文法学を教示することが出来るか」と問うた。そして彼（賢者）の「出来ませう」という答えを聞いた直後、その王は、自分の息子に [文法学を] 教示するために

¹⁴¹ BhK 22.34: vyākhyāgamyam idam kāvyam utsavaḥ sudhiyām alam / hatā durmedhasaś cāsmin vidvatprijatayā mayā // (「解説を通じて [のみ] 理解可能なこの〈美文〉は、賢者達にとって有り余る歓喜である。そしてここ（作品中）で私は愚者達を考慮しない。賢者を愛好するがゆえに」) この詩節の解釈については川村 [2012a: 96-97] を参照せよ。

¹⁴² バッティが *Bhaṭṭikāvya* を通じて読者達に文法学や詩学を教示することを意図していたことは次の詩節から窺える。

BhK 22.32: idam adhigatam uktimārgacitraṃ
vivadiṣatām vadatām ca saṃnibandhāt /
janayati vijayaṃ sadā janānām
yudhi susamāhitam aiśvaraṃ yathāstram //

良く構成され、表現方法の点で驚くべきこれ (*Bhaṭṭikāvya*) が学ばれた時、美しく繋がれているが故に、それは様々な言語使用を為そうとする者達と言語使用を為している者達に常に勝利を与える。戦闘に専心し、解脱の道を得ている驚くべきシヴァの武器が常に勝利を与えるように。

端的に言えば、文法規則や修辞等が例証される *Bhaṭṭikāvya* は言語使用者に資するものであり、同作品を学習し理解した者は、文法学や詩学の知識を身につけ、正しく美しい言語使用が出来るようになるというわけである。しかし誰でも *Bhaṭṭikāvya* を学べるわけではない。バッティは続く詩節で次のように述べている。

BhK 22.33: dipatulyaḥ prabandho 'yaṃ
śabdalaṅkāraśaṅkaśuṣām /
hastāmarśa ivāndhānām
bhaved vyākaraṇād r̥te //

この作品は文法学（語を特徴付けるもの）を眼とする者達にとっては灯火に等しい。文法学を知らなければ、[この作品の読解は] 盲者達が手で [何かに] 触れるようなものであろう。

その賢者を主指導者に任命した。[或る日、文法学を] 教示している時に師 (賢者) と弟子 (王子) の間を若い象が通り過ぎたのが原因で、[文法学を] 一年で学ぶことが出来なくなった時、賢者は、[それまでの] 自分の苦勞が水の泡になってしまうことを想像して、文法規則を順に追って行く一つの〈美文〉を創った。それを使って、決められた期間内に王子を文法学に習熟させることが出来たので、賢者は約束を果たし、王から名声と敬意を獲得した。他ならぬこの詩人の名を Bhṛṅṅi と言い、或る者は彼が著した〈美文〉を *Bhṛṅṅikāvya* と呼ぶ¹⁴³。

もちろんこの逸話を鵜呑みにすることは出来ないが、そこに多少なりとも史実が反映されているとするならば、*Bhṛṅṅikāvya* の背景を探る一資料となり得るだろう。この逸話は、*Bhṛṅṅikāvya* が文法学を手っ取り早く学ぶための教科書のようなものとして使用されたことを伝えている点で大変興味深い¹⁴⁴。BhK 22.34 中の ‘vyākhyāgamyaṃ’ (「〈解説〉を通じて [のみ] 理解可能な [〈美文〉]」) を言い換えたマツリナータ (Mallinātha, 14 世紀から 15 世紀) の「師の口を通じて [のみ] 理解可能な [〈美文〉]」(gurumukhavedyaṃ) という言葉も、その当時、師が *Bhṛṅṅikāvya* を教科書代わりに使用していた可能性を示唆している¹⁴⁵。

4.2 〈美文論書〉の定義とその解釈可能性

それでは以下に、〈美文論書〉(kāvyasāstra) という用語を解釈する上で手がかりとなる一次文献を一つずつ取り上げて、両作品が持つ性格と関連付けながら〈美文論書〉について考察する。

文法学を知る者が *Bhṛṅṅikāvya* を手にすれば、それは灯火の如く周りを照らし出してくれるものとなるが、文法学を知らない者が一人で手にしても、盲者が何かに触れて外形だけを理解してその本質を理解できないように、何の訳にも立たないということである。Diwekar [1929: 829.19-28] は上記 2 詩節を読み解いて *Bhṛṅṅikāvya* の性格とそれが担う役割を次のようにまとめている。

What he means to say is that those who have already mastered the science of grammar will be able to perceive with the help of this work many similar forms, but those who do not know grammar will be able to recognize at least the forms which actually occur in his poem, just like the blind, who, even when they are unable to see other things, at least recognize those things which they can feel by their hands. It is thus useful for both—those who have studied the science of grammar and are speaking Sanskrit ; as well as those who have not learnt grammar, but have a desire to speak Sanskrit.

蓋しこれは卓見であり、*Bhṛṅṅikāvya* の特徴や役割を良く捉えた説明であるが、文法学を知らない者が同作品からどのようにして言語使用を学ぶのかが言及されていない。文法学を学んでおらず、これから正しい言語使用をしたいと望んでいる初級者 (vivadiṣat) は、師についてもらって同作品を学習することでその力を身に付け、文法学を修め、既に正しい言語使用をなしている上級者 (vadat) も同作品を学ぶことでさらなる高みに行くことが出来るのである。なお上記 2 詩節の解釈については川村 [2012a: 94-96] を参照せよ。

¹⁴³Regmi [1964: 6.15-23]: idam apy ākārṇyate kaścīd rājaikam paṇḍitam aprcchat—kiṃ bhavān ekavarṣābhyantare mama putraṃ vyākaraṇam adhyāpayitum samartho 'stīti / tatas tasya prabhavāmīti kathanānantaram sa rājā vinayapuraṣaram taṃ vidvāṃsaṃ svatanayādhyāpanārthaṃ nyayunkta / adhyāpanakāle guruśiṣyāv antarā kariśāvakasyāpātanena yadaikavarṣiko 'nadhyaḥ saṃvṛttas tadā paṇḍitaḥ svakīyanirbandhasya naiṣphalyasambhāvanayā lakṣaṇānusārikam ekaṃ kāvyam praṇināya, yena niyatasamaye rājakumārasya vyākaraṇaprāvīṇyena viduṣaḥ pratijñāpūraṇam rājato yaśahpuraskārāvāptiś cāsīt / ayam eva kavir bhṛṅṅi nāma tatpraṇītaṃ kāvyam ca bhṛṅṅikāvyaṃ ity eke /

¹⁴⁴Ray [1937] も *Bhṛṅṅikāvya* 創作に関する同種の逸話を伝えているが、Regmi [1964] のものとは細部が若干異なる。Ray [1937: viii.18-25]: ‘The story runs that one day when he was lecturing on grammar, an elephant passed between the teacher and his pupils. This was taken as an evil omen forbidding lecture on the subject for a whole year. The grammarian, however, found it difficult to forego the pleasure of discoursing upon his favourite subject for such a long period of time, and he hit upon the happy idea of teaching grammar through Kavya.’

残念ながら Ray [1937] も Regmi [1964] もこれらの逸話の出所を明らかにしていないため、その伝承過程は不明であり、これらの逸話の真偽を決定出来る証拠も何一つ無い。なお、M. A. Karandikar and S. Karandikar [1982: xiv.27-31] も Regmi [1964: 6.15-23] や Ray [1937: viii.18-25] の記述に従い、上述の逸話を紹介しているが、その紹介の仕方は読者に誤解を招くものであるので修正されるべきである。

¹⁴⁵BhK 22.34 については注 141 を見よ。

4.2.1 ボージャ

自らの著作活動に加え、芸術の庇護者としても著名であったダーラー（Dhārā, 現在のメディアブラデーシュ）の王ボージャ（Bhoja, 11 世紀前半）が著した *Śṛṅgāraprakāśa* は、全 36 章からなる大規模な作品であり、〈美文〉に関わる要素を網羅的に取り上げている。同作品中でボージャは〈美文論書〉（*kāvyaśāstra*）を次のように定義する。

偉大な詩人達が〈論書〉の扱う事柄を一体化させている〈美文〉は、*Bhaṭṭikāvya* や *Mudrārākṣasa* と同様、〈美文論書〉であろう¹⁴⁶。

ボージャによれば、〈論書〉で扱われるべき事柄と一体となってその内容が描かれる〈美文〉、言い換えれば〈論書〉としての要素と〈美文〉としての要素が巧みに混合された〈美文〉が〈美文論書〉である¹⁴⁷。〈論書〉で扱われるべき事柄が同時に扱われるとはいえ、〈美文論書〉はあくまで〈美文〉であることが述べられている点に留意されたい。このことは、*kāvyaśāstra* という複合語において、〈論書〉（*śāstra*）ではなく〈美文〉（*kāvya*）の方が主要素（*pradhāna*）であることを示している¹⁴⁸。

4.2.2 ラージャシェーカラ

〈美文論書〉（*kāvyaśāstra*）という用語を挙げ、その意味内容を定義するのはボージャのみであるが、北インドのマホーダヤ（Mahodaya, 現在のカウナジ）で活躍したラージャシェーカラ（Rājaśekhara, 9 世紀末から 10 世紀前半）の手になる詩論書 *Kāvyamīmāṃsā* 中に、ボージャの定義との関連を見て取れる興味深い表現がある。

そして閃きと教養を備えた詩人が〔真の〕詩人と言われる。そしてそれ（詩人）は三種である。即ち〈論書〉の詩人、〈美文〉の詩人、両者（〈論書〉と〈美文〉）を兼ね備える詩人である。…（中略）しかし、もし両者（〈論書〉と〈美文〉）に完璧に精通し

¹⁴⁶ *Śṛṅgāraprakāśa* (727.11–12): *yatrārthas śāstrāṅgām kāvye 'bhiniveśyate mahākavibhiḥ / tad bhaṭṭikāvyamudrārākṣasavat kāvyasāstram syāt //*

¹⁴⁷ *śāstra* という語は、「教示」を意味する動詞語根 *śās* (DhP II.66 *śāsÚ anuśīstau*) の後に *unādi* 接辞 *straN* が導入されて派生する語である (US 4.158 *sarvadhātubhyaḥ śtran*)。この語は多義的な語であるが、語源的には「教示する手段」を意味し (*Vācaspatya* [6005.35]: *śīsyate 'nena, A 3.3.1 unādayo bahūlam*)、そこから「教科書、教本、論書」という意味が導かれる (AmK 3.3.179c: *nideśagranthayoḥ śāstram*)。サンスクリット文献における *śāstra* という語の用法については Cardona [1997: 572–573] が簡潔にまとめており、ここでは *śāstra* という語の意味として 1. 「何らかの教示一般」、2. 「文法学や六派哲学等の教え」、3. 「特定の作品」、4. 「パーニニの文法規則」の四つが触れられている。Cardona [1997: 572–573] が触れておらず、かつ〈論書〉（*śāstra*）について比較的詳しく述べられている文献として、ラージャシェーカラの *Kāvyamīmāṃsā* がある。彼によればこの世の中で「言葉より成るもの」(*vāṇmaya*) には〈論書〉（*śāstra*）と〈美文〉（*kāvya*）の二種がある。そして彼は、〈美文〉は〈論書〉を前提とするから〈美文〉の探求に入る前にまず〈論書〉について考察すべきとして (KM [2.16–17]: *iha hi vāṇmayam ubhayathā śāstram kāvyam ca / śāstrapūrvakatvāt kāvyānām pūrvam śāstreṣv abhinivīseta*)、かなりの紙幅を割いて〈論書〉を細かく分類している (KM 2.18–5.8)。ここにその全てを列挙して一つずつ吟味する作業は煩雑を極めるので省略するが、彼の説明によれば、文法学や詩学等といった、何らかの特定の事柄に関して教示を与える学問体系及びその内容を記述した書物（教科書）が *śāstra* と呼ばれると理解して問題ないであろう。

¹⁴⁸ *kāvyaśāstra* の作品例として、ボージャは *Bhaṭṭikāvya* に加えてヴィシャーカダッタ（Viśākhadatta, 4 世紀末から 5 世紀初頭）作の政治劇 *Mudrārākṣasa* を挙げている。*Mudrārākṣasa* は全七幕からなる完全なる政治劇、陰謀劇であり、ここに、古典サンスクリット文学中では必ずと言っていいほど扱われる恋愛要素は見受けられない。従って、恋愛と政治の絡み合い等は見られず、政治外交の手段や教訓を重視、教示する内容となっている。ただし、同作品は直接的に政治的内容を描く事により実利 (*artha*) や政治 (*nīti*) に関わる事柄を教示するから、その教示の仕方は *Bhaṭṭikāvya* や *Rāvanārjunīya* が文法学や詩学を教示する仕方とは異なる。なお、*Mudrārākṣasa* については大地原 [1991] による詳細な解題があり、同作品の内容や性格については辻 [1973: 34–38] も参照せよ。また、ボージャが *Śṛṅgāraprakāśa* 中で *kāvyaśāstra* の範疇に入れている他の作品については Raghavan [1978: 795.26–37] を見よ。

ているならば、両者を兼ね備える詩人は両者 (<論書>の詩人と <美文>の詩人) より優れている。従って、<論書>の詩人と <美文>の詩人はまさに同等の力を有する。そして、<論書>の詩人と <美文>の詩人の間には相互に扶助関係があることを我々は認める。何故なら、<論書>による仕上げ (洗練) は <美文>を扶助するが、<論書>だけに偏ることは [<美文>を] 妨げ、<美文>による仕上げ (洗練) も <論書>の文の成熟に貢献するが、<美文>だけに偏ることは [<論書>を] 妨げるからである。そのうち、<論書>の詩人は三種である。<論書>を創作する者、<論書>の中に <美文>を配置する者、そして、<美文>の中に <論書>の事柄を取り入れる者である¹⁴⁹。

ラージャシェーカーによれば、詩人には「<論書>の詩人」(śāstrakavi)、「<美文>の詩人」(kāvyakavi)、「両者を兼ね備える詩人」(ubhayakavi)の三種がおり、そのうち「<論書>の詩人」には「<論書>を創作する者」(yaḥ śāstram vidhatte)、「<論書>の中に <美文>を配置する者」(yaś ca śāstre kāvyam samvidhatte)、「<美文>の中に <論書>の事柄を取り入れる者」(yo 'pi kāvyē śāstrārtham nidhatte)の三種がいる。ここで、ボージャの「偉大な詩人達が <論書>の扱う事柄を一体化させている <美文>」(yatrārthāś śāstrāṇām kāvyē 'bhiniveśyate mahākavibhiḥ) という <美文論書>(kāvyāśāstra) に対する説明を考慮するならば、Raghavan [1978: 607.38-608.1] も指摘するように、「<美文>の中に <論書>の事柄を取り入れる者」の作品が kāvyāśāstra に対応し、必然的に「<論書>の中に <美文>を配置する者」の作品が śāstrakāvya に対応すると考えることが出来る。従って、このラージャシェーカーの説明を考慮に入れれば、所々 <美文>(kāvyā)の要素が見受けられる <論書>(śāstra) が śāstrakāvya と呼ばれ¹⁵⁰、<論書>の内容が取り入れられている <美文>が kāvyāśāstra と呼ばれることになる¹⁵¹。śāstrakāvya とはあくまで <論書>(śāstra) のことであり、kāvyāśāstra はあくまで <美文>(kāvyā)なのである。

4.2.3 クシェーメンドラ

次に、多方面に数多くの著作を残した中世カシュミールの作家クシェーメンドラが著した韻律学書 *Suṅṅatīlaka* 中の記述に触れておく。クシェーメンドラは kāvyā、śāstra、śāstrakāvya、kāvyāśāstra についてそれぞれ次のように述べている。

[その] 差異に基づき、śāstra、kāvyā、śāstrakāvya、kāvyāśāstra という言論の四種の広がりや賢者達は認める。あらゆる箇所で kāvyā の要素を特徴として持つものが śāstra であり、卓越した語と意味の繋がりという美しい装飾を備えたものが kāvyā であると

¹⁴⁹ KM (17.5-17): pratibhāvuyutpattimāṃś ca kavīḥ kavir ity ucyate / sa ca tridhā / śāstrakaviḥ kāvyakavir ubhayakaviś ca /...ubhayakavis tūbhayor api varīyān yady ubhayatra paraṃ pravṛṇaḥ syāt / tasmāt tulyaprabhāvā eva śāstrakāvya-kavī / upakāryopakārahāvāṃ tu mithaḥ śāstrakāvya-kavyor anumanyāmahe / yac chāstrasamkārah kāvyam anugrṇāti śāstraikapraṇatā tu nigrṇāti / kāvyasamkāro 'pi śāstravākyapākam anuruṇadhi kāvyāikapraṇatā tu viruṇadhi / tatra tridhā śāstrakaviḥ / yaḥ śāstram vidhatte yaś ca śāstre kāvyam samvidhatte yo 'pi kāvyē śāstrārtham nidhatte / (下線は筆者による)

¹⁵⁰ ボージャも śāstrakāvya を <論書>(śāstra) と定義する。Śṛṅgāraprakāśa (727.13-14): śāstram yatra kavīnām rahasyam upakalpayanty analpadhiyaḥ / tad rativilāsakāmandakīyavac chāstrakāvyaṃ tu // (「一方、知性豊かな人々が詩人達の秘訣を取り入れている <論書>は、Rativilāsa や Kāmandakīya[nūṭisāra] と同様、śāstrakāvya である」) ここでボージャは śāstrakāvya の例として、カーマングカ (Kāmandaka, 7世紀から9世紀頃) の Kāmandakīyanūṭisāra と現存しない Rativilāsa を挙げているが、前者は実利 (artha) や政治 (nīti) について、後者は性愛 (kāma) について、<美文>(kāvyā) の体裁をとって論じた <論書>(śāstra) であり、その意味で両作品は śāstrakāvya と呼ばれる。この両作品については Raghavan [1978: 607.29-37, 796.19-797.8] 及び上村 [1992: 4-5, 255-275] を参照せよ。

¹⁵¹ Lienhard [1984: 225.20-30] が与える 'kāvyāśāstra' と 'śāstrakāvya' の説明はこれとは逆になっている。

kāvyaを知る者達は言う。śāstrakāvyaは人生の四目的に富み、全ての人に教示を与える。〔一方、〕バツティのkāvyaやバウマカのkāvya等はkāvyasāstraと言われる¹⁵²。

ここでクシェーメンドラは言葉より成る作品をśāstra、kāvyā、śāstrakāvya、kāvyasāstraの四種類に分け、そのうち、śāstra、kāvyā、śāstrakāvyaそれぞれを順番に定義しているが¹⁵³、残念ながら肝心のkāvyasāstraについては作品例を挙げるのみで、その説明を与えてくれない。ラージャシェーカラはクシェーメンドラに多大な影響を与えたとされるから¹⁵⁴、クシェーメンドラはkāvyasāstraという用語を使用する際に、ラージャシェーカラの「〈美文〉(kāvyā)の中に〈論書〉(śāstra)の事柄を取り入れる者」という詩人の定義を念頭に置いているかもしれないが、憶測の域を出ない。しかし、ここでクシェーメンドラがkāvyasāstraの例としてバツティとバウマカの作品を挙げ、ボージャと同様それを〈美文〉(kāvyā)であると明言している点は注目に値する¹⁵⁵。

4.3 kāvyasāstraの複合語解釈

各詩論家の説明それ自体に関してはまだ議論の余地があるが、少なくとも彼らが〈美文論書〉(kāvyasāstra)を〈美文〉(kāvyā)と見なしていることは以上の考察より明らかであろう。最後に、そのことを踏まえた上でkāvyasāstraという複合語の解釈可能性を探る。

上に見た三文献ではkāvyasāstraという複合語の分析文は提示されていないが、kāvyasāstraはあくまで〈美文〉(kāvyā)であり、その複合語において〈美文〉の方が主要素である点を考慮すれば、次のような分析文を想定することが出来る。

- kāvyam śāstram iva (「〈論書〉の如き〈美文〉」)

サンスクリット百科事典 *Vācaspatya* でも kāvyasāstra という語に対して同様の分析文が提示されているが¹⁵⁶、*Vācaspatya* 中でも述べられているように、この場合〈美文〉が持つ〈論書〉との共通属性は当然「教示を与えること」(upadeśakatva)である¹⁵⁷。そしてこの解釈の場合、kāvyasāstra という複合語は次の規則によって説明可能である。

A 2.1.56 upamitam vyāghrādibhiḥ sāmānyāprayoge // 「共通属性を示す語が使用されていない場合、比喩対象を表示する名詞接辞で終わる項目は、意味的繋がりがあり、vyāghra

¹⁵² *Suṃṛttatilaka* 3.2-4: śāstram kāvyam śāstrakāvyaṃ kāvyasāstram ca bhedataḥ / caṣṣprākārah prasaraḥ satām sārvasva-to mataḥ // śāstram kāvyavidah prāhuḥ sarvakāvyaṅgalakṣaṇam / kāvyam viśiṣṭasabdārthasāhityasadalanḥkṛti // śāstrakāvyaṃ caturvargaprāyaṃ sarvopadeśakṛt / bhāṭṭibhaumakakāvyaḍi kāvyasāstram pracakṣate //

¹⁵³ クシェーメンドラが与える kāvyā の定義は他の詩論家達が与えるものと内容が合致するが、śāstra 及び śāstrakāvya を彼が具体的にどのようなものと捉えていたかを当該の詩節だけから判断するのは困難である。彼の考えを明らかにするためには、*Kavikaṇṭhābarāṇa* や *Aucityavicāracarā* といった彼が著した他の詩学書中の記述も含めて検討する必要があるので、当該詩節の内容について本稿では立ち入らない。

¹⁵⁴ 上村 [1999: 186.5-8] 及び山崎 [2012] 参照。

¹⁵⁵ Lienhard [1984: 226.11-12] はバウマカの *Rāvanārjunīya* を何故か śāstrakāvya として分類し、当該のクシェーメンドラの詩節をその根拠として挙げているが (Lienhard [1984: 11-12]: “The theme of this long poem, rightly classified as a śāstrakāvya by Kṣemendra”), クシェーメンドラによればバウマカの作品は kāvyasāstra であり śāstrakāvya ではない。

¹⁵⁶ *Vācaspatya* (2029.8-11): kāvyam śāstram iva upadeśakatvāt / kāvyarūpe śāstre kāntāsammitatayopadeśayuje iti kāvyaprakāśe tasya upadeśayogitvokteḥ hitasāsakaśāstratulyatvam // (「[kāvyasāstra とは] 〈論書〉の如き〈美文〉という意味である。[〈美文〉は] 教示を与えるものであるから。〈美文〉の形をとった〈論書〉に関して、『[〈美文〉は] 愛しい女の如きものとして教示との結合をもたらす』というように、それ(〈美文〉)が教示と結びつくことが *Kāvya prakāśa* 中で述べられているから、それ(〈美文〉)は有益なものを教示する〈論書〉に等しいのである」)

¹⁵⁷ ラージャシェーカラも次のように述べている。KM (4.4-5): gadyapadyamayavāt kavidharmatvāt hitopadeśakatvāc tad dhi śāstrāny anudhāvati / (「散文と韻文からなり、詩人の規範であり、有益なものを教示するものであるから、実にそれ(〈美文〉)は〈論書〉に準ずるのである」)

「虎」群に含まれる、比喩基準を表示する項目と任意に複合語を形成し、その複合語は tatpuruṣa と呼ばれる」¹⁵⁸

この規則は、共通属性 (sāmānya、ここでは「教示を与えること」) を表示する語が使用されていない場合、比喩対象 (upamita) を表示する項目 (ここでは kāvya という語) が、vyāghra (「虎」) 群に含まれる、比喩基準 (upamāna) を表示する項目 (ここでは śāstra という語) と任意に複合語を形成することを規定している¹⁵⁹。A 2.1.56 中で、比喩対象を意味する upamita という語は第一格名詞接辞によって指示されているから、それは A 1.2.43 prathamānirdiṣṭaṃ samāsa upasarjanam により upasarjana という術語を与えられ¹⁶⁰、upasarjana と呼ばれる項目は A 2.2.30 upasarjanam pūrvam により複合語の先行要素となる¹⁶¹。かくして、比喩対象を表示する kāvya という語が複合語の先行要素となり、kāvyasāstra という複合語が形成される。

このように A 2.1.56 に依拠して kāvyasāstra という複合語を解釈する場合、比喩対象 (即ち限定対象) である〈美文〉(kāvya) が複合語の主要素となり¹⁶²、作品中に〈論書〉(śāstra) の事柄を取り入れることで、何らかの事柄に関して〈論書〉の如く教示を与える〈美文〉が〈美文論書〉(kāvyasāstra) と呼ばれることになる。ただし、ここで注意しなければならないのは、そもそも〈美文〉とは特に性愛 (kāma)、実利 (artha)、法 (dharma)、解脱 (mokṣa) という人生の四目的 (caturvarga) に関して或る種の教示を与えるものであり¹⁶³、この意味で〈美文〉はもともと〈論書〉としての性格も持っているということである¹⁶⁴。Bhaṭṭikāvya も、Rāmāyaṇa を題材に英雄ラーマの誉れ高い振る舞いを描く事で「人はラーマ等のように振る舞うべきであり、ラーヴァナ等のように振る舞うべきではない」等ということを読者 (聞き手) に教示する¹⁶⁵。従って、単に何らか

¹⁵⁸ この規則の代表的な適用例は puruṣavyāghra (「虎の如き人」) や puruṣasiṃha (「獅子の如き人」) である (KV on A 2.1.56)。

¹⁵⁹ vyāghra (「虎」) 群の中に śāstra という語は含まれていないが、当該の語群は ākṛtigaṇa なので問題は無い (KV on A 2.1.56: ākṛtigaṇas cāyam)。

¹⁶⁰ A 1.2.43 prathamānirdiṣṭaṃ samāsa upasarjanam // (「複合語形成規則中で第一格名詞接辞によって指示される項目は、upasarjana と呼ばれる」)

¹⁶¹ A 2.2.30 upasarjanam pūrvam // (「upasarjana と呼ばれる項目は複合語の先行要素となる」)

¹⁶² KV on A 2.1.56: viśeṣaṇam viśeṣyeṇa bahulam iti paranipāte prāpte viśeṣyasya pūrvanipātārtha ārambhaḥ // (「viśeṣaṇam viśeṣyeṇa bahulam (A 2.1.57) に基づいて、限定対象 [を表示する語] が [複合語の] 後続要素となることが結果する時、限定対象 [を表示する語] が [複合語の] 先行要素となることを目的として [当該規則が] 定式化されている」)

¹⁶³ SD 1.2: caturvargaphalaprāptiḥ sukhād alpādhiyam api / kāvyād eva yatas tena tatsvartūpaṃ nirūpyate / (「知性の乏しい者でさえ他ならぬ〈美文〉から四目的の果報を楽に獲得する。従って、それ (〈美文〉) の本質が探求される」) 古くはダンディンが、〈美文〉が四目的の果報をもたらすものであることを述べている (KĀ 1.15c: caturvargaphalopetam)

¹⁶⁴ しかし、〈美文〉による教示は〈論書〉のそれのように堅苦しいものではなく、魅力溢れる仕方ではなされる。マンマタは次のように述べる。KP 1.2: kāvyam yaśase 'rthakṛte vyavahāravide śivetakṣataye / sadyaḥparanirvṛtaye kāntāsammītatayopadeśayuje // (「〈美文〉は、名声、富の産出、正しい振る舞いの理解、不吉なもの除去、即時の最上の歓喜、そして愛しい女の如きものとして教示との結合をもたらす」)

また例えば、アシュヴァゴーシャが Saundarananda 18.63–64 において、「苦い薬も蜜が混ざっていれば飲む事が出来るように、人々を困難な解脱の道へと歩み出させる為に〈美文〉の体裁をとって作品を著した」という趣旨のことを述べていることは周知であり (4.4 を見よ)、パーマハの Kāvyaśāstra (4.4 を見よ) やクシェーメンドラの Suvṛttailaka、さらにはヴィシュヴァナータ (Viśvanātha, 14 世紀) の Sāhityadarpaṇa にも同趣旨の記述が見られる。〈論書〉の事柄を魅力ある仕方で優しく教示することが〈美文〉の一つの役目なのである。Suvṛttailaka 3.5: tatra kevalasāstre 'pi kecit kāvyam prayujate / tiktaśadharasodvege guḍaleśam ivopari // (「そ (kāvya, śāstra, śāstrakāvya, kāvyasāstra) の内、或る人達は単なる〈論書〉にも〈美文〉[体]を使用する。人が苦い薬の味を中和するために少量の糖蜜を使用するように」) SD (5.5–8): nanu tarhi pariṇatābuddhibhiḥ satsu vedaśāstreṣu kimiti kāvye yatnaḥ karaṇīya itī api na vaktavyam / kaṭukaśadhropāśamanīyasya rogasya sitaśarkaropāśamanīyatve kasya vā rogiṇaḥ sitaśarkarāpravrṛtiḥ sādhiyāsi na syāt // (「【反論】そのような場合、諸々のヴェーダ聖典があるにもかかわらず、どうして完全な知性を備えた者達が〈美文〉に対して努力せねばならないのか。【答】このようにも言ってはならない。苦い薬によって鎮められるべき病気が砂糖によって鎮められ得る場合、一体如何なる病人の砂糖 [獲得] への活動がより優れたものでないことがあるか」) 〈美文〉が〈論書〉でもあり得る点については Raghavan [1978: 3–8] も参照せよ。

¹⁶⁵ KP (10.2–4): ...yat kāvyam lokottaravarṇanānipuṇakavikarma tat kānteva sarasatāpādanenābhimukhikṛtya rāmādivad vartitavyam na rāvaṇādivad ity upadeśam ca yathāyogaṃ kaveḥ sahrdayasya ca karotīti sarvathā tatra yatanīyam // (「... 超

の教示を与えるという意味だけで〈美文論書〉(kāvyasāstra) という用語を理解してしまうと、凡そ全ての〈美文〉にこの用語が当てはまることになってしまう。それ故、kāvyasāstra という複合語を‘kāvyam śāstram iva’ (‘〈論書〉の如き〈美文〉’) と分析し、両者の共通点を「教示を与えること」と考える場合、その用語は、一般的な〈美文〉よりも〈論書〉としての側面が強く、その性格を色濃く持つ特定の作品を指示すると考える必要があるだろう。このことは、ボージャが〈美文論書〉(kāvyasāstra) を定義する際に使用する‘abhiniveśyate’ (‘入り込ませる、一体化させる’) という語が持つニュアンスからも示唆される¹⁶⁶。

kāvyasāstra という用語の概念を明らかにするには、ボージャやクシェーメンドラが言及する śāstrakāvya との関係性を考慮した考察が必要不可欠なので、本稿ではこれ以上立ち入らず、その詳細は稿を改めて論じることにしたい。その複合語分析に関しても、上記の解釈の他に vibhaktitapurūṣa や rūpakasamāsa あるいは madhyamapadalopisamāsa 等、様々な解釈が可能であろう¹⁶⁷。しかし、1. kāvyasāstra という複合語において〈美文〉(kāvyā) と〈論書〉(śāstra) の同一性は含意されず、それはあくまで〈美文〉であり、〈美文〉の方に主要性がある点、2. 〈美文〉が元来〈論書〉との共通性を持っている点、3. 上記の解釈ならば kāvyasāstra と śāstrakāvya に同パターンの分析文を想定

世間的な事柄の描写に巧みな詩人達の所産である〈美文〉は、愛しい女のように、ラサ(情緒/愛)を生み出す事で[読者の]顔を向けさせて、『ラーマ等のように振る舞うべきであり、ラーヴァナ等のように振る舞うべきではない』という教示を詩人と鑑賞者に適切に与える。従って、何としてでもそれ(〈美文〉)に向けて努力すべきである」

¹⁶⁶ upasarga に先行される動詞語根 vis が持つニュアンス及びその用例については Hara [1979] を見よ。

¹⁶⁷ この他、A 2.1.57 viśeṣaṇam viśeṣyeṇa bahulam (「限定要素を表示する名詞接辞で終わる項目は、意味的繋がりがあり、同一対象を指示し、限定対象を表示する名詞接辞で終わる項目と多様に複合語を形成し、その複合語は tatpuruṣa 及び karmadhāraya と呼ばれる」) に依拠して、kāvyasāstra という複合語を‘kāvyam iti śāstram’ (‘〈美文〉という〈論書〉、〈美文〉と呼ばれる〈論書〉’) と分析することも可能である(この種の分析文については MD 69 や MD 103 に対するマツリナータ注 *Samjivini* を参照)。しかしこの場合、A 2.1.57 の適用例として度々文法家達が取り上げる śiṃśapāvṛkṣa (シンシャパー樹という樹) や MD 69 に見られる nīvībandha (「衣の結び目という結び目」) 等と同様、kāvyasāstra という複合語中で kāvyā という語は限定要素(viśeṣaṇa)を表示し、śāstra という語は限定対象(viśeṣya)を表示することになるから、前者ではなく後者が複合語の主要素とならざるを得ない。これは kāvyasāstra をあくまで〈美文〉とする詩論家達の言葉と矛盾するため、その限りでこの複合語分析は受け入れられない。

この種の複合語中で前者が限定要素、後者が限定対象となる理屈は次の通りである。「シンシャパー樹という樹」(śiṃśapāvṛkṣa) において、「樹」(vṛkṣa) と「シンシャパー樹」(śiṃśapā) は一般と特殊の関係(sāmānyaviśeṣabhāva)にあり、「特殊」である「シンシャパー樹」が、それを内包する(vyāpaka)「樹」をより狭義のものに限定(viśeṣaṇa)している。このように考えることで、「シンシャパー樹という樹」や「衣の結び目という結び目」という表現に付随する同義語反復(paunaruktya)の問題を回避することが出来る。ここで śiṃśpā と vṛkṣa の両語は、「シンシャパー樹」という限定要素と「樹」という限定対象をそれぞれ表示し、かつそれらは同一対象を指示しているから、A 2.1.57 により両語の複合語が形成される。そして A 2.1.57 では viśeṣaṇa という語が第一格名詞接辞によって指示されているから、限定要素を表示する śiṃśapā という語が複合語の先行要素となり、vṛkṣaśiṃśapā ではなく śiṃśapāvṛkṣa という複合語の語順(prayoganiyama)が確立される。カイヤタ(Kaiyata, 11世紀早期)は以上の点を端的にまとめている。*Pradīpa* on MBh to A 2.1.57 (I.399.25–26): ayam bhāvaḥ—yadā prathamata eva viśeṣa upakramyate śiṃśapeti tadā vṛkṣaviśeṣasyaiva prakrāntatvād viśeṣasya ca sāmānyāvyaḥcarād vṛkṣaśabdasya naiva prayogeṇa bhāvyaḥ / yadā tu prathamam sāmānyam upakramyate vṛkṣa iti tadā tadviśeṣaṇāya śiṃśapāśabda upādīyamāno viśeṣaṇam eva bhavati śiṃśapāvṛkṣa ity eva bhāvyaḥ / atra kecid āhuḥ—śiṃśapāyā api phalavyavacchedāyopādīyamāno vṛkṣaḥ kimiti viśeṣaṇam na bhavati / tatas ca bhavitavyam vṛkṣaśiṃśapety apiti / tad ayuktam / vṛkṣatvasya vyāpakatvān mahāviśayatvād dūrāt prathamatas tasyaivopalambhād viśeṣyatvam eva / śiṃśapātvaḥ tu khalv aviśayatvāt paścād (pañcād を修正) grahaṇāc ca śuklādiguṇakalpatvād viśeṣaṇam eveti nāsti prayogasyāniyamah // (「次のことが意図されている。śiṃśapā (「シンシャパー樹」) という語によってまず最初に『特殊』がもたらされる場合、まさに特定の樹のことが意図されているから、そして『特殊』は『一般』を逸脱しないから、[これに加えて] vṛkṣa という語を使用する必要は全く無い。しかし、vṛkṣa (「樹」) という語によって最初に『一般』がもたらされる場合、それ(『一般』である樹)を限定するために śiṃśapā という語が獲得されるならば、それはまさに『樹』の限定要素となる。従って、[vṛkṣaśiṃśapā ではなく] śiṃśapāvṛkṣa という語だけが[使用され]得る。このことについて或る者達は次のように述べている。【問】[śiṃśapā という語が意味し得る]『果実』[という意味]を排除するために vṛkṣa [という語]が獲得されるならば、どうしてそれが śiṃśapā [という語]に対しても限定要素とならなことがあろうか。そしてそれ故 vṛkṣaśiṃśapā という語も[使用され]得る。【答】それは正しくない。遠くから[見た時]は最初にそれ(樹性)だけが認識されるから[その意味の]領域は大きく、遍充者であるから、樹性は限定対象にしか成り得ない。一方、実に、[樹性を認識した]後に理解されるから[その意味の]領域は狭く、そして『白さ』等の属性に等しいから、シンシャパー性は限定要素にしか成り得ない。従って[複合語中の]語順は自由ではない)以上の議論については Joshi and Roodbergen [1971: 147–151] も参照せよ。

することが出来る点、これらの点を考慮すれば、今のところ上述の複合語分析が最も妥当であると考える。

4.4 〈美文〉における詩的欠陥

以上のように、インド詩学の観点からは、Bhaṭṭikāvya や Rāvaṇārjunīya はあくまで〈美文〉と見なされる。従って、文法規則の例証を主眼とする作品といえども、それが言葉の最高芸術である〈美文〉の形式をとって〈美文〉として著される以上、そこに作品を損なう詩的欠陥は絶対に見出されてはならない。初期の詩論家であるバーマハ (Bhāmaha, 7世紀) やダンディン (Daṇḍin, 8世紀) は次のように明言している。

欠陥を有する語はどんな仕方であれ一語たりとも述べてはならない。悪い息子によって [その父が] 非難されるように、[詩人は] 条件を満たしていない〈美文〉によって非難されるから。詩人でないことが悪や病気や刑罰をもたらすわけではない。しかし、悪しき詩人であることは直接死と結びつく賢者達は述べている¹⁶⁸。

正しく使用された言葉は望みを叶える雌牛であると、賢者達は伝えている¹⁶⁹。一方、誤って使用された同じそれ (言葉) は、言語使用者の雄牛性 (愚かさ) を示す¹⁷⁰。それ故、どんな仕方であっても〈美文〉においては僅かな汚点すら見過ごしてはならない。美しい体もたった一つの皮膚病の染みによって不吉なものになってしまう¹⁷¹。

このように、〈美文〉には一分の汚点も決して許されないのである。識者の鑑賞に堪え得る比類無き〈美文〉を創作し、他の詩人を凌いで王侯貴族の庇護を確保するため¹⁷²、詩人達は様々な面から作品に工夫・仕掛けを施した¹⁷³。このような中、バツティやバウマカがその作品に凝らした最大の技巧は「既存の物語を描写しながら文法規則及び修辞等を例証すること」であるが、〈美文〉として作品を著す以上、もし自身の作品に欠陥が見出されれば、それは詩人にとって致命的である。

¹⁶⁸ KA 1.11-12: sarvathā padam apy ekaṃ na nigādyam avadyavat / vilakṣmaṇā hi kāvyena duḥsuteneva nindyate // akavitvam adharmāya vyādhaye daṇḍanāya vā / kukavitvam punaḥ sāksānmr̥tim āhur maṇiṣiṇaḥ //

¹⁶⁹ このダンディンの言葉は次のバタンジャリの言明を下敷きにしていられる。MBh on Vt. 5 to A 6.1.84 (III.58.14-15): ekaḥ śabdāḥ samyagjñātaḥ sāstrānvitāḥ suprayuktaḥ svarge loke kāmādhug bhavati // (「たった一つの言葉でも、それが正しいものとして知られ、文法学に従い、正しく使用されるならば、天界で望みを叶える牛となる」)

¹⁷⁰ バタンジャリは文法学の目的を論じる中で、言葉の正しい使用と誤った使用について述べる次のような詩節を引用している。MBh (Paspasāhnikā, I.12.16-17): yas tu prayunkte kuśalo viśeṣe śabdān yathāvad vyavahārakāle / so 'nantam āpnoti jayaṃ paratra vāgyogavid duṣyati cāpaśabdaiḥ // (「そして、言語活動時 (祭式時) に諸語を特定の [意味] で正しく使用する智者は、言語の使用法を知る者であるから、他界において永遠の勝利をおさめる。しかし [その人も言語の使用法を知らない人も] 誤った語形を用いれば汚れてしまう」)

¹⁷¹ KĀ 1.6-7: gaur gauḥ kāmāduḥgā samyakprayuktā smaryate budhaiḥ / duṣprayuktā punar gotvaṃ prayoktuḥ saiva śamsati / tad alpam api nopekṣyaṃ kāvyē duṣṭaṃ kathaṃcana / syād vapuḥ sundaram api śvitreṇaikena durbhagam //

¹⁷² ラージュシェーカラは王と詩人の関係について述べられた次のような詩節を引用している。KM (27.9-12): khyātā narādhipatayaḥ kavisaṃśrayeṇa rājāśrayeṇa ca gatāḥ kavayaḥ prasiddhim / rājñā samo 'sti na kaveḥ paramopakārī rājño na cāsti kavinaḥ sadṛśaḥ sahāyaḥ // (「諸王は詩人に依拠して有名になる。そして詩人達は王を拠り所として名声に達する。詩人には最高の恩人で王に等しい者はいない。そして王には詩人に等しい仲間はいない」)

なお、言葉の芸術である〈美文〉が備えるべき要件とそれによる果報をボージャは次のようにまとめている。Sarasvatikaṇṭhābharana 1.2: nirdoṣaṃ guṇavat kāvyam alaṅkārair alaṅkṛtam / rasānvitam kaviḥ kurvan kīrtiṃ prītiṃ ca vindati // (「詩的欠陥が無く、詩的美質に満ち、修辞に飾られ、ラサを備えた〈美文〉を創る時、詩人は名声と歓喜を得る」) このボージャの言葉は、次のバーマハの言明を下敷きにしていられる。KA 1.2: dharmārthakāmamokṣeṣu vaicakṣaṇyaṃ kalāsu ca / prītiṃ karoti kīrtiṃ ca sādhu kāvyānibandhanam // (「卓越した〈美文〉の創作は、法・実利・性愛・解脱及び諸技芸への精通と、歓喜及び名声をもたらす」)

¹⁷³ インドの詩人達が生きた時代の背景や彼らの特徴及び古典サンسكريット文学の特殊点については辻[1974b: 122-124]に要領よくまとめられている。

また、バツティとかなり近い時代に生きたと考えられるバーマハは〈美文〉(kāvyā)と〈論書〉(śāstra)に関して興味深い言葉を述べている。

美味なる〈美文〉の汁(ラサ)が混ざっていれば、人は〈論書〉すら享受する。最初に蜜を舐めておけば、人は苦い菓を飲むものである¹⁷⁴。

バツティとバーマハの時代の近接性やその影響関係を考慮すれば¹⁷⁵、当時その用語はまだ確立されていなかったとしても、この言葉はまさに美文論書 *Bhāṭṭikāvya* が持つ性格と目的の一側面を端的に言い表したものとと言えるだろう。「魅力溢れる〈美文〉を使って難解な事柄を教示する」という考えの萌芽は、既にアシュヴァゴーシャ (Aśvaghoṣa, 2世紀頃) の *Saundarananda* に見られる¹⁷⁶。彼は *Saundarananda* という作品を〈美文〉の形式で著した理由を次のように語る。

以上のように解脱という主題を内に含むこの作品は、[解脱]以外のものに心を向けている聞き手達を捉えるために〈美文〉を装って著されたのであり、寂靜をもたらすものであって快樂をもたらすものではない。何故なら、「どうすれば[聞き手達の]心を捉えるものになるだろうか」と考えて、私はここ(作品中)で解脱とは異なることを〈美文〉の規範に従って描いたのであるから。[人が]苦い菓を飲むために[それに]蜜を混ぜるように。概して人々が感官対象に起因する快樂を追い求めて解脱から離れているのを目にし、「解脱が最上なるものである」と考えて、ここ(作品中)で私は[その]真実を〈美文〉を装って語った。そのこと(〈美文〉の装いで解脱について語られていること)を知り、寂靜に関するものをここ(作品)から注意深く理解すべきであって、娯楽的なものを理解してはならない。鉢物から生じる塵を抑えられた(取り除かれた)黄金[だけ]が有益なものなのだから¹⁷⁷。

「聞き手を引きつけることが出来る〈美文〉体を使って解脱について教示する」という構造は、「〈美文〉体を使った文法学や詩学の教示、言い換えれば言語使用の教示」を企図したと考えられる *Bhāṭṭikāvya* やその模倣作品 *Rāvaṇārjunīya* の構造に酷似している。文法規則を例証しつつも、読者を引きつける〈美文〉としての美をも備えてはじめて、〈論書〉の事柄を巧みに教示する〈美文〉である〈美文論書〉としての役割を果たし得るのであり、規則が規定するより多くのパターンを例証し、文法学に関わる事柄をより多く扱おうとも、〈美文〉としての欠陥を備え、その美や流れが損なわれては本末転倒なのである。

5 まとめ

以上の考察から明らかになったことを以下にまとめる。本稿が扱ったのは両作品のほんの一部に過ぎないが、この僅かな諸詩節の中に以下のように多くの特徴を見て取れたことの意味は大きいと考える。

¹⁷⁴ KA 5.3: svādukāvyarasonmiśraṃ śāstram apy upayūñjate / prathamālīḍhamadhavaḥ pibanti kaṭu bheṣajam //

¹⁷⁵ 両者の関係については Diwekar [1929] と大類 [1954a] 及び川村 [2012a: 92-94] を参照せよ。

¹⁷⁶ これに関連して注 164 も参照せよ。

¹⁷⁷ *Saundarananda* 18.63-64: ity eṣā vyupasāntaye na rataye mokṣārthagarbhā kṛtiḥ śrotīṇāṃ grahaṇārtham anyamanasāṃ kāvyopacārāt kṛtā / yan mokṣāt kṛtam anyad atra hi mayā tat kāvyadharmāt kṛtam pātum tiktam ivausadham madhuyutam hr̥dyaṃ katham syāt iti // prāyeṇālokyā lokam viśayaratiparam mokṣāt pratihatam kāvyavyājena tattvam kathitam iha mayā mokṣaḥ param iti / tad buddhvā śāmikam yat tad avahitam ito grāhyam na lalitam pāmsubhyo dhātujebhyo niyatam upakaram cāmikaram iti // この2詩節に注目し、この言明の持つ意味を詩学の観点から考察した論文として本田 [2004] があるので参照されたい。

- RA 3.11–35 では規則と詩節の順番対応が完全に無視されている箇所が見受けられるものの (RA 3.12–13)、基本的に規則順序と詩節の語順は一致しており、規則中の項目の提示順と詩節の語順を一致させようとする意識もはっきりと見て取れる (RA 3.15, RA 3.17–21, RA 3.31–34)。特筆すべきは A 1.4.51 に対して挙げられる śloka-vārttika 中の動詞語根の提示順序までをも考慮して詩節が構成されていることである。規則と語順の一致及び規則中の項目の提示順と語順の一致という原則は両作品で明確に意識されていると言える。サンスクリット詩人達が各語の選択やその配列 (語りの順序) に如何に腐心したかは Lienhard [1984: 5–8] やその分析にならって〈美文〉の新たな紹介モデルを提示した横地 [2008] に具体的に示されおり、そのような詩人達がなす精巧なる言葉の遊戯の様相は辻 [1974b] や長柄 [1984] に報告されているが¹⁷⁸、両作品に見られる上述の原則もインドの詩人達の美意識の高さを良く表している。
- BhK 8.70–84 の表現やその内容は各規則の規定と照らし合わせて何ら矛盾は無く、物語の流れと不調和をきたしている箇所も無い。対して RA 3.11–35 には規則の規定内容にそぐわない表現が見受けられたのに加え、その諸詩節は〈無益な文〉(apārtha)、〈文法学の欠如〉(śabdahīna) あるいは〈不正語〉(asādhu)、〈同義語反復〉(punarukta, ekārtha)、〈無益な語〉(anarthaka) 等の詩的欠陥と見なされ得る要素を多分に含んでいる (例えば RA 3.12, RA 3.15, RA 3.24, RA 3.28, RA 3.32, RA 3.34)。
- RA 3.11–35 では僅か 25 詩節の間に 13 種の韻律が使用されており、これは śloka のみが使用される BhK 8.70–84 と対照的である。バウマカが多く韻律を使用することで自身の能力を示そうとしたことは明らかであるが、計 17 もの箇所で語の途中で中間休止が来てしまっており、そのような詩節は〈休止の乱れた文〉(yatibhraṣṭa) という欠陥を備えたものと見なされる (RA 3.11, RA 3.18–19, RA 3.23–24, RA 3.29, RA 3.31, RA 3.33–35)。
- RA 3.11–35 ではありふれた同一の単語が繰り返して使用され、その指示対象や使用目的がはっきりしない曖昧な代名詞類の使用も異常に多い。この代名詞類の多用こそが RA 3.11–35 の各詩節を不明瞭かつ陳腐なものにしている第一の原因であり、それらが詩節の韻律を整えるためだけに無配慮に使用されていることは明白である。
- BhK 8.70–84 では基本的に一つの規則に対して一つの例が挙げられ、規則が規定する全パターンが例証されることは稀である (これは Bhaṭṭikāvya の他の箇所についても言える)。対して RA 3.11–35 では、A 1.4.41 anupratigraṣā ca (RA 3.22)、A 1.4.47 abhiniviśā ca (RA 3.27)、A 1.4.50 tathāyuktaṃ cānīpsitam (RA 3.29) を除いて、kāraka 術語規則が規定する全パターンが例証され、さらには一つのパターンに対して二つの例が挙げられることもある (RA 3.29–30)。ただし、規則例証に固執し、規則が規定する全パターンを出来る限り例証しようとするあまり、RA 3.11–35 の各詩節は非常に冗長かつ人工的なものとなっている。ここではまさに規則例証のためだけに用意されたかのような不自然な詩節が介在し、物語の流れは所々で中断する (例えば、RA 3.19–21, RA 3.24, RA 3.31–34)。文法規則例証という自ら課した課題を見事に果たしつつも物語は常に軽快に進んでいくことは、Bhaṭṭikāvya の特

¹⁷⁸その他、自身が考案した分析方法を用いて〈美文〉(韻文のもの)の語順に何らかの規則性を見出そうと試みたものとして三井 [1992, 1996] があり、詩節中の比喩表現及び複合語に焦点を当て同様の分析方法を用いて年代による〈美文〉の文体変化を探ろうとしたものとして三井 [1993] がある。その独自の分析方法については賛否が分かれるところであろうが、本研究は〈美文〉の表現を抽象化し記号化することで目に見える具体的な分析データを提示することに成功しており、〈美文〉の文体研究に新たな視座を与え得るものである。

徴として既に先行研究が指摘するところであり、そのことは川村 [2012a] でも実証したが、RA 3.11–35 はこれとは真逆である。

- 各詩論家によれば〈美文論書〉(kāvyasāstra) とはあくまで〈美文〉(kāvyā) である。そして、それが言葉の芸術である〈美文〉である以上、そこにはどんな些細な欠点も見出されてはならない。各規則が規定するパターン of 単純な例証数は BhK 8.70–84 より RA 3.11–35 の方が圧倒的に多いが、そのせいで詩的欠陥と見なされる要素を抱えてしまっただけで元も子もない。

Bhaṭṭikāvya の模倣作品である *Rāvaṇārjunīya* は所詮二番煎じであり¹⁷⁹、前者に比して取り立てて優れた点は見受けられない。唯一あげるとすれば規則が規定するパターンがより多く例証されている点であるが、それに伴ってバウマカは〈美文〉の美を犠牲にし、詩節中に詩的欠陥と見なされ得る要素を多分に抱えることとなった。或る規則中で複数の項目や複数の条件が提示される場合、その全ての組み合わせを例証しようとするれば、各詩節が冗長で不自然なものとなってしまうことは避けられない。そのことはバウマカが身をもって証明してくれた。

バッチィは、文法規則を一つ一つ例証しつつも、それを必要最小限に抑えることでその冗長さを避けて物語を自然に流れさせている。〈美文〉としての美を備えてはじめて、〈論書〉の事柄を巧みに教示する〈美文論書〉としての役割を果たすことが可能となるのであり、欠陥だらけの不自然な作品では聞き手の心を捉えることは出来ない。そのような作品を師が教科書に選ぶはずもない。ここに、物語の流れや〈美文〉の美しさを出来る限り保とうとした *Bhaṭṭikāvya* の〈美文論書〉としての卓越性を見て取ることが出来るだろう¹⁸⁰。

略号及び参考文献

A: Pāṇini's *Aṣṭādhyāyī*. See Appendix III (*Aṣṭādhyāyīsūtrapāṭha*) in Cardona [1997].

AmK: Amarasiṃha's *Amarakośa*. See Dādhimatha [1984].

BhK: Bhaṭṭi's *Bhaṭṭikāvya*. See (1) Bāpata [1887] and (2) Trivedī [1898].

BM: Vāsudevadīkṣita's *Bālamānoraṃā*. See *Caturveda* and Bhāskara [1958–61].

BORI: Bhandarkar Oriental Research Institute, Poona.

BSOAS: Bulletin of the School of Oriental and African Studies, London.

BSPS: Bombay Sanskrit and Prakrit Series.

CIS: Cracow Indological Studies.

CSSO: Chowkhamba Sanskrit Series Office, Varanasi.

DhP: *Dhātupāṭha*. See Katre [1967].

HSS: Haridas Sanskrit Series.

IA: *Indian Antiquary*, Bombay.

IHQ: *Indian Historical Quarterly*, Calcutta.

Jayamaṅgalā: Jayamaṅgala's *Jayamaṅgalā*. See Bāpata [1887].

JBBRAS: *Journal of the Bombay Branch of the Royal Asiatic Society*.

JOIB: *Journal of the Oriental Institute*, Baroda.

JPASBe: *Journal and Proceedings of the Asiatic Society of Bengal*

¹⁷⁹ バーマハは、他者の模倣を控えて自らの力で詩作を行うべきであることを述べている（川村 [2012a: 94, fn. 50] を見よ）。

¹⁸⁰ この意味で、*Rāvaṇārjunīya* が *Bhaṭṭikāvya* ほどの人気を博さなかった理由を前者の各詩節の不自然さ (artificiality) に求めた Trivedī [1898: xi.12–14] の見解は至当である。

- JRAS: *Journal of the Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland*, London.
- KA: Bhāmaha's *Kāvyaḷaṃkāra*. See (1) Trivedī [1909] and (2) Sastry [1970].
- KĀ: Daṇḍin's *Kāvyaḷadarśa*. See Böhlingk [1890].
- KAS: Vāmana's *Kāvyaḷaṃkārasūtra*. See Cappeller [1875].
- KASV: Vāmana's *Kāvyaḷaṃkārasūtravṛtti*. See Cappeller [1875].
- KM: Rājaśekhara's *Kāvyaḷamīmāṃsā*. See Dalal and Sastry [1934].
- KP: Mammaṭa's *Kāvyaḷaprakāśa*. See Karmapkar [1965].
- KV: Jayāditya and Vāmana's *Kāśikāvṛtti*. See Aryendra Sharma, Khanderao Deshpande, D. G. Padhye [1969–1970].
- Mādhavīyadhātuvṛtti*: Sāyaṇa's *Mādhavīyadhātuvṛtti*. See Shastri [1987].
- MBh: Patañjali's *Mahābhāṣya*. See Abhyankar [1962–72].
- MD: Kālidāsa's *Meghadūta*. See Hultzsich [1911].
- NSP: Nirnaya Sagar Press, Bombay.
- Nyāsa*: Jinendrabuddhi's *Nyāsa*. See Miśra [1985].
- Prabhā*: Rangacharya Raddi's *Prabhā*. See Shastri [1970].
- Pradīpa*: Kaiyaṭa's *Pradīpa*. See Vedavrata [1962–63].
- Pratāparudrayaśobhūṣaṇa*: Vidyānātha's *Pratāparudrayaśobhūṣaṇa*. See Trivedī [1909].
- RA: Bhaumaka's *Rāvaṇārjunīya*. See Śivadatta and Parab [1900].
- Raghuvamśa*: Kālidāsa's *Raghuvamśa*. See Nandargikar [1971].
- Samjīvinī*: Mallinātha's *Samjīvinī*. See Nandargikar [1979].
- Sarasvatīkaṇṭhābharāṇa*: Bhoja's *Sarasvatīkaṇṭhābharāṇa*. See Siddhartha [2009].
- Sarvathīnā*: Mallinātha's *Sarvathīnā*. See Trivedī [1898].
- Saundarananda*: Aśvagoṣa's *Saundarananda*. See Johnston [1975].
- SD: Viśvanātha's *Sāhityadarpaṇa*. See Dvivedī [1982].
- SK: Bhaṭṭojidīkṣita's *Siddhāntakaumudī*. See Paṇśīkar [1985].
- Śṛṅgāraprakāśa*: Bhoja's *Śṛṅgāraprakāśa*. See Raghavan [1998].
- Suvṛttatilaka*: Kṣemendra's *Suvṛttatilaka*. See Kāvyaṭūrtha and Śrīduṇḍhirājaśāstri [1933].
- Tattvabodhinī*: Jñānendarasarasvatī's *Tattvabodhinī*. See Paṇśīkar [1985].
- US: *Uṇādisūtra*. See Aufrecht [1859].
- UV: D. T. Tatacharya Siromani's *Udyānavṛtti*. See Siromani [1934].
- Vācaspatya*: Sri Taranatha Tarkavachaspati's *Vācaspatya*. *Vachaspatyam (A Comprehensive Sanskrit Dictionary): Compiled by Sri Taranatha Tarkavachaspati (=The Chowkhamba Sanskrit Series Work 94)*. 6 vols. Varanasi: CSSO, 1970.
- Viśvaprakāśa*: Maheśvara's *Viśvaprakāśa*. See Sthavira and Bhatta [1983].
- Vyākhyāsudhā*: Bhānujīdīkṣita's *Vyākhyāsudhā*. See Dādhimatha [1984].
- Vt.: Kātyāyana's *Vārttika*. See Abhyankar [1962–72].
- ZDMG: *Zeitschrift der deutschen morgenländischen Gesellschaft*, Leipzig, Wiesbaden.
- Abhyankar, Kashinath Vasudev
1962–72 *The Vyākaraṇa-mahābhāṣya of Patañjali (=BSPS 18–22, 28–33)*. 3 vols. Bombay: Government Central Press, 1880–1885. Third Edition, *Revised and Furnished with Additional Readings, References and Select Critical Notes* by K. V. Abhyankar. Poona: BORI, 1962–72.

Anderson, P.

1850 “Some account of the *Bhatti Kāvya*.” *JBBRAS* 3-2: 20–26.

Aryendra Sharma, Khanderao Deshpande, D. G. Padhye

1969–70 *A Commentary on Pāṇini's Grammar. By Vāmana & Jayāditya* (=Sanskrit Academy Series 17, 20). 2 vols. Hyderabad: Sanskrit Academy, 1969–1970.

Asai, Mari (浅井真理)

1996 「インド古典修辞学における押韻 (yamaka) について」『東海佛教』41: 82(39)–70(51).

Aufrecht, Theodor

1859 *Ujvaladatta's Commentary on the Uṇādisūtras: Edited from a Manuscript in the Library of the East India House*. Bonn: Adolph Marcus.

Bāpata, Govinda Shankara Shāstrī

1887 *The Bhattikāvya of Bhatti with the Commentary (Jayamangalā) of Jayamangala*. Bombay: NSP.

Bhaṭṭi

1867 “Bhaṭṭikāvya.” *The Pandit* 1 (supplement): 1–2.

Bhattacharyya, Dinesh Chandra

1942 “Bharata Mallika and his patron.” *IHQ* 15: 168–175.

Biardeau, Madelein

1970 “The story of Arjuna Kārtavīrya without reconstruction.” *Purāṇa: Bulletin of the Purāṇa Department All India Kāśīrāja Trust* 12: 286–303.

Böhtlingk, Otto

1890 *Daṇḍin's Poetik (Kāvjādarṇa): Sanskrit und Deutsch*. Leipzig: Verlag Von H. Haessel.

Brough, John

1981 *Selections from Classical Sanskrit Literature with English Translation and Notes*. London: Luzac, 1951. Second Edition, London: University of London, School of Oriental and African Studies, 1978. Reprint, 1981.

Bühler, Georg

1877 “Detailed report of a tour in search of Sanskrit MSS. Made in Kaśmīr, Rajputana, and Central India.” *JBBRAS* (extra number): 1–90, i–clxxi.

1913 “Indian inscriptions and the kāvya. II. Vatsabhaṭṭi's Praśasti.” (Translated by Prof. V. S. Ghate, M. A., Poona) *IA* 42: 137–148.

Cappeller, Carl

1875 *Vāmana's Lehrbuch der Poetik*. Jena: Verlag von Hermann Dufft.

Cardona, George

1971 “Cause and causal agent: the Pāṇinian view.” *JOIB* 21: 22–40.

1974 “Pāṇini's kārakas: agency, animation, and identity.” *Journal of Indian Philosophy* 2: 231–306.

1980–81 “On the domain of Pāṇini's metarule 1.3.10: yathāsamkhyam anudeśaḥ samānām.” *Adyar Library Bulletin* 44–45: 394–409.

1997 *Pāṇini: His Work and its Traditions. Volume One. Background and Introduction*. Delhi: Motilal Banarsidass, 1988. Second Edition, Revised and Enlarged, 1997.

1999 *Recent Research in Pāṇinian Studies*. Delhi: Motilal Banarsidass.

- Caturveda, Giridhara Śarmā and Parameśvarānanda Śarmā Bhāskara
1958–61 *Śrīmadbhaṭṭojīdīkṣitaviracitā vaiyākaraṇasiddhāntakaumudī śrīmadvāsudevadīkṣita-praṇītayā bālamānoramākhyavyākhyayā śrīmajjñāndrasarasvatīviracitayā tattvabodhinyākhyavyākhyayā ca sanāthitā*. 4 vols. Varanasi: Motilal Banarsidass, 1958–61.
- Chatterjee, Kshitish Chandra
1931 “Vyōṣa.” *IHQ* 7-3–4: 628.
- Dādhimatha, M. M. Paṇḍit Śivadatta
1984 *Nāmalingānuśasana alias Amarakośa of Amarasimha with the Vyākhyāsudhā or Rāmāśramī of Bhānuji Dīkṣita* (=The Brajajivan Prachyabharati Granthamala 1). Revised by Vāsudeva Lakṣmaṇa Paṇaśīkara. Bombay: NSP, 1915. Reprint, Delhi: Chaukhamba Sanskrit Pratishthan, 1984.
- Dalal, C. D. and R. A. Sastry
1934 *Kāvyaṁīmāṁsā of Rājaśekhara*. Baroda: Oriental Institute, 1916. Revised and Enlarged by K. S. Ramaswami Sastri Siromani, 1934.
- Dasgupta, S. N. and Sushuil Kumar De
1947 *A History of Sanskrit Literature: Classical Preriod*. Vol. 1. Calcutta: University of Calcutta.
- De, Sushuil Kumar
1976 *History of Sanskrit Poetics*. Second Edition, Calcutta: Firma K.L. Mukhopadhyay, 1960. Reprint, 1976.
- Deshpande, Madhav M.
1990 “Semantics of kārakas in Pāṇini: an exploration of philosophical and linguistic issues.” In *Sanskrit and Related Studies* (=Sri Garib Dass Oriental Series 84), Edited by Bimal Krishna Matilal & Purusottama Bilimoria, 33–57. Delhi: Sri Satguru Publications.
- Devi, L. Sulochana
1988 “A survey of the grammatical mahākāvya of Kerala.” *Vishveshvaranand Indological Journal* 26: 169–176.
- Diwekar, H. R.
1929 “Bhāmaha, Bhaṭṭi and Dharmakīrti.” *JRAS* 61-4: 825–841.
- Dvivedī, Durgāprasāda
1982 *Sāhityadarpaṇa of Viśvanātha*. Bombay: NSP, 1922. Reprint, New Delhi: Meharchand Lachhmandas.
- Emeneau, M. B.
1967 *A Union List of Printed Indic Texts and Translations in American Libraries* (=American Oriental Series 7). Edited by W. Norman Brown, John K. Shryock, E. A. Speiser. Compiled by M. B. Emeneau. New Haven: American Oriental Society, 1935. Reprint, New York: Kraus Reprint Corporation, 1967.
- Fallon, Oliver
2009 *Bhaṭṭi's Poem: The Death of Rāvaṇa by Bhaṭṭi*. The Clay Sanskrit Library 45. New York: New York University Press and the JJC Foundation.

- Gerow, Edwin
 1977 *Indian Poetics. A History of Indian Literature Volume V, Fasc. 3.* Wiesbaden: Otto Harrassowitz.
- Ghatage, A. M.
 1984 “UKTĀRTHĀNĀM APRAYOGAḤ.” In *Amṛtadhārā: Professor R. N. Dandekar Felicitation Volume*, Edited by S. D. Joshi, 141–151. Delhi: Ajanta Publications.
- Ghosh, Manomohan
 1936 “On the source of the Old-Javanese Rāmāyana Kakawin.” *The Journal of the Greater India Society* 3: 113–117.
- Godabole, Nārāyaṇa Bālakṛishṇa
 1886 *Bhaṭṭi-Kāvya (Illustrating the Perfect.): Edited with Copious Explanatory Notes.* Bombay: NSP.
- Goodall, Dominic and Harunaga Isaacson
 2003 *The Raghupañcikā of Vallabhadeva being the Earliest Commentary on the Raghuvamśa of Kālidāsa, Volume 1. Critical Edition with Introduction and Notes.* Groningen: Egbert Forsten.
- Hanneder, Jürgen
 2011 Review of Fallon [2009]. *ZDMG* 161-2: 509–511.
- Hara, Minoru (原実)
 1979 “Śraddhāviveśa.” *Indologica taurinensia* 7: 261–273.
- Hattori, Mari (服部真理)
 1997 “On the rhyme (*yamaka*) in Sanskrit poetics.” *Annals of the Bhandarkar Oriental Research Institute* 78: 263–274.
 1999 「サンスクリット詩学における文体論—*Kāvyaḷaṅkārasūtravṛtti*の扱う「文学上の欠陥」—」（富士ゼロックス小林節太郎記念基金 小林フェローシップ 1998年度研究助成論文）東京：富士ゼロックス小林節太郎記念基金
- Hoernle, A. F. Rudolf
 1909 “Some problems in ancient Indian history IV.—The identity of Yasodharman and Vikramāditya, and some corollaries.” *JRAS* 41-1: 89–144.
- Honda, Yoshichika (本田義央)
 2004a 「印度仏教における「文学」—『サーウンダラナンダ』の構造を中心に—」『広島大学大学院文学研究科論集』64: 17–26.
 2004b 「Śṛṅgāraprakāśa 研究」広島大学提出学位請求論文（未出版）
- Hooykaas, C.
 1954–55 “Sanskrit kāvya and Old-Javanese Kakawin (new light from the Rāmāyana)”. *JOIB* 4: 143–148.
 1955 *The Old-Javanese Rāmāyana Kakawin with Special Reference to the Problem of Interpolation in Kakawins.* Verhandelingen van het Koninklijk Instituut voor Taal-, Land- en Volkenkunde; Deel XVI. 's-Gravenhage: Nijhoff.
 1957a “On some *arthalaṅkāras* in the *Bhaṭṭikāvya* X.” *BSOAS* 20: 351–363.
 1957b “Love in Lēnkā, an episode of the Old-Javanese Rāmāyana compared with the Sanskrit *Bhaṭṭi-kāvya*.” *Bijdragen tot de Taal-, Land- en Volkenkunde* 113-3: 274–289.

- 1958a “Four-line Yamaka in the old Japanese Rāmāyaṇa.” *JRAS* 90 (1-2): 58–71.
- 1958b “Four-line Yamaka in the old Japanese Rāmāyaṇa.” *JRAS* 90 (3-4): 122–138.
- 1958c “Stylistic figures in the Old-Javanese Rāmāyaṇa Kakawin.” *JOIB* 7: 135–157.
- 1958d “The contents of the Bhaṭṭ-Kāvya”. *JOIB* 8: 132–147.
- 1958e *The Old-Javanese Rāmāyaṇa: An Exemplary Kakawin as to Form and Content*. Verhandelingen der Koninklijke Nederlandse Akademie van Wetenschappen, Afdeling Letterkunde; Nieuwe Reeks, Deel LXV, No. 1. Amsterdam: N. V. Noord-Hollandsche Uitgevers Maatschappij.
- 1958f *The Old-Javanese Rāmāyaṇa: An Introduction to some of its Problems*. Tjetakan lepas dari, Madjalah untuk ilmu bahasa, Ilmu bumi dan kebudayaan Indonesia, Djilid, LXXXVI.
- 1960 “Old Javanese Rāmāyaṇa”. *The Journal of Oriental Research* 30-1: 1–12.
- Hultsch, E.
- 1892 “Valabhī grant of Dhruvasena III. dated Samvat 334.” *Epigraphia Indica* 1: 85–92.
- 1911 *Kālidāsa’s Meghadūta Edited from Manuscripts with the Commentary of Vallabhadeva and Provided with a Complete Sanskrit-English Vocabulary*. London: Royal Asiatic Society, 1911 and Reprinted (New Delhi: Munshiram Manoharlal Publishers, 1998) with a New Foreword and Select Bibliography by Albrecht Wezler.
- 1918a “Zu Aśvaghōsha’s Saundarananda.” *ZDMG* 72: 111–144.
- 1918b “Zu Aśvaghōsha’s Buddhacharita.” *ZDMG* 72: 145–153.
- Iyer, V. Narayana
- 1952 *Dandin’s Kāvyaḍarśa with Commentary of Jeebananda Vidyasagara Bhattacharya and an Introduction and an English Translation*. Madras: Netaji Subhash Chandra Bose Road.
- Jacob, Colanel G. A.
- 1983 *A Handful of Popular Maxims Current in Sanskrit Literature*. Parts I, II & III. Collected by Colanel G. A. Jacob. With a Foreword by Dr. M. D. Balasubrahmanyam. First Printed in Three Parts, 1900–1904. Second Revised Edition, 1907–1911. Reprint, Delhi: Nīrājanā, 1983.
- Jacobi, Hermann
- 1910a “Über die Vakrokti und über das alter Daṇḍin’s.” *ZDMG* 64: 130–139.
- 1910b “Ein zweites wort über die vakrokti und das alter Daṇḍin’s.” *ZDMG* 64: 751–759.
- Jha, Ganganath
- 1928 *Vāmana’s Kāvyaḍaṃkāra-Sūtra-Vṛtti: Translated into English*. “Indian Thought” Series 3–4. Allahabad: Indian Thought, 1912. Second Edition, Revised, Poona: Oriental Book Agency, 1928.
- Johnston, E. H.
- 1975 *The Saundarananda of Aśvaghōṣa: Critically Edited and Translated with Notes*. Lahore, 1928. Reprint, Delhi: Motilal Banarsidass, 1975.

Joshi, S. D. and J. A. F. Roodbergen

- 1971 *Patañjali's Vyākaraṇa-Mahābhāṣya: Karmadhārayāhnikā (P.2.1.51-2.1.72)*, Edited with Translation and Explanatory Notes. Publications of the Centre of Advanced Study in Sanskrit Class C; No. 6. Poona: University of Poona.
- 1975 *Patañjali's Vyākaraṇa-Mahābhāṣya: Kārahnikā (P. 1.4.23-1.4.55)*, Introduction, Translation and Notes. Publications of the Centre of Advanced Study in Sanskrit Class C; No. 10. Poona: University of Poona.
- 1986 *Patañjali's Vyākaraṇa-Mahābhāṣya: Paspasāhnikā, Introduction, Text, Translation and Notes*. Publications of the Centre of Advanced Study in Sanskrit Class C; No. 15. Pune: University of Poona.

Joshi, Vināyak Nārāyaṇ Shāstrī and Wāsudev Laxmaṇa Shāstrī Paṇṣīkar

- 1928 *The Bhaṭṭikāvya of Bhaṭṭi with the Commentary (Jayamangalā) of Jayamangala*. Seventh Edition, Bombay: NSP.

Kale, M. R.

- 1897 *The Bhaṭṭikāvya with the Commentary of Jayamangala: Cantos I–V. Edited with a Literal English Translation, Note (Grammatical, Explanatory and Critical), Instruction and Glossary*. Bombay: The Śāradākṛīdana Press.

Kamimura, Katsuhiko (上村勝彦)

- 1992 『ニーティサーラ 古典インドの政略論』（=東洋文庫 553）東京：平凡社
- 1999 「ラージャシェーカラ作 *Kāvyaṃīmāṃsā* 訳注（第 1 章～第 3 章）」『東洋文化研究所紀要』137: 183–209.
- 2000 「ラージャシェーカラ作 *Kāvyaṃīmāṃsā* 訳注（第 4 章～第 6 章）」『東洋文化研究所紀要』140: 306(169)–265(210).

Kane, P. V.

- 1912a “Outlines of the history of Alamkara literature.” *IA* 41: 124–128.
- 1912b “Outlines of the history of Alamkāra literature.” *IA* 41: 204–208.
1923. *The Sāhityadarpaṇa of Viśvanātha (Paricchedas I–X) with Notes on Paricchedas I, II, X and History of Alankāra Literature*. Bombay: Front Chawl Girgaon Back Road, 1910. Second Edition, Bombay: High Court, 1923.
- 1971 *History of Sanskrit Poetics*. Bombay, 1951. Forth Edition, Delhi: Motilal Banarsidass, 1971.

Karandikar, Maheshwar Anant and Shailaja Karandikar

- 1982 *Bhaṭṭikāvyaṃ: Edited with an English Translation*. Delhi: Motilal Banarsidass.

Karmapkar, Raghunath Damodar

- 1965 *Kāvyaṃprakāśa of Mammaṭa with the Sanskrit Commentary Bālabodhinī by the Late Vamanacharya Ramabhata Jhalakikar*. Revised from the Sixth Edition, Poona: BORI.

Katre, Sumitra Mangesh

- 1967 *Pāṇinian Studies I*. Deccan College Building Centenary and Silver Jubilee Series 52. Poona: Deccan College Postgraduate and Research Institute.

Kāvyaṭīrtha, Nyāyopādhyāya and Paṇḍita Śrīduṇḍhirājaśāstri

- 1933 *Suvṛtta Tilaka by Mahākavi Śrī Kṣemendra* (=HSS 26). Varanasi: CSSO.

Kawamura, Yūto (川村悠人)

- 2011a 「Meghadūta における雲に関する比喩表現」『南アジア古典学』6: 139-164.
2011b 「Meghadūta における反復表現—ヴァッラバデーヴァとマッリナータの解釈—」『哲学』63: 129-141.
2012a 「Bhaṭṭikāvya 8.70-93: Aṣṭādhyāyī 1.4.24-55 と 1.4.84-98 の例証」『比較論理学研究』9: 85-124.
2012b 「Bhaṭṭikāvya 8.94-130: Aṣṭādhyāyī 2.3.2-73 の例証」『南アジア古典学』7: 91-134.
2012c 「Bhaṭṭikāvya 6.87-93: Aṣṭādhyāyī 3.2.1-16 の例証」(第23回西日本インド学仏教学会学術大会 [於九州大学] 配布資料)
2012d 「Bhaṭṭikāvya 6.8-10: Aṣṭādhyāyī 1.4.51 に対する śloka-vārttika 規定の例証」『哲学』64: 139-151.
2012e 「Bhaṭṭikāvya 5.97-100: Aṣṭādhyāyī 3.2.16-23 の例証」『印度学仏教学研究』61-1: 285(234)-281(238).

Keith, A. Berriedale

- 1909 “Vikramāditya and Kālidāsa.” *JRAS* 41-2: 433-439.
1923 *Classical Sanskrit Literature* (=The Heritage of India Series). Calcutta: Association Press (Y.M.C.A.), London: Oxford University Press.
1996 *A History of Sanskrit Literature*. London: Oxford University Press, 1920. First Indian Edition, Delhi: Motilal Banarsidass Publishers Private Limited, 1993. Reprint, 1996.

Kouda, Ryōshū (古宇田亮修)

- 2010 「Bhāmaha 著 Kāvya-lamkāra 『詩の修辭法』第1~2章—テキストならびに訳注—」『長谷川仏教文化研究所年報』34: 190(1)-153(38).
2011 「Bhāmaha 著 Kāvya-lamkāra 『詩の修辭法』第4章—テキストならびに訳注—」『長谷川仏教文化研究所年報』35: 188(13)-171(30).

Krishnamachariar, M., assisted by M. Srinivasachariar

- 1974 *History of Classical Sanskrit Literature: Being an Elaborate Account of All Branches of Classical Sanskrit Literature, with Full Epigraphical and Archaeological Notes and References, an Introduction Dealing with Language, Philology and Chronology and Index of Authors and Works*. First Edition, Delhi: Motilal Banarsidass, 1937. Third Edition, 1974.

Kudō, Noriyuki (工藤順之)

- 1995 “The notion of *kāraka* discussed by the grammarians.” *Journal of Indian and Buddhist Studies* 44-1: 484(11)-480(15).
1996 “A study on Sanskrit syntax (1): *Śabdakaustubha* on P.1.4.23.” *Nagoya Studies in Indian Culture and Buddhism: Saṃbhāṣā* 17: 27-64.
1997 “A study on Sanskrit syntax (2): *Śabdakaustubha* on P.1.4.24 [*Apādāna* (1)].” *Nagoya Studies in Indian Culture and Buddhism: Saṃbhāṣā* 18: 143-181.
1998 “A study on Sanskrit syntax (3): *Śabdakaustubha* on P.1.4.25-31 [*Apādāna* (2)].” *Nagoya Studies in Indian Culture and Buddhism: Saṃbhāṣā* 19: 83-123.
1999 “A study on Sanskrit syntax (4): *Śabdakaustubha* on P.1.4.45-48 [*Adhikaraṇa*].” *Nagoya Studies in Indian Culture and Buddhism: Saṃbhāṣā* 20: 63-87.

- 2001 “A study on Sanskrit syntax (5): *Śabdakaustubha* on P.1.4.54-55 [*Karṭṛ* and *Hetu*].”
Nagoya Studies in Indian Culture and Buddhism: Saṃbhāṣā 21: 55–85.
- Kühnau
1890 “Metrische Sammlungen aus Stenzler’s Nachlass.” *ZDMG* 44: 1–82.
- Kumar, Krishna
1939 “Identification of Bhaṭṭi and Devarāja of the Jodhpur inscription of Pratihāra Bāuka.”
IHQ 18-4: 595–602.
- Leonardi, G. G.
1972 *Bhaṭṭikāvyaṃ: Translation and Notes* (=Orientalia rheno-traiectinae 16). Leiden: E. J. Brill.
- Lienhard, Siegfried
1984 *A History of Classical Poetry: Sanskrit—Pāli—Prakrit. A History of Indian Literature*
Volume. III, Fasc. 1. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.
- Madhavan, K.
2001 *The Bhaṭṭikāvya: A Critical Appraisal*. Calcutta: Sanskrit Pustak Bhandar.
- Mazumdar, B. C.
1904 “On the Bhattikavya.” *JRAS* 36-3: 395–397.
1909 “The author of the Bhaṭṭikāvya.” *JRAS* 41-3: 759–760.
- Mazumdar, Surendra Nath
1912 “The author of the Bhattikavya.” *JPASBe* 8: 59–61.
- Miśra, Bāṅkelāla
2004 *Bhaṭṭikāvyaṃ of Śrī Bhaṭṭikavi with the Commentaries ‘Jayamaṅgalā’ by Śrī Jayamaṅgalā & ‘Sarvapaṭhīnā’ by Śrī Mallinātha Sūri. Foreword by Prof. Rajendra Midhra*
(=Sarasvatībhavana-Granthamālā 147). 2 vols. Varanasi: Sampurnanand Sanskrit University.
- Miśra, Śrīnārāyaṇa
1985 *Kāśīkāvṛtti of Jayāditya-Vāmana (along with Commentaries Vivaraṇapañcikā–Nyāsa of Jinendrabuddhi and Padamañjarī of Haradatta Miśra)* (=Ratnabharati Series 5–10).
6 vols. Varanasi: Ratna Publications.
- Mitra, Rājendralāla
1881 “Note on a manuscript of the Bhaṭṭi Kāvya.” *Proceedings of the Asiatic Society of Bengal* 57: 134–138.
- Mitsui, Junji (三井淳司)
1992 「カーヴィア文体の研究 カーヴィアの語順 I」『密教文化』180: 76–122
1993 「カーヴィア文体の研究 比喩と語合成 II」『密教文化』182: 53–101.
1996 「Kālidāsa 作 Meghadūta の文体に関する一考察」『印度学仏教学研究』45-1: 481(42)–478(45).
- Nagara, Gyōkō (長柄行光)
1984 「サンスクリット詩人の言葉の遊戯」*Philosophia* 72: 126(1)–106(21).

Nandargikar, Gopal Ragnath

1971 *The Raghuvamśa of Kālidāsa with the Commentary of the Mallinātha, Edited with a Literal English Translation, with Copious Notes in English Intermixed with Full Extracts, Illucidating the Text, from the Commentaries of Bhaṭṭa Hemādri, Chāritravardhana, Vallabha, Dinakaramiśra, Sumativijaya, Vijayagaṇi, Vijayānandasūri's Varacharaṇa-svevaka and Dharmameru, with Various Readings.* Bombay, 1891. Fifth Edition, Delhi: Motilal Banarsidass.

1979 *The Meghadūta of Kālidāsa with the Commentary of Mallinātha, a Literal English Translation, Copious Notes in English, and Various Readings.* Bombay: Gopal Narayen, 1894. Reprint, Delhi: Bharatiya Book Corporation, 1979.

Narang, Satya Pal

1969 *Bhaṭṭikāvya: A Study.* Delhi: Motilal Banarsidass.

2003 "An analysis of the prākṛta of bhāṣā-sama of the *Bhaṭṭikāvya* (canto XIII) (on the basis of *Jayamaṅgalā* and *Bharatamallika*)." In *Prajñāna-Mahodhahih: Prof. Dr. Gopinath Mohapatra Felicitation Volume* (=Vāṇī Jyotiḥ 17-18), Edited by G. K. Dasj, P. M. Rath, S. C. Dash, 61-85. Vani Vihar: P. G. Department of Sanskrit.

Nobel, Johannes

1924 "Studien zum zehnten buche des Bhaṭṭikāvya." *Le muséon: revue d'études orientales*: 37: 281-300.

Ogawa, Hideyo (小川英世)

1996 「Mahābhāṣya ad P 1.3.1 研究 (7)」『広島大学文学部紀要』56: 56-77.

2000 「バルトリハリの〈能成者〉論」『戸崎宏正博士古稀記念論文集 インドの文化と論理』所収 (pp. 533-584) 福岡: 九州大学出版会

2005 "Gamyate, Gamyamāna, Gata, Agata: the *Mūlamadhyamakakārikā* II, kk. 1-6 Re-examined." *Annals of the Research Project Center for the Comparative Study of Logic* 2: 63-75.

2008 「Vākyapadīya 「〈能成者〉詳解」(Sādhanasamuddeśa) の研究—VP3.7.45-54: 〈目的〉(karman) 論序—」『比較論理学研究』5: 23-44.

2009 「Vākyapadīya 「〈能成者〉詳解」(Sādhanasamuddeśa) の研究—VP3.7.55-58: 〈目的・行為主体〉(karmakarṭṛ) 論 (1)」『比較論理学研究』6: 23-40.

2010 「Vākyapadīya 「〈能成者〉詳解」(Sādhanasamuddeśa) の研究—VP3.7.59-63: 〈目的・行為主体〉(karmakarṭṛ) 論 (2)」『比較論理学研究』7: 7-28.

2011 「Vākyapadīya 「〈能成者〉詳解」(Sādhanasamuddeśa) の研究—VP3.7.64-66: 〈目的・行為主体〉(karmakarṭṛ) 論 (3)」『比較論理学研究』8: 33-57.

2012 「Vākyapadīya 「〈能成者〉詳解」(Sādhanasamuddeśa) の研究—VP3.7.67-69: A 1.4.51 akathitaṃ ca (1)」『比較論理学研究』9: 31-57.

Ōjihara, Yutaka (大地原豊)

1991 『宰相ラークシャサの印章—古典サンスクリット陰謀劇—』東京: 東海大学出版会

Ōrui, Jun (大類純)

1954a 「バーマハとバツティとの連関に関する一考察」『印度学仏教学論集: 宮本正尊教授還暦記念論文集』所収 (pp. 89-108) 東京: 三省堂

1954b 「印度古典修辭學史上に於けるバーマハ」『印度学仏教学研究』3-1: 80-86.

- 1955 「學風上よりのバーマハとダンディンの比較考察」『印度学仏教学研究』3-2: 441-447.
1957 「バーマハとダンディンをめぐりて」『東洋大学紀要』10: 25-34.
- Pañśīkar, Wāsudev Laxman Śāstrī
1985 *Siddhāntakaumudī with the Tattvabodhinī Commentary of Jñānendra Sarasvatī and the Subodhinī Commentary of Jayakṛṣṇa* (=The Vrajajivan Prachyabharati Granthamala 5). Bombay: NSP, 1915. Reproduction, Delhi: Chaukhamba Sanskrit Pratishthan, 1985.
- Peterson, Peter
1883-85 “Detailed report of operations in search of Sanskrit MSS. in the Bombay Circle, August 1882-March 1883.” *JBBRAS* (extra number): 1-132, (1)-(129).
- Raghavan, Venkatarama
1978 *Bhoja's Śṛṅgāra Prakāśa (Recipient of the Sahitya Akademi Award for the Best Book of Sanskrit Research)*. Third Revised Enlarged Edition, Madras: Punarvasu.
1998 *Śṛṅgāraprakāśa of Bhoja* (=Harvard Oriental Series 53). Part I. Cambridge: Harvard University Press, 1998.
- Ray, Saradaranjan
1937 *Bhatti-Kavyam. Canto I. Edited with a New Commentary. The Commentaries of Jayamangala and Mallinatha and Critical and Explanatory Notes, Text & University Questions etc.* Calcutta: K. Ray, 1910. Nineteenth Edition (Revised), 1937.
- Regmi, Śrī Śeṣarāj Śarmā
1964 *Bhaṭṭikāvyaṃ of Mahakavi Bhaṭṭi: Edited with the Chandrakalā-Viyotinī Sanskrit Hindi Commentaries.* (=HSS 136). Varanasi: CSSO.
- Renou, Louis
1940 *La Durghaṭavṛtti de Śaraṇadeva: Traité grammatical en Sanskrit du XII^e siècle. Volume I. Fascicule I: Introduction.* Paris: Belles Lettres.
- Renou, Louis and J. Filliozat (山本智教訳)
1979 『インド学大事典 第2巻』東京：金花舎
- Sanskrit Rhetoric Study Group (サンスクリット修辞法研究会)
2008 「Daṇḍin 著 Kāvyaḍarśa 『詩の鏡』 第1章—テキストならびに訳注—」『大正大学総合佛教研究所年報』30: 117-147.
2010 「Daṇḍin 著 Kāvyaḍarśa 『詩の鏡』 第2章（下）—テキストならびに訳注—」『大正大学総合佛教研究所年報』32: 120-169.
2012 「Daṇḍin 著 Kāvyaḍarśa 『詩の鏡』 第3章（下）—テキストならびに訳注—」『大正大学総合佛教研究所年報』34: 86-115.
- Sastry, P. V. Naganatha
1970 *Kāvyaḷaṅkāra of Bhāmaha: Edited with English Translation and Notes.* Tanjore: Wallace Pringing House, 1927. Second Edition, Delhi: Motilal Banarsidass, 1970.
- Śāstrī, Haraprasād Mahāmahopādhyāya
1912 “A note on Bhaṭṭi.” *JPASBe* 8: 289.
- Scharfe, Hartmut
1977 *Grammatical Literature. A History of Indian Literature Volume. V, Fasc. 2.* Wiesbaden: Otto Harrassowitz.

Schütz, C.

1837 *Fünf Gesänge des Bhaṭṭi-Kāvya: aus dem Sanskrit ins Deutsche übersetzt, nebst einer Abhandlung der Namen der Sonne und des Mondes im Sanskrit.* Bielefeld: Druck und Verlag von Velhagen & Klasing.

Shah, Nilanjana S.

1984 “Bhaṭṭi as quoted in the Durghaṭavṛtti.” *Sambodhi* 13: 35–56.

Shastri, Swami Dwarikadas

1987 *The Mādhavīyā Dhātuvṛtti [a Treatise on Sanskrit Roots Based on the Dhātupāṭha of Pāṇini] by Sāyaṇācārya (=Prāchya Bhāratī Series 1).* Varanasi: Prāchya Bhāratī Prakāshana, 1964. Second Edition, Varanasi: Tara Book Agency, 1987.

Shastri, Vidyābhūṣaṇa Pandit Rangacharya Raddi

1970 *Kāvyaḍarśa of Daṇḍin. First Edition. Edited with an Original Commentary by Vidyābhūṣaṇa Pandit Rangacharya Raddi Shastri. Second Edition. Seen through the Press by K. R. Potdar (=Government oriental series, Class A; no. 4).* Poona: BORI, 1970.

Siddhartha, Sundari

2009 *Sarasvatīkaṇṭhābharaṇam of King Bhoja (on Poetics): Text and Translation (=Kalāmūlāsāstra Series 55–57).* 3 vols. Assisted by Hema Ramanathan. New Delhi: Indira Gandhi National Centre for the Arts, 2009.

Siromani, D. T. Tatacharya

1934 *Bhāmaha's Kāvyaḍānāṅka with Udyāna Vṛtti, a Lucid Commentary, English and Sanskrit Introduction, (Index), and an Appendix Dealing with Alankarikas.* Foreword by M. Krishnamachariar. Tiruvadi: The Srinivasa Press.

Śivadatta, Mahāmahopādyaḥ Paṇḍit and Kāshīnāth Pāṇḍurang Parab

1900 *The Rāvaṇārjunīya of Bhatta Bhīma (=Kāvyaṃālā 68).* Bombay: NSP.

Söhnen, Renate

1995 “On the concept and presentation of *yamaka* in early Indian poetic theory.” *BSOAS* 58: 495–520.

Sthavira, Śrī Śīlaskandha and Śrī Ratnagopala Bhatta

1983 *Viśvaprakāśa of Śrī Maheśvara Sūri (=Chowkhamba Sanskrit Series 37. Collection of Rare & Extraordinary Sanskrit Works; Nos. 160, & 168).* Varanasi: Chowkhambā Sanskr̥t Book Depot, 1911. Second Edition, Varanasi: Chaukhamba Amarabharati Prakashan, 1983.

Sudyka, Lidia

2000 “What does the *Bhaṭṭi-kāvya* teach?” In *On the Understanding of Other Cultures*, Edited by Piotr Balcerowicz & Marek Mejer, 449–460. Warsaw: Oriental Institute, Warsaw University.

2003 “From Aśvaghoṣa to Bhaṭṭi: the development of the *mahākāvya* genre.” In *2nd International Conference on Indian Studies: Proceedings (=CIS 4–5)*, Edited by Renata Czekalska and Halina Marlewicz, 527–546. Kraków: Księgarnia Akademicka.

- 2005a “Sea images in the *Bhaṭṭikāvya* with special reference to its *sarga* XIII.” In *Love and Nature in Kāvya Literature: Proceedings*(=CIS 7), Edited by Lidia Sudyka, 125–142. Kraków: Księgarnia Akademicka.
- 2005b “Canto XII of the *Bhaṭṭikāvya*: the bhāvikatva—a guṇa or a figure of speech.” In *Encyclopaedia of Indian Wisdom: Prof. Satya Vrat Shastri Felicitation Volume*, Edited by Ramkaran Sharma, Vol. 1, 700–711. Delhi: Bharatiya Vidya Prakashan.
- Sūryakānta
1954 *Kṣemendra Studies: Together with an English Translation of his Kavikaṇṭhābharāṇa, Aucityavicāracarcā and Suvṛttatilaka* (=Poona Oriental Series 91). Poona: Oriental Book Agency.
- Tanizawa, Junzō (谷沢淳三)
2004 「kriyā, 行為, 出来事—Patañjali と Bhartṛhari—」 『人文科学論集』 38: 27–42.
- Tripathi, Gaya-Charan
1979 “The worship of Kārtavīrya-Arjuna: on the deification of a royal personage in India.” *JRAS* 111-1: 37–52.
- Trivedī, Kamalāśaṅkara Prāṇaśaṅkara
1898 *The Bhaṭṭi-Kāvya or Rāvaṇavadha Composed by Śrī Bhaṭṭi: Edited with the Commentary of Mallinātha and with Critical and Explanatory Notes* (=Bombay Sanskrit Series 56–57). 2 vols. Bombay: Government Central Book Depôt.
- 1909 *The Pratāparudrayaśobhūshaṇa of Vidyānātha with the Commentary, Ratnāpaṇa, of Kumārasvāmin, Son of Mallinātha, and with a Critical Notice of Manuscripts, Introduction, Critical and Explanatory Notes and an Appendix Containing the Kāvyaśaṅkara of Bhāmaha* (=BSPS 65). Bombay: Government Central Press.
- Tsuji Naoshirō (辻直四郎)
1973 『サンスクリット文学史』 (=岩波全書 277) 東京: 岩波書店
1974a 「インド文法学概観—サンスクリット文法附録—」 『鈴木学術財団研究年報』 11: 1–28.
1974b 「サンスクリット文学の特殊点」 『日本學士院紀要』 32-3: 121–130.
- Vasu, Śrīśa Chandra
1980 *The Aṣṭādhyāyī of Pāṇini: Edited & Translated into English*. 2 vols. Allahabad: Indian Press, 1891. Reprint, Delhi: Motilal Banarsidass, 1980.
- Vedavrata
1962–63 *Śrībhagavat-patañjali-viracitam Vyākaraṇa-Mahābhāṣyam (Śrī-kaiyaṭakṛta-pradīpe-na nāgojībhāṭṭa-kṛtena-bhāṣyapradīpoddyotena ca vibhūṣitam)*. 5 vols. Gurukul Jhajar (Rohatak): Hairyaṇā Sāhitya Saṁsthāna.
- Velankar, H. D.
1948–49 “Prosodial practice of Sanskrit poets.” *JBRAS* 24–25: 49–92.
- Wada, Yūgen (和田悠元)
2012 「*Bhaṭṭikāvya* 第1章—テキストと訳注—」 『インド論理学研究』 4: 275–290.

Warder, A. K.

- 1977 *Indian Kāvya Literature. Volume Three. The Early Smallieval Period (Śūdraka to Viśā-khadatta)*. Delhi: Motilal Banarsidass.
 1983 *Indian Kāvya Literature. Volume Four. The Ways of Originality (Bāṇa to Dāmodara-gupta)*. Delhi: Motilal Banarsidass.
 1988 *Indian Kāvya Literature. Volume Five. The Bold Style (Śaktibhadra to Dhanapāla)*. Delhi: Motilal Banarsidass.

Winternitz, Moritz (中野義照訳)

- 1966 『インドの純文学』 (=インド文献史第5巻) 和歌山: 日本印度学会
 1973 『インドの学術書』 (=インド文献史第6巻) 和歌山: 日本印度学会

Yagi, Tōru (八木徹)

- 1998 「宣誓—文法学の視点から—」 『インド思想史研究』 10: 5–17.

Yamasaki, Kazuho (山崎一穂)

- 2012 「クシェーメンドラの詩論書に引用されるラージャシェーカラの詩節について」 『広島大学大学院文学研究科論集』 72: 13–34.

Yokochi, Yūko (横地優子)

- 2008 「サンスクリット詩の理解に向けて」 平成17年度～平成19年度科学研究費補助金基盤研究 (A) 研究成果報告書『多言語社会における文学の歴史的展開と現在: インド文学を事例として』 (研究代表者 水野善文、課題番号 17202009) 所収 (pp. 101–114) 東京

Zachariae, Theodor

- 1933–34 “Zitate aus buddhistischen Sanskritwerken.” *Zeitschrift für Indologie und Iranistik* 9: 1–16.

付記 前号論文の正誤表

昨年本誌に発表した拙論 (川村 [2012a]) 中に、単純な誤植や明らかな誤訳等、加筆・修正すべき点が後日になって多数発見されたため、以下に正誤表を付す。本文の訂正箇所は頁数と行数、脚注の訂正箇所は頁数と脚注番号と行数で示した。

頁・行	誤	正
89.12	第5章途中まで	第5章第96詩節まで
89.14–15	第5章途中から	第5章第97詩節から
89 (fn. 28.4)	諸規則を寄せ集めた規則	諸規則を寄せ集めた詩節
89 (fn. 28.24)	第5章の途中	第5章第97詩節
89 (fn. 28.25)	第5章終わり頃	第5章第97詩節
90 (fn. 31.9–10)	vyākaraṇa は特徴付けられるべきものと特徴付けるものを意味する	特徴付けられるべきもの (語) と特徴付けるもの (文法規則) の総体が vyākaraṇa である
90 (fn. 32.19)	ラーマの誕生をはじめとする	『ラーマの誕生』等 [と呼ばれる]
91 (fn. 33.35)	<i>Raghavaṃśa</i>	<i>Raghuvamśa</i>
92.7	Bāmaha	Bhāmaha

93 (fn. 47.2)	//	(削除)
94 (fn. 48.10)	「海岸」	「海底」
94 (fn. 48.11)	意味を	語源的な意味を
94 (fn. 49.2-3)	含意されている	意図されている
94.20	vivādiṣatām	vivadiṣatām
95.15	次のように	次のように
96 (fn. 62.8)	〈解説〉を通じて	さらに〈解説〉が加わることで
96 (fn. 62.9)	それは退けられる	【反論】それは退けられる
97 (fn. 63.9-11)	実に... ならない	何故なら... ならないから
100 (fn. 73.12-13)	その場合... は述べられるのか	従って... が定式化されているのか
100 (fn. 73.34-35)	さらにまた	そしてそのような場合
100 (fn. 73.36)	他方、	他 [の原因] に基づいて
109 (fn. 94.7)	ca akarmakebhyaḥ	cākarmakebhyaḥ
109 (fn. 95.18)	過去の意味で	[行為が] 過去時に属する時
110 (fn. 96.10-15)	テキストの読みを... ならない。	(削除)
118.27	Depot	Depôt
119.27	<i>Kāvjādarśa</i>	<i>Kāvjādarṣa</i>
119.47-48	<i>Grammer</i>	<i>Grammar</i>
120.40	kāraka	kāraḥ
120.27	<i>Annalas</i>	<i>Annals</i>
121.29	<i>Bhaṭṭikāvyaṃ</i>	<i>Bhaṭṭikāvyaṃ</i>
121.31	Katre, Sumitra G.	Katre, Sumitra Mangesh.
121.34	teach.	teach?
122.13	Depot	Depôt
123.3	正誤表に	正誤表を

(かわむら ゆうと、広島大学大学院 [インド哲学])